

2026 年 9 月

食料安全保障月報 (第 63 号)



令和 8 年 9 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021 年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月 1 回、月末を目処に公表します。

2026 年9月食料安全保障月報(第 63 号)

目 次

概要編

I 2026 年9月の主な動き	1
II 2026 年9月の穀物等の国際価格の動向	4
III 2026/27 年度の穀物需給(予測)のポイント	4
IV 2026/27 年度の油糧種子需給(予測)のポイント	4
V 今月の注目情報「中国の主要穀物等の需給動向及び 10 年後の展望」 (資料)	5
1-1~3 穀物等の主要輸出国の生産量(過去 10 年平均との増減比較)	1 1
1-4 穀物等の国際価格の動向	1 4
1-5 サプライチェーン等に関する状況	1 5
2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 7
3 穀物等の期末在庫率の推移(穀物全体、品目別)	1 8
4 加工食品の主な輸入原材料(穀物等を除く)の状況	2 0
5 食品小売価格の動向	2 4
6 海外の畜産物の需給動向(ALIC 提供)	2 5
7 FAO 食料価格指数	2 6

今月のコラム

「ロシア／ウクライナ農業に見る静かな変容——ライ麦編」	2 7
-----------------------------	-----

品目別需給編

I 穀物	
1 小麦	1
<米国> 2026/27 年度の輸出量は前年度から 14.6%減少する見込み	
<カナダ> 2026/27 年度の生産量は前年度から 11.2%減少する見込み(USDA)	
<豪州> 2026/27 年度の生産量は前年度から 17.0%減少する見込み(ABARES)	
<EU27> 2026/27 年度の生産量は前年度から 8.3%減少する見込み(EC)	
<ロシア> 2026/27 年度の生産量は前年度から 2.5%減少する見込み	
<ウクライナ> 2026/27 年度の生産量は前年度から 7.9%増加する見込み	
<中国> 2026/27 年度の輸入量は前年度から 9.9%増加する見込み	
2 とうもろこし	9
<米国> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 7.2%減少する見込み	
<ブラジル> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.4%減少する見込み	
<アルゼンチン> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 12.7%減少する見込み	
<ウクライナ> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 2.9%増加する見込み	
<中国> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.9%増加する見込み	

3 コメ	1 5
<タイ> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.9%減少する見込み	
<米国> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 23.5%減少する見込み	
<中国> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 0.5%増加する見込み	
<インド> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 4.6%減少する見込み	
<ベトナム> 2026/27 年度の生産量は、前年度から 0.4%減少する見込み	
II 油糧種子	
大豆	2 1
<米国> 2026/27 年度の生産量は前年度から 6.4%増加する見込み	
<ブラジル> 2026/27 年度の生産量は前年度から 3.0%増加する見込み	
<カナダ> 2026/27 年度の生産量は前年度から 12.7%増加する見込み(USDA)	
<中国> 2026/27 年度の輸入量は前年度から 1.8%増加する見込み	
<アルゼンチン> 2026/27 年度の生産量は前年度から 1.0%増加する見込み	
(参考1) 本レポートに使用されている各国の市場年度について(2026/27 年度)	2 7
(参考2) 単位換算表	2 8
(参考3) クロップカレンダー	2 9

表紙写真: ベトナム・アンザン省のジャポニカ米。乳熟期から糊熟期を迎えている。
一部で病害虫の発生がみられたものの、被害は軽微である。
(撮影日:2026 年9月 12 日)

(概要編)

I 2026 年9月の主な動き

主要穀物等の生産量等について

9月の米国農務省(USDA)の需給報告によれば、2026/27年度の各品目の生産量等の状況は以下のとおり。

小麦の生産量は、カザフスタン等で下方修正されたものの、豪州、カナダ、ウクライナ等で上方修正され、前月から 3.1 百万トン上方修正された。前年度からは、トルコ、モロッコ、インド、シリア、イラン、ウクライナ等で増加するものの、米国、EU、アルゼンチン、豪州、カナダ、カザフスタン、ロシア、ブラジル等で減少し、世界全体の生産量は前年度から 21.6 百万トン減の 822.4 百万トンとなる見通し。

とうもろこしの生産量は、EU 等で上方修正されたものの、米国、インド等で下方修正され、前月から 7.9 百万トン下方修正された。前年度からは、中国、カナダ、ロシア等で増加するものの、米国、アルゼンチン、EU、インド、ブラジル、南アフリカ等で減少し、世界全体の生産量は前年度から 39.9 百万トン減の 1,291.0 百万トンとなる見通し。

大豆の生産量は、インド等で下方修正されたものの、米国、カナダで上方修正され、前月から 0.1 百万トン上方修正された。前年度からは、パラグアイ、ロシア等で減少するものの、米国、ブラジル等で増加し、世界全体の生産量は前年度から 12.9 百万トン増の 442.4 百万トンと史上最高となる見通し。

期末在庫量は、小麦、とうもろこし及び大豆とも前年度から減少となっている。消費需要は引き続き旺盛であり、注視が必要。

FAO(国連食糧農業機関)が公表した8月の食料価格指数(最新値)については、全ての価格指数が上昇したことにより、7月の 130.8 から 1.9%(2.5 ポイント)上昇し 133.3(参考:2025 年8月 130.0)。

海上運賃については、バルチック海運指数(穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数)が、8月末時点 3,186(7月末時点 2,732、2025 年平均値 1,679)。



写真:米国・オハイオ州のとうもろこし。登熟後期から成熟期へと移行しているが、写真の圃場では乾燥が進んでいない。作柄は良好。

撮影日:2026 年9月4日



写真:カナダ・オンタリオ州の大豆。成熟期に近づいており、成熟に伴う葉の黄化が広く見られる。

撮影日:2026 年9月 16 日

撮影者:Leonard Hobbs

ウクライナの生産・輸出動向

9月のUSDAの需給報告によれば、2026/27年度のウクライナの小麦の生産量は、前月予測から60万トン上方修正され、単収が史上最高となることを受け、前年度から8%増加し2,600万トンとなる見込み。一方、輸出量は、黒海での混乱を受け前月予測から100万トン下方修正され、前年度から11%減の1,250万トンとなる見込み。

2026/27年度のとうもろこしの生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収が増加することを受け、前年度から3%増加し3,180万トンとなる見込み。一方、輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から2%減の2,200万トンとなる見込み。

現地情報会社によれば、9月14日現在、2026/27年度の小麦の収穫は終了し、2,492.6万トンが収穫されている。とうもろこしは収穫が開始され、収穫進捗率は1%となっている。高温・乾燥で登熟が早まっており、単収減少の懸念がある。また、2027/28年度の冬小麦の作付けが開始されており、9月8日現在の作付進捗率は前年と同水準の1%。

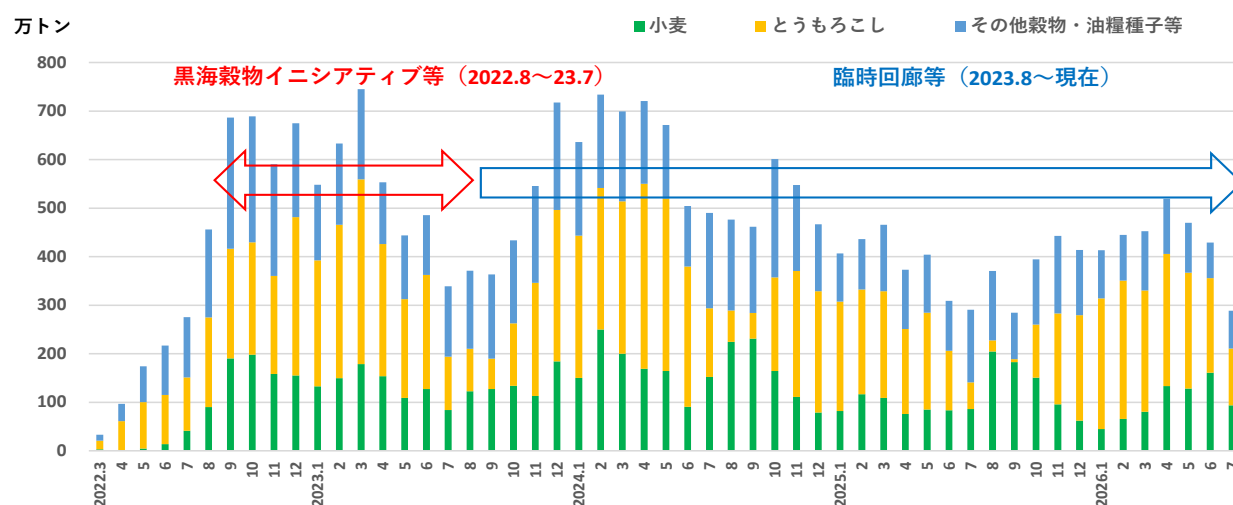
穀物・油糧作物の輸出については、黒海港湾の稼働がロシアによる攻撃激化により依然としてほぼ停止状態であり、大半が海上輸送されるととうもろこし及び小麦の輸出が大幅に減少している。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。

黒海穀物イニシアティブの停止後、ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関(IMO)に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊のほか、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出等が行われているものの、2026年7月以降、ロシアによるオデーサ港等への攻撃が激化し、穀物の輸出に支障をきたしており、動向について注視する必要。

(参考) ウクライナの輸出量の推移(月毎)(2022年3月～2026年7月)



出典:ウクライナ経済・環境・農業省、ウクライナ穀物協会のデータをもとに農林水産省で作成

注:データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計

○ 豪州:2026/27 年度の小麦・大麦・なたねの生産量は前月予測から上方修正

USDA によれば、2026/27 年度の豪州の小麦生産量は、前月予測から 11%上方修正されたものの、前年度から 14%減、過去5年平均から 10%減の 3,100 万トンとなる見込み(図)。

これは、収穫面積が前月予測から変更なく、前年度から 11%減、過去5年平均から 14%減の 1,100 万ヘクタールとなるとともに、単収が前月予測から 11%上方修正されたものの、前年度から3%減、過去5年平均から4%増の 2.82 トン/ヘクタールとなることによる。作付期には、早期の降雨により土壌水分が十分に確保され、作物の発芽が順調に進み、7、8月も降雨が続き、大部分の小麦生産地域で好条件が維持された一方、クイーンズランド州及びニューサウスウェールズ州北部では、乾燥状態が続いた。全体としては、大部分が十分な水分を確保しており、9月にかけて降雨が続けば、生育が更に促進される見込み。

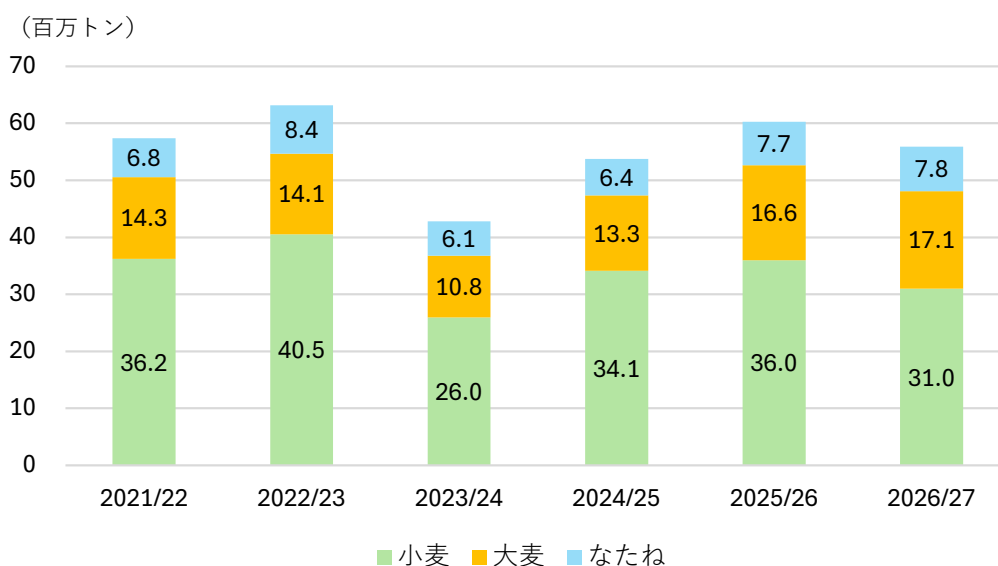
2026/27 年度の豪州の大麦生産量は、前月予測から 21%上方修正、前年度から3%増、過去5年平均から 24%増の 1,710 万トンと史上最高の見込み(図)。

これは、収穫面積が前月予測から変更なく、前年度から7%増、過去5年平均から 12%増の 510 万ヘクタールとなるとともに、単収が前月予測から 21%上方修正、史上最高の前年度から4%減、過去5年平均から11%増の 3.35トン/ヘクタールとなることによる。天候に恵まれ、土壌水分状態も良好であり大麦の播種は予定通り行われた。小麦やなたねなどに比べ窒素肥料が少なく済む大麦は農家から好まれ、史上2番目の作付面積となった。また、大麦生産地域で適期に降雨があったため、大麦は通常より早く栄養成長期を終えることができた。

2026/27 年度の豪州のなたね生産量は、前月予測から 15%上方修正、前年度から2%増、過去5年平均から 10%増の 780 万トンと史上2番目の見込み(図)。

これは、収穫面積が前月予測及び前年度から3%増、過去5年平均から7%増の 380 万ヘクタールとなるとともに、単収が前月予測から 11%上方修正、前年度から1%減、過去5年平均から3%増の 2.05 トン/ヘクタールとなることによる。ビクトリア州及びサウスオーストラリア州では平年を上回る降雨量となり、単収と生産量見通しが増加した。同様の好条件は、収穫面積、単収、生産量が史上最高の 2022/23 年度の生育期にも見られた。

図:豪州の小麦・大麦・なたね生産量の推移



出典:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

II 2026 年9月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、8月末、270ドル/トン台後半で推移。9月に入り、ロシア・ウクライナの和平への期待等を受け下落し、9月中旬現在、250ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、8月末、200ドル/トン台前半で推移。9月に入り、米国の高温懸念等を受け200ドル/トン半ばまで上昇したものの、小麦価格下落による価格押し下げ等を受け、190ドル/トン台後半まで下落した。その後、米国の単収が減少するとの観測等を受け上昇し、9月中旬現在、200ドル/トン台前半で推移。

コメは、8月末、480ドル/トン台前半で推移。9月に入り、タイバーツ高等を受け堅調に推移し、9月中旬現在、490ドル/トン台で推移。

大豆は、8月末、460ドル/トン台後半で推移。9月に入り、中国による買付け、米国の高温・乾燥懸念等を受け480ドル/トン台半ばまで上昇したものの、米国農務省需給報告で米国の2026/27年度の生産量が市場予測を上回ったこと等を受け下落し、9月中旬現在、470ドル/トン台前半で推移。

(注:小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場の期近終値で9月14日まで。コメはタイ国家貿易取引委員会公表価格で9月16日まで。)

III 2026/27 年度の穀物需給(予測)のポイント

9月の USDA の需給報告によれば、2026/27 年度の世界の穀物全体の生産量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは減少し、穀物全体でも減少となり、前年度から 2.5%減の 29.44 億トン。

消費量は、前年度から、小麦、コメは増加、とうもろこしは減少し、穀物全体では増加となり、前年度から 0.1%増の 29.82 億トンと、消費量が生産量を上回る見込み。

貿易量は、前年度から、コメは増加、小麦、とうもろこしは減少し、穀物全体では減少となり、前年度から 5.0%減の 5.28 億トン。

期末在庫量は、前年度から 4.6%減の 7.78 億トン。期末在庫率も前年度を 1.3 ポイント下回り 26.1% (P17 資料2参照)。

(注:数値は9月の USDA「PS&D」による)

IV 2026/27 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

9月の USDA の需給報告によれば、2026/27 年度の油糧種子全体の生産量は、前年度を上回り 7.23 億トン。

消費量も前年度を上回り 7.20 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度を上回り 1.47 億トンとなるものの、期末在庫率は前年度を下回り 20.4%。

(注:数値は9月の USDA「PS&D」による)

V 今月の注目情報: 中国の主要穀物等の需給動向及び10年後の展望

2026年4月20日、中国農業農村部は、中国農業展望大会において、今後10年間の農業を展望する「中国農業展望報告(2026-2035)」を発表した(昨年も同時期に発表)。同報告から、中国の主要穀物等について、2025/26年度の需給動向及び10年後の展望等をまとめた。

注: 文中の「2025/26年度」等は市場年度で、中国のとうもろこし及び大豆は2025年10月から2026年9月、小麦及びコメは2025年7月から2026年6月(品目別需給編参照)。

注2: 文中の図は、中国の面積単位である1ムーを0.0667ヘクタールで換算した。本文上に記載の数値は、展望報告より引用した。

1 主要穀物及び大豆の生産動向・展望

(1) 主要穀物・大豆

「中国農業展望報告(2026-2035)」(2026.4)(以下、「展望報告」という。)によれば、主要穀物・大豆について、2035年までの10年の生産量は、主食となるコメはやや減少するものの、ほぼ安定、小麦はわずかに増加。主に畜産用の飼料となるととうもろこしと大豆は大幅な増加となっている(図1)。特に大豆は、当該品目の中では、唯一作付面積を純増させる見通しとなっている(図12)。

図1 中国の主要穀物・大豆生産量の実績及び予測

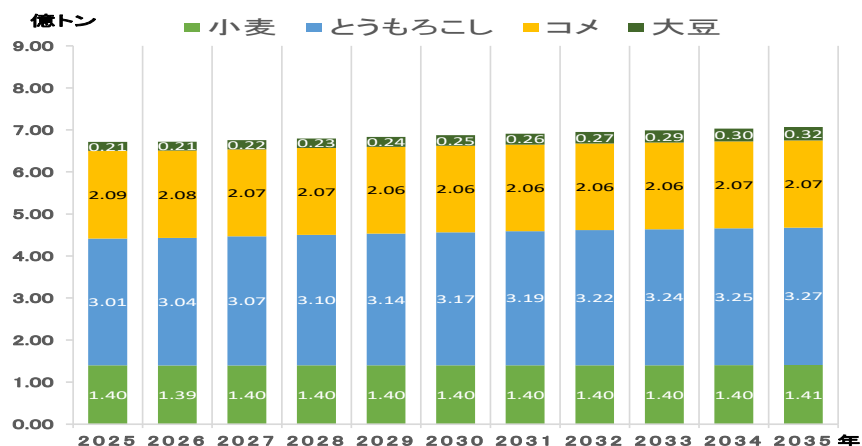
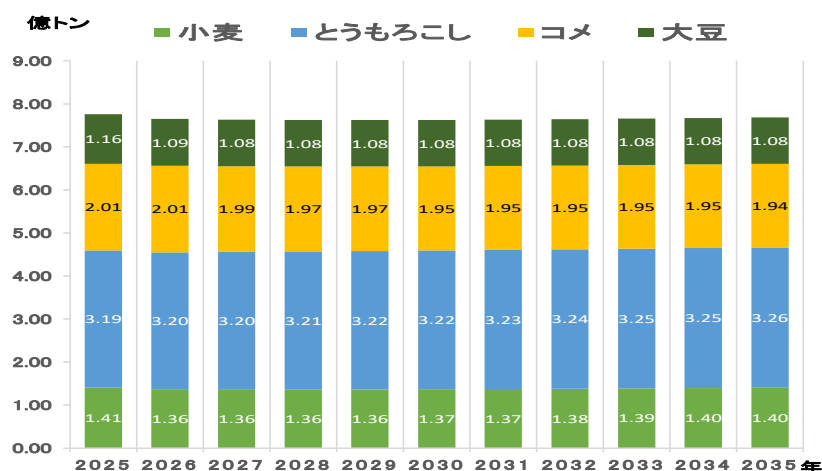


図2 中国の主要穀物・大豆消費量の実績及び予測



出典: 中国農業展望報告(2026-2035)をもとに農林水産省で作成

(2) 小麦

展望報告によれば、小麦は中国の主要な主食用穀物の1つであり、食料安全保障戦略における「穀物の基本的自給、主食用穀物の絶対的安全」目標において重要な地位を占めている。2025 年の小麦の作付面積は 2,358.2 万ヘクタール、生産量は1億 4,007 万トンと、いずれも前年(作付面積 2,357 万ヘクタール、生産量1億 4,010 万トン)と比べ、わずかな減少となった。また 2026 年の生産量は1億 3,931 万トンと、前年から 0.5%減少する見込み。しかし、今後 10 年間、小麦の作付面積はほぼ安定を維持し、単収と生産量は増加すると見込まれている(図3)。

2025 年の消費量は、1億 4,062 万トンと前年から 4.8%増加した。このうち、食用消費量は、8,612 万トンと前年と比べ 0.2%減少した。飼料用消費は、2,532 万トンと前年と比べ 40.7%の増加となり、これが 2025 年の消費量増加の主要因となっている。2025 年は、小麦とうもろこしの価格差が縮小し、更に一部とうもろこし産地においてフモニシン(とうもろこしに発生するカビ由来の毒素で飼料品質の低下を招く)の影響を受け、良質な飼料用とうもろこしの供給が減少し、飼料企業が小麦を代替品として調達するようになった。また、小麦の作付けが全体的に遅れ、遅まき条件下での出芽率確保のため、農家が1ムー(0.0667 ヘクタール)当たりの播種量を引き上げたことによる種子用小麦の消費が増加した(図4)。

2025 年の小麦及び小麦製品(以下「小麦等」という。)の輸入量は、397.86 万トンと前年と比べ 64.4%減少した。輸入量が大幅に減少した要因は、主に「生産が需要を上回る」需給構造が輸入需要を抑制したこと、また良質な小麦品種の普及が構造的な需給におけるギャップを埋めたこと、更には国が小麦等の輸入ペースを調整したことが挙げられている。主要輸入先国としては、カナダ(271.3 万トン、輸入量シェア 68.2%)、豪州(102.1 万トン、同 25.7%)、ロシア(11.5 万トン、同 2.9%)となっている。2026年の小麦等輸入量は、輸入小麦と国産小麦の構造的な差異が存在することから、引き続き輸入小麦が必要となり、前年に比べ 76.8%増の 704 万トンと予測されている。国産小麦の総量確保や品質の向上を図り、種子産業の振興及び良質な専用小麦の供給能力が向上するにつれ、輸入依存度は低下し、2030 年は基準期(2023～25 年の平均値。以下同じ。)と比べ 46.9%減の 483 万トン、2035 年は 411 万トンと、年平均で 7.6%の減少が予測されている(図5)。

図3 中国の小麦の生産量、作付面積、単収の実績及び予測

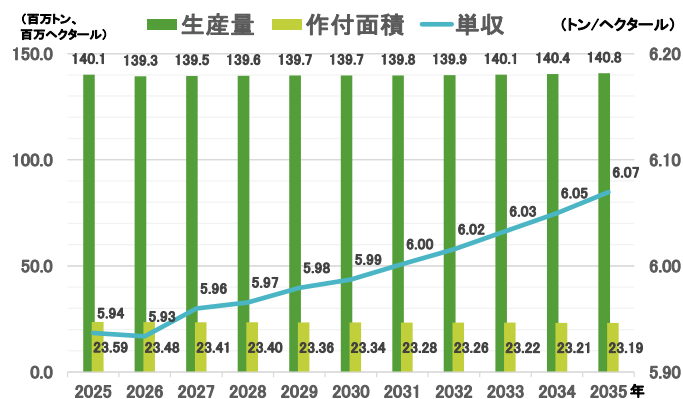


図4 中国の小麦の用途別消費量の実績及び予測

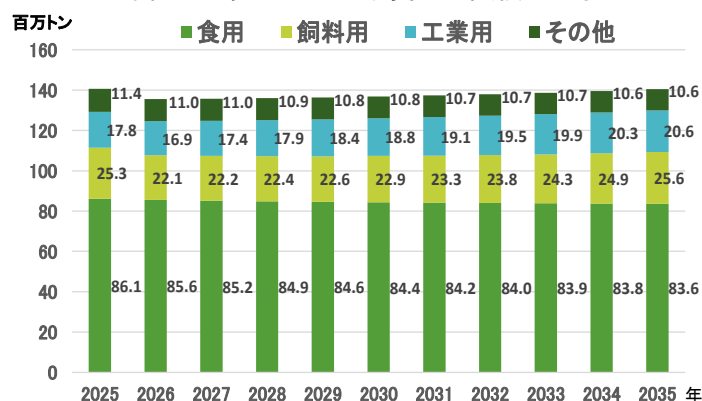
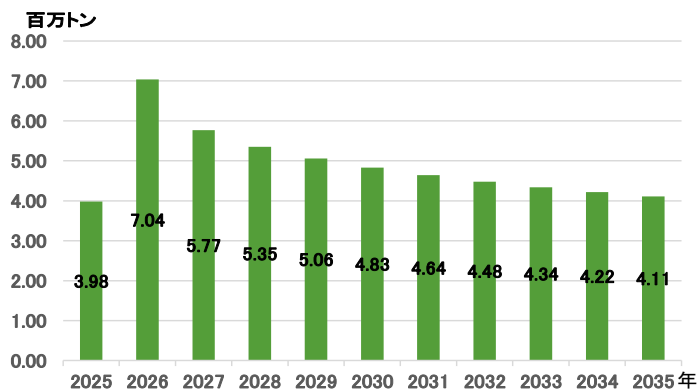


図5 中国の小麦輸入量の実績及び予測



出典: 中国農業展望報告(2026-2035)をもとに農林水産省で作成

中国国家统计局(2026.7.10)によれば、2026/27 年度の夏季産小麦の作付面積は、前年度から 0.3%(6.7 万ヘクタール)減の 23.01 百万ヘクタール。単収は、前年度から 0.9%(0.05 トン/ヘクタール)増の 6.04トン/ヘクタール。生産量は、前年度から 0.6%(0.78 百万トン)増の 139.0 百万トンとなっている。

(3) とうもろこし

展望報告によれば、2025 年のとうもろこし生産量は、前年と比べ 2.1%増の3億 124 万トンと、2021 年から連続して過去最高を更新し、初の3億トンの大台を突破、食糧増産への貢献率は 75%を超えた。作付面積は、2015 年の過去最高にはわずかに及ばなかったものの、政策支援、技術進歩、市場における需要の堅調さ等、複数の要因に牽引され、4,493 万ヘクタールと前年と比べ 0.5%増加し、単収も前年と比べ 1.8%増の 6.7 トン/ヘクタールとなった(図6)。

とうもろこしの消費のうち、飼料用消費が約 70%と工業用消費が約 23%を占めている。2025 年の消費量は、飼料用需要が増加、高度な加工利用はやや減少したが、全体としては安定的な増加傾向を示し、前年に比べ 1.8%増の3億 1,875 万トンとなっている。このうち飼料用消費量は、畜産業界の発展が順調なことを受け、前年と比べ 3.5%増の2億 2,330 万トンとなった(図7)。

中国国家统计局によれば、2025 年の全国の豚の出荷頭数は7億 1,973 万頭と、前年と比べ 2.4%(1,716 万頭)増、豚肉生産量は 5,938 万トンで記録を更新した。全国の豚、牛、羊、家禽の食肉生産量が初めて1億トンを突破し、前年に比べ 4.2%(409 万トン)増の1億 194 万トンとなり、とうもろこしの飼料用消費にとって安定的な需要基盤を提供した。

2025 年の輸入量は、国内のとうもろこし生産量の持続的な増加及び輸入関税割当の厳格な執行等を受け、前年に比べ 80.6%減の 264.68 万トンとなり、輸入額と共に減少した。輸入先国別には、ブラジル(輸入量シェア 60.7%)、ロシア(同 16.8%)、ミャンマー(同 10.9%)となっている。

2026 年の輸入量は、前年に比べ 164.2%増の 700 万トンが見込まれている。国内のとうもろこし生産が増加するにつれ、生産と需要の差異は縮小し、輸入とうもろこしの需要が減少することから、2030 年は基準期と比べ 68.2%減の 460 万トン、2035 年は基準期比 75.1%減の 360 万トンと年平均で 13.0%減が予測されている(図8)。

図6 中国のとうもろこしの生産量、作付面積、単収の実績及び予測

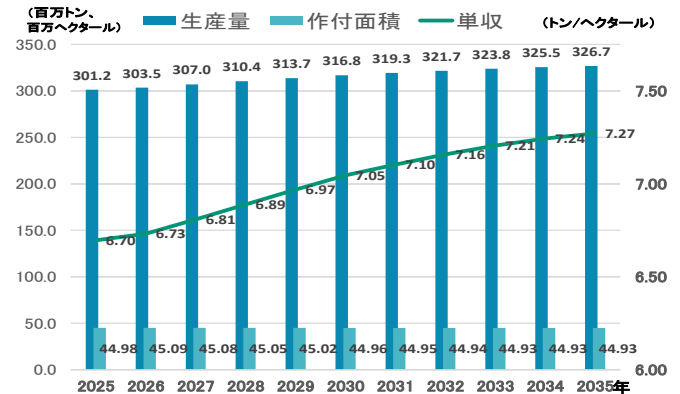


図7 中国のとうもろこしの用途別消費量の実績及び予測

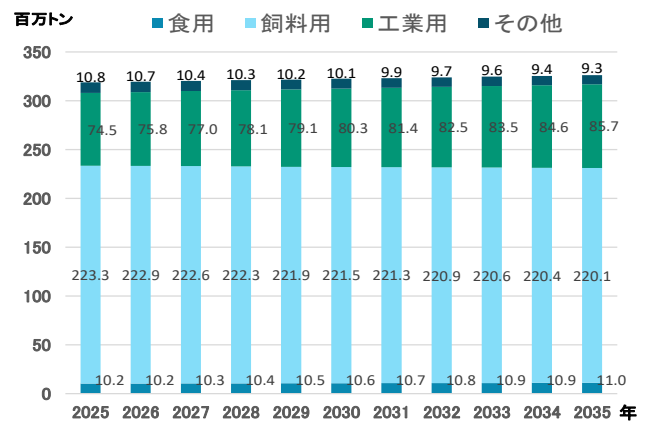
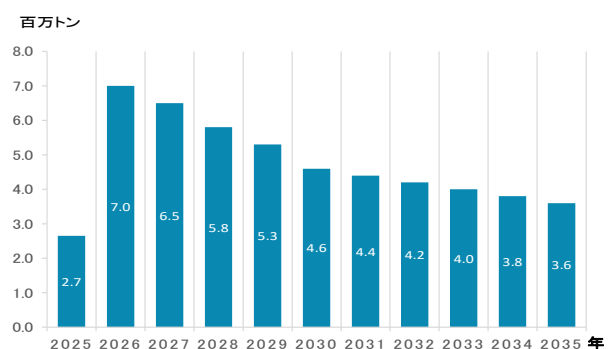


図8 中国のとうもろこし輸入量の実績及び予測



出典: 中国農業展望報告(2026-2035)をもとに農林水産省で作成

中国農業農村部「農産品供需形勢分析 2026 年8月号」(2026.8.12)によれば、2025/26 年度のとうもろこしの作付面積は、前年度(4,474.1 万ヘクタール)と比べ 0.5%増の 4,496.1 万ヘクタール、生産量は前年度(2億 9,492 万トン)と比べ 2.1%増の3億 124 万トンが見込まれている。2026/27 年度の生産量は、主要生産地の気候が比較的良好で、作物の生育が概ね好調なことを受け、前年度より 1.6%増の3億 600 万トンと見込まれている。

図9 中国のコメの生産量、作付面積、単収の実績及び予測

(4) コメ(粳米)

展望報告によれば、コメ(粳米。以下同じ。)は中国の主要な主食用穀物の1つであり、食用消費量の 60%以上を占める。2025 年のコメの作付面積は 2,901 万ヘクタールで、前年(2,900 万ヘクタール)と比べほぼ横ばい、単収は 7.2 粳トン/ヘクタール、生産量が2億 904 万トンと、前年(単収 7.16 粳トン/ヘクタール、生産量2億 754 万トン)に比べ、それぞれ 0.6%及び 0.7%増加した。単収の着実な向上と共に、国家のコメ最低買付価格政策の下支えにより、全国の作付面積が安定した。更に国はコメ補助金及び農業保険の適用範囲を継続的に拡大し、主産地及び主要食糧生産省への支援を強化、その結果、農家の作付意欲が向上した。

2026 年のコメの生産量は、前年から 0.5%減少し、2億 802 万トンと予測されている。2030 年の生産量は2億 603 万トンと基準期と比べ 0.8%減。2035 年は、2億 730 万トンで基準期と比べほぼ横ばいとなり、一定の生産水準を保つことが見込まれる(図9)。

2025 年のコメの消費量は前年に比べ 0.4%増加し、2億 110 万トンとなった。高齢化の加速、食生活構造の変化、消費の多様化、人口減少等の影響を受け、食用消費量は1億 5,530 万トンと、前年と比べ 0.1%減となった。一方、米粉やビーフン等のコメ加工製品の需要増、また胚芽米やコメ糠油等の加工産業の急速な発展という要因を受け、工業消費量は前年と比べ 1.1%増の 1,770 万トンとなった。更に近年、豚や食肉用家禽等の畜産生産能力の向上に加え、とうもろこし価格の上昇を受けたコメの飼料用としてのコストパフォーマンスの際立ちにより、コメの飼料用使用量が

増加し、飼料用消費量は、前年と比べ 4.6%増の 1,650 万トンとなった(図 10)。2025 年は主要なコメ生産国で豊作となり、米価は低水準まで下落し、国際的な精米(タイ米の碎米率 25%精米を指す)の価格が国内価格を下回り、輸入精米の価格優位性が明確となり、輸入量は大幅に増加した。精米輸入量は前年と比べ 89.6%増の 314 万トン(粳米換算 449 万トン)(図 11)。

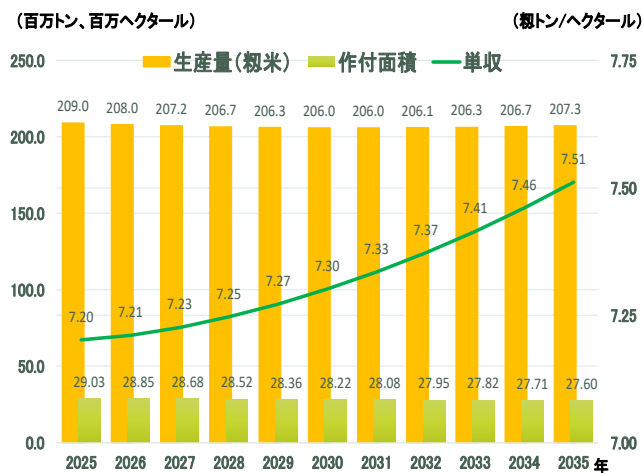


図 10 中国のコメ(粳米)の用途別消費量の実績及び予測

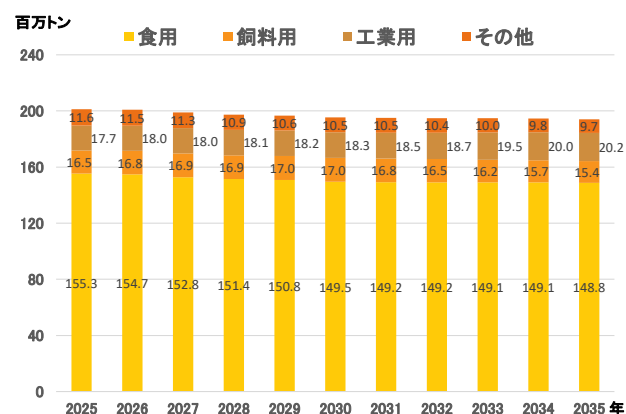
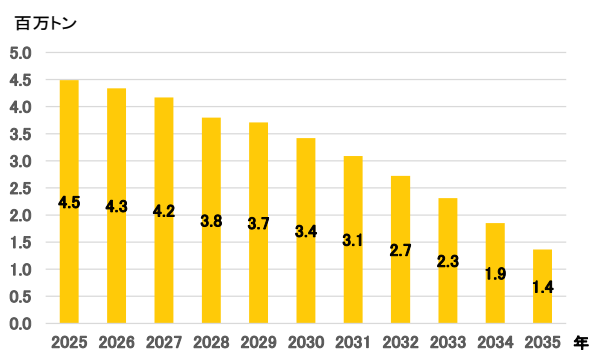


図 11 中国のコメ(粳米)輸入量の実績及び予測



出典: 中国農業展望報告(2026-2035)をもとに農林水産省で作成

輸入先国別では、ミャンマー(輸入量シェア 33.3%)、タイ(同 23.0%)、ベトナム(同 22.9%)、インド(同 8.8%)、カンボジア(同 6.4%)となり、総輸入量の 94.4%を占める。2026 年の精米輸入量は、前年と比べ 3.3%減の 304 万トン(粳米換算 434 万トン)が見込まれている。2030 年は、基準期と比べ 3.4%減の 239 万トン(粳米換算 342 万トン)、2035 年は基準期と比べ 61.6%減の 95 万トン(粳米換算 136 万トン)で、年平均 9.1%の減少が予測されている。一方、精米輸出量は増加傾向を示す見通しで、中国の対外開放の深化、各国との協力関係の推進、良質ブランド品種の改善等が掲げられ、2026 年の精米輸出量は、前年に比べ 42.3%増の 245 万トン(粳米換算 350 万トン)、2030 年は基準期と比べ 138.7%増の 354 万トン(粳米換算 506 万トン)、2035 年は基準期と比べ 183.0%増の 420 万トン(粳米換算 600 万トン)と、年平均 11.0%の増加が予測されている。

中国国家统计局(2026.8.21)によれば、2026 年の二期作早稲米の作付面積は、前年と比べ微増(0.03%、0.14 万ヘクタール増)の 474.4 万ヘクタール、単収は前年(6.02 粳トン/ヘクタール)と比べ 0.8%減の 5.96 粳トン/ヘクタールが見込まれ、生産量は、前年(2851.3 万トン)と比べ 0.8%減の 2,829.2 万トンと予測されている。

図 12 中国の大豆の生産量、作付面積、単収の実績及び予測

(5) 大豆

展望報告によれば、2025 年の大豆の作付面積は、前年と比べ 0.6%減の 1,026 万ヘクタール、単収は前年と比べ 2.3%増の 2.04 トン/ヘクタール、生産量は前年に比べ 1.3%増の 2,091 万トンとなっている。第 14 次5か年計画期間(2021-25 年)において、中国政府は大豆の作付拡大を重要課題として位置付け、穀物及び油糧作物の大面積単収向上行動を開始し、大豆生産に対する各種支援施策を整備し、生産能力の向上を図った。

2026 年の大豆の生産量は前年に比べ 0.8%増の 2,108 万トンが見込まれている。2030 年の生産量は 2,475 万トンと、基準期と比べ 19.0%増、2035 年の生産量は 3,233 万トンと基準期と比べて 55.4%増、年平均で 4.5%増が見込まれている(図 12)。

2025 年の消費量は、国内飼料需要の増加及び搾油の生産能力拡大による原料加工需要増が牽引となり、前年に比べ 6.2%(675 万トン)増の 1 億 1,570 万トン増となった。食用消費量は、厳しい経済状況下、外食・食品加工業界の消費需要が低迷し、大豆加工食品企業の原料調達が慎重となったこと等を受け、前年に比べ 2.4%減の 1,233 万トンと消費量の 10.7%を占めた(図 13)。

第 14 次5か年計画期間(2021-25 年)において、大豆の輸入構造は顕著に変化し、南米市場の主導的地位は継続的に強化され、輸入は徐々にブラジルに集中し、米国への依存度が低下した。2025 年の大豆の輸入量は過去最高を記録し、前年に比べ 6.5%(680 万トン)増の 1 億 1,183 万トンとなった(図 14)。

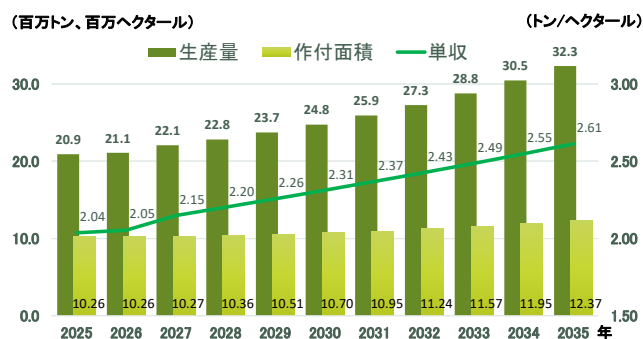


図 13 中国の大豆の用途別消費量の実績及び予測

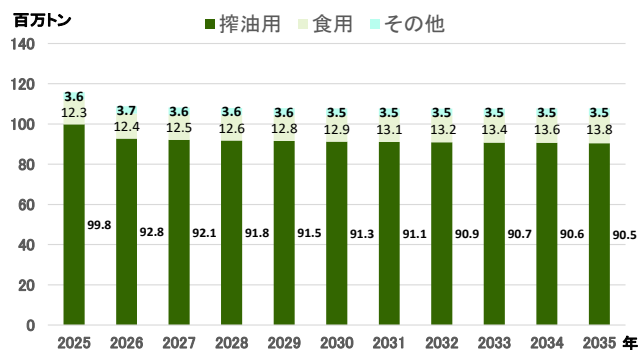
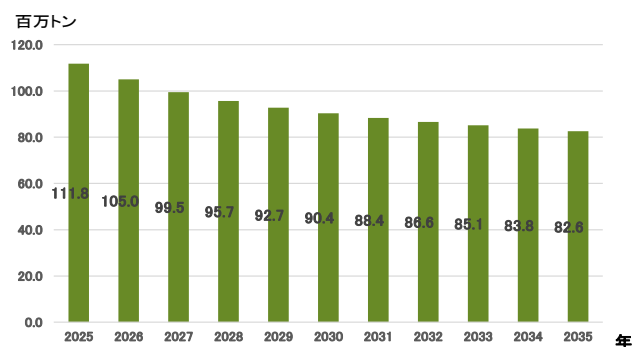


図 14 中国の大豆輸入量の実績及び予測

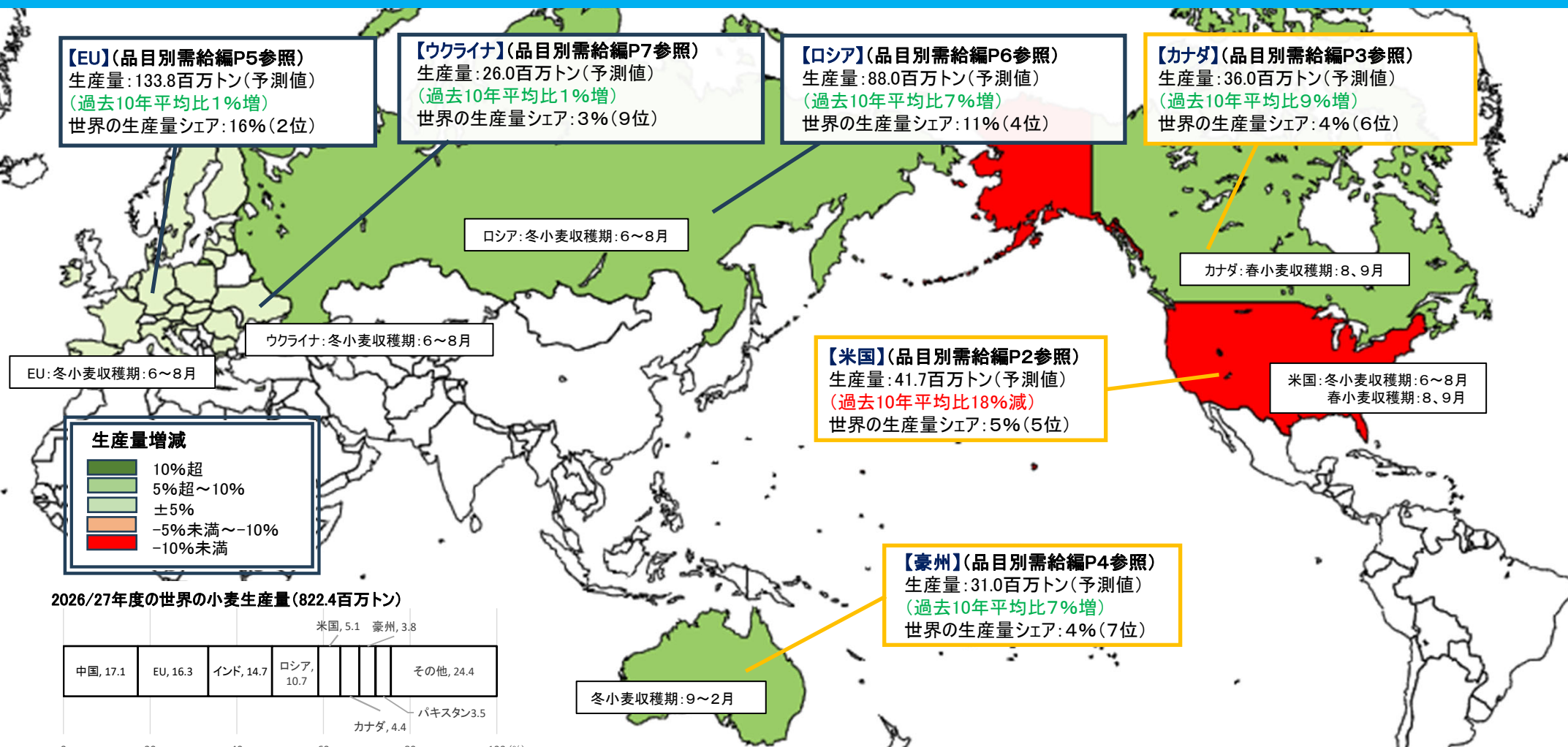


出典: 中国農業展望報告(2026-2035)をもとに農林水産省で作成

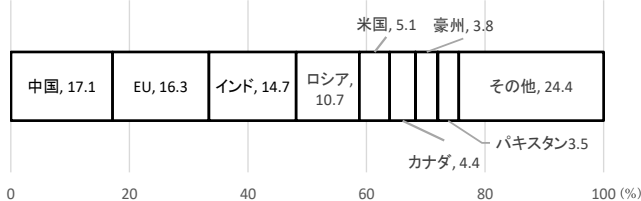
月別の推移を見ると、ブラジルの収穫遅延と中国税関の通関鈍化の影響を受け、3～4月の累計輸入量は、前年同期比で 32.1%減の 958 万トン。5～9月は、米中貿易摩擦の影響や関税政策への懸念を受け、国内の搾油企業が南米産大豆を集中的に買付け、5カ月連続で輸入量が 1,000 万トンを超え、累計輸入量は前年同期と比べ 15.2%増の 6,301 万トンと、当年の輸入量の 56.3%を占めることとなった。10～12 月も、依然として前年同期を上回り、11 月の輸入量は 811 万トンで直近4年の同月では最高を記録、前年同期に比べ 13.3%増となった。輸入先国別に見ると、ブラジル、アルゼンチンからの輸入量が増加し、それぞれ前年と比べ 10.3%及び 92.4%増の 8,232 万トン及び 789 万トンとなり、当年輸入量の 73.6%と 7.1%を占めた。一方、米国からの輸入量は大幅に減少し、前年に比べ 24.0%減の 1,682 万トンと輸入量の 15.0%を占めるにとどまった。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析 2026 年8月号」(2026.8.12)によれば、2025/26 年度の大豆の作付面積は、前年度(1,032.5 万ヘクタール)と比べ 0.7%減の 1,025.5 万ヘクタール、生産量は前年度(2,065 万トン)と比べ 1.3%増の 2,091 万トンと見込まれている。2026/27 年度の実産量は、全体的な気候条件が大豆の生育に有利に働いていることから、前年度より 0.2%増の 2,095 万トンと見込まれている。

資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2026/27年度(9月版)



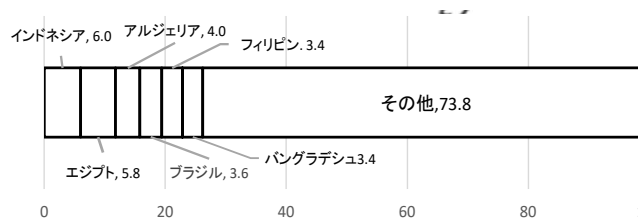
2026/27年度の世界の小麦生産量(822.4百万トン)



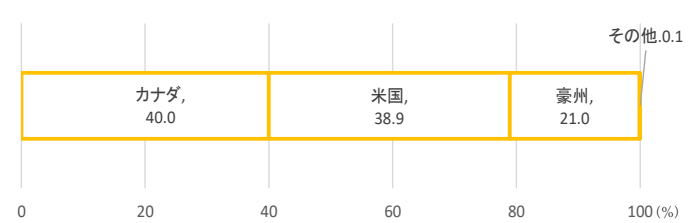
2026/27年度の世界の小麦輸出货量(211.8百万トン)



2026/27年度の世界の小麦輸入量(207.5百万トン)



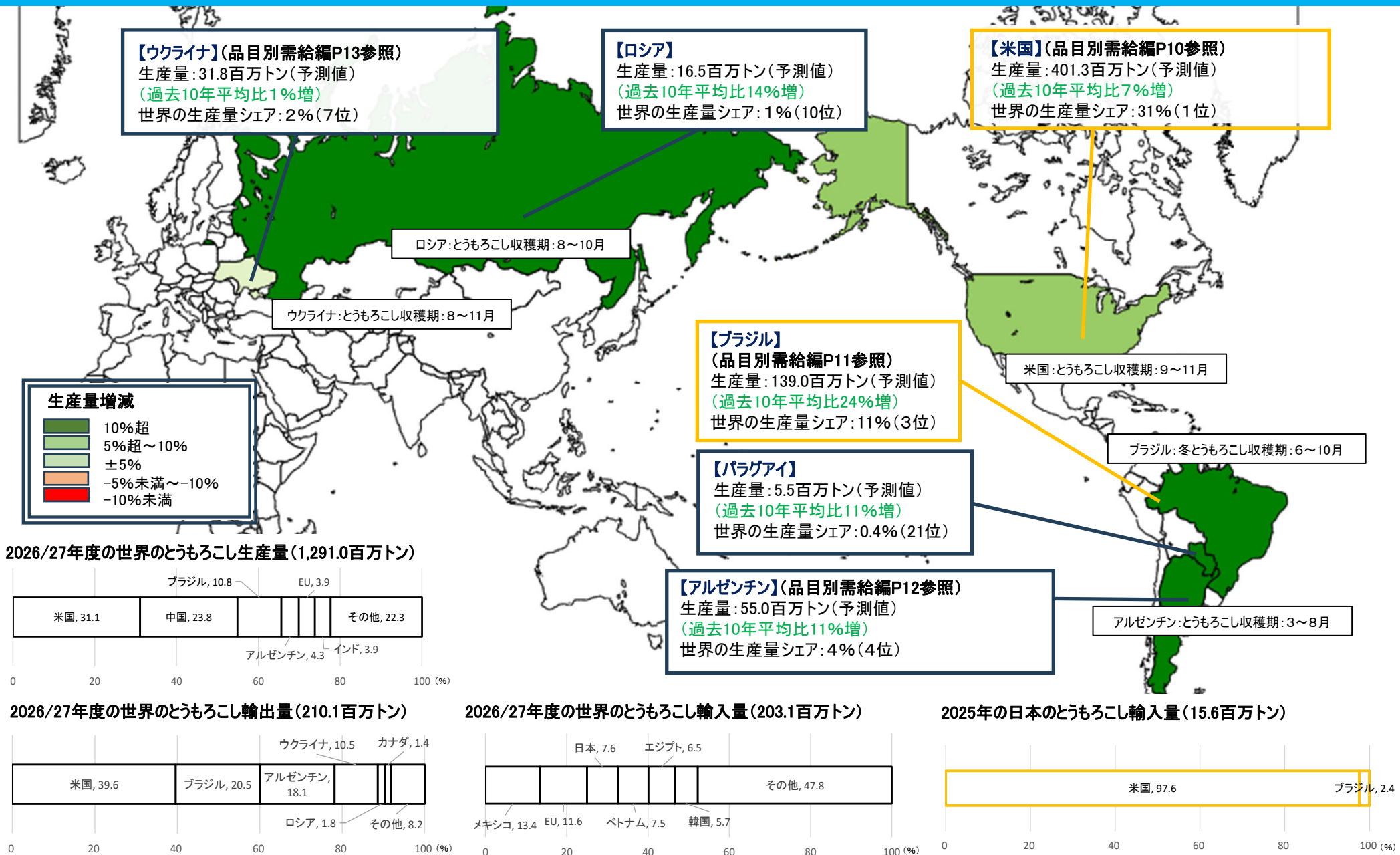
2025年の日本の小麦輸入量(5.3百万トン)



- 2025年度の日本の小麦輸入量は565万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(659万トン、うち食用は518万トン)の85.8%を占める。
- 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は260kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,237kcal)の11.6%を占める(2025年度)。

出典:USDA「PS&D」(2026.9)、財務省「貿易統計」(2025年輸入量)、農林水産省「令和7年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

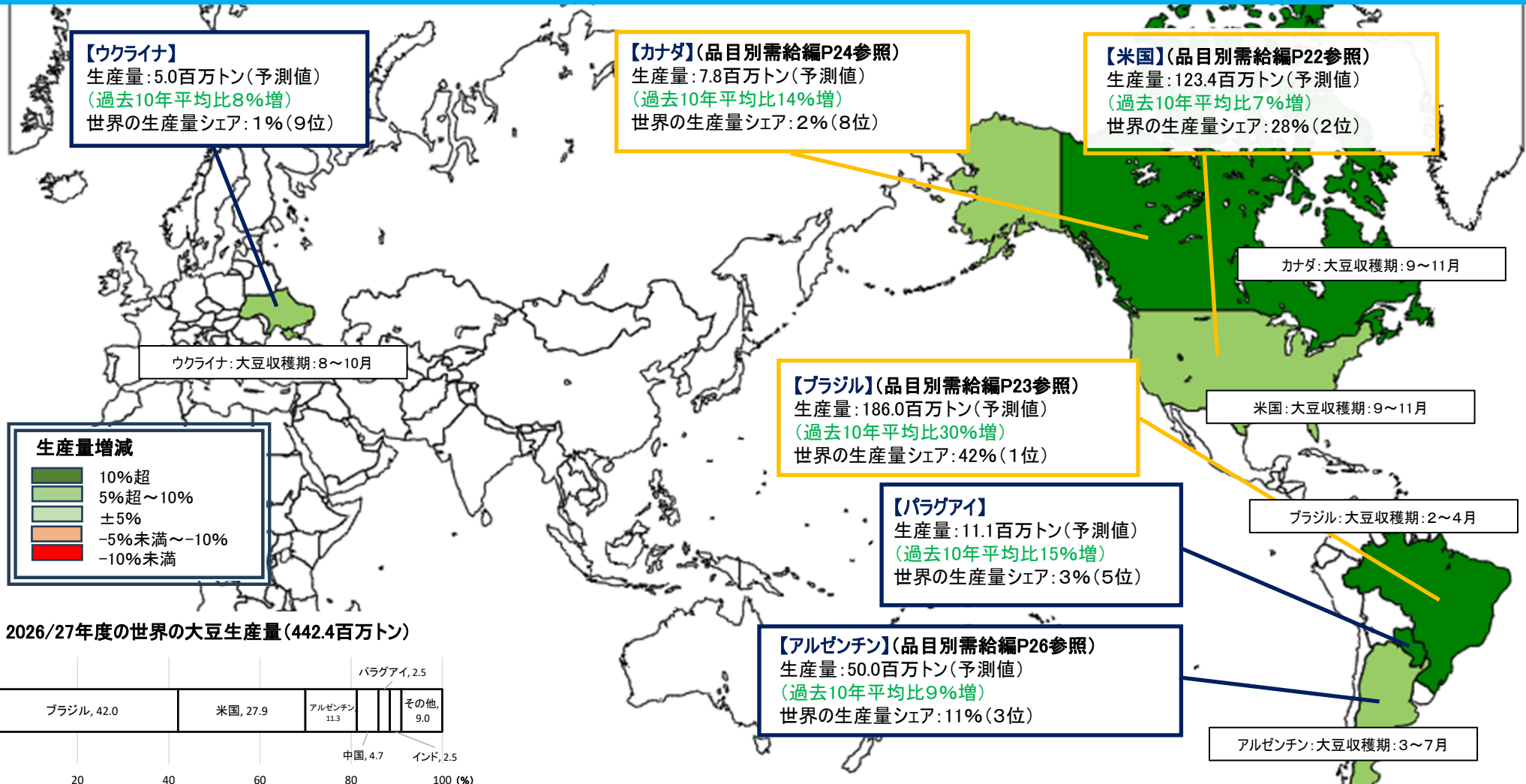
資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2026/27年度(9月版)



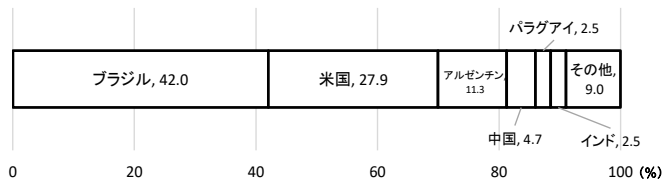
○ 2025年度の日本のとうもろこし輸入量は1,581万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,551万トン、うち飼料用は1,234万トン)のほぼ全量を占める。

出典: USDA「PS&D」(2026.9)、財務省「貿易統計」(2025年輸入量)、農林水産省「令和7年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2026/27年度(9月版)



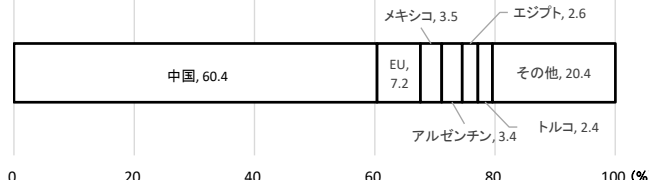
2026/27年度の世界の大豆生産量(442.4百万トン)



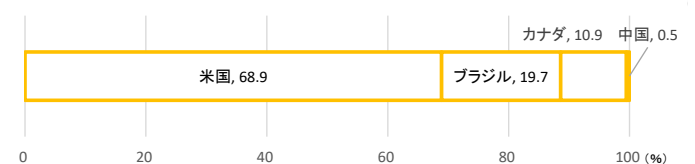
2026/27年度の世界の大豆輸出量(191.6百万トン)



2026/27年度の世界の大豆輸入量(190.4百万トン)



2025年の日本の大豆輸入量(3.3百万トン)



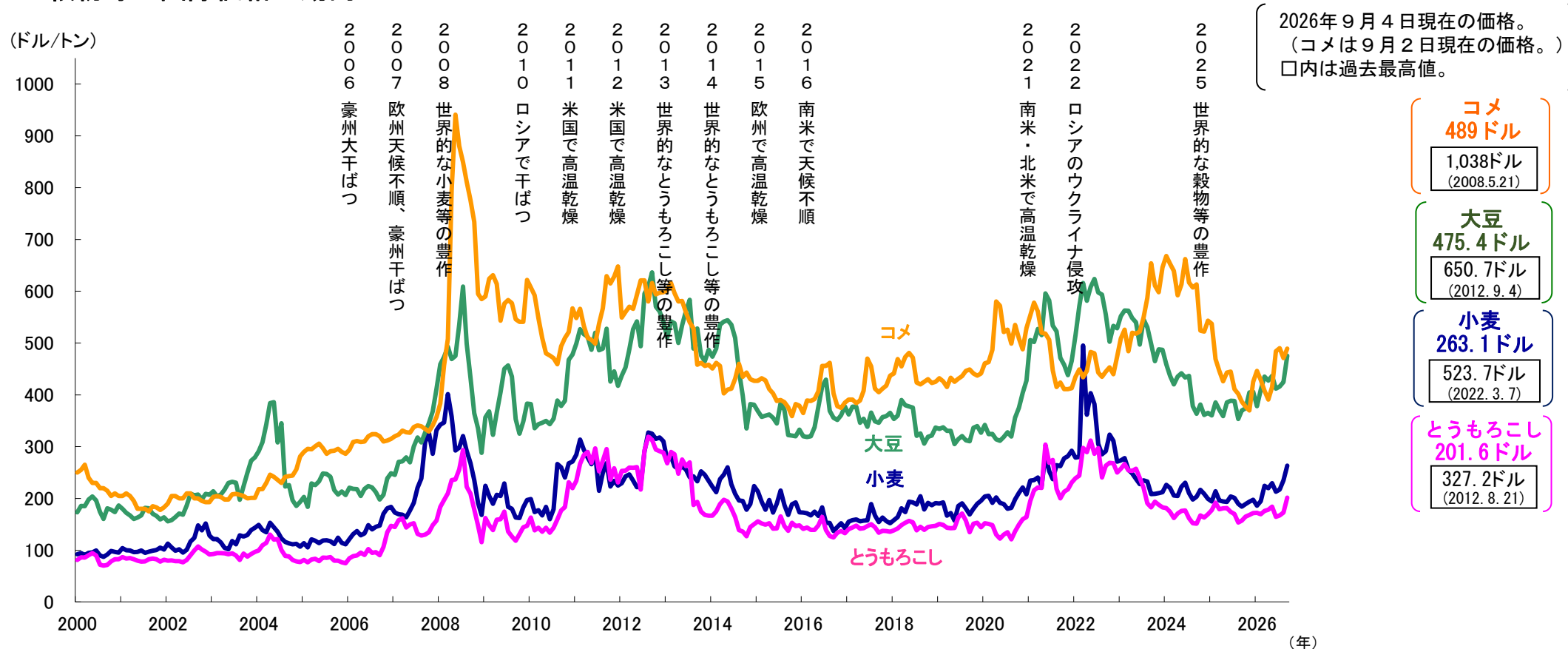
- 2025年度の日本の大豆輸入量は337万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(382万トン、うち大豆油などの加工用は275万トン、食用は90万トン)の88.3%を占める。
- 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は60kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,237kcal)の2.7%を占める(2025年度)。

出典: USDA「PS&D」(2026.9)、財務省「貿易統計」(2025年輸入量)、農林水産省「令和7年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料 1 — 4 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- 穀物等価格は、とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から下落。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥、2022年のロシアのウクライナ侵攻等により上昇も、侵攻前の水準まで下落。
- とうもろこし、大豆は、ウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで下落。とうもろこしは、2026年7月以降、ウクライナ情勢悪化等を受け上昇傾向。大豆は、中東情勢の緊迫化、中国の買付け等を受け上昇傾向。
- 小麦は、2022年、ウクライナ侵攻により史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで下落。その後、2026/27年度米国産小麦の減産、ウクライナ情勢悪化等を受け上昇傾向。
- コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、2024年以降、インドの輸出規制解除等を受け下落し、2026年5月以降、中東情勢の影響に加え、エルニーニョ現象の影響による次期作の見通しの不確実性を受け大きく上昇。

□ 穀物等の国際価格の動向



注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料 1-5 サプライチェーン等に関する状況

○黒海及びアゾフ海での攻撃激化により穀物等の輸出が減少。(2026年9月18日時点)

生産国の情報	チョークポイント情報
○米国 ①USDA「Grain Exports Dashboard」によれば、<u>8月のメキシコ湾から日本向け穀物の海上運賃は、前月68.95ドル/トンから上昇し72.94ドル/トン(2月及び前年同月54.19ドル/トン)。</u>太平洋岸北西部(PNW)から日本向けは、<u>前月35.95ドル/トンから上昇し36.75ドル/トン(2月30.50ドル/トン、前年同月28.81ドル/トン)。</u> ②USDA「Transportation Updates and Regulatory News」によれば、<u>9月1日、BNSF鉄道(BNSF)、ユニオン・パシフィック鉄道(UP)及びカナディアン・ナショナル鉄道(CN)は、2026/27市場年度の大豆の鉄道運賃を改定。</u> <u>BNSFは、太平洋岸北西部(PNW)の輸出ターミナル向けの運賃を1車両当たり120ドル引き上げる一方、米国・メキシコ国境向けの大部分を大幅に引き下げる予定。</u> <u>UPは、全ての出発地からの運賃を1車両当たり225ドル引き上げ。</u> <u>CNは、コーンベルトのエレベーターからルイジアナ州メキシコ湾岸輸出ターミナルまでのとうもろこしを含む運賃を1車両当たり275ドル引き上げ。10月からは更に1車両当たり330ドル引き上げられ、12月1日まで維持。その後は1車両当たり220ドル引き下げられ、年度終わりまで維持。</u> <u>なお、10月には、カナディアン・パシフィック・カンザスシティ及びCSXトランスポーテーションがとうもろこし及び大豆の運賃を改定する予定。</u> ③USDA「Transportation Updates and Regulatory News」によれば、<u>9月14日までの1週間の米国のディーゼル燃料の平均価格は1ガロン当たり6.285ドルと史上最高を記録。前年同期比では254.6セント上昇。全米の全ての地域で価格が上昇し、西海岸が最も高かった。ディーゼル燃料は、収穫作業に使用される多くの機械のほか、トラック、鉄道、はしけの燃料として広く利用。</u> ○カナダ ①Quorum Corporation「Grain Monitoring Program Report for: July 2026 / Q4 2025-26 CY」によれば、<u>7月のカナダ西部の鉄道による穀物輸送量は、6月の543万トンと比べ7.1%減の505万トン。2025/26年度(2025年8月～2026年7月)の輸送量は、前年度と比べ10.2%増の6,504万トンとなり過去最高を記録。7月の港湾出荷量は、6月の381万トンと比べ1.3%減の376万トン。2025/26年度の出荷量は、前年度と比べ8.3%増の4,712万トン。7月の船舶の港での待機日数は、6月の6.9日から7.2日にわずかに増加。2025/26年度の平均待機日数は、前年度と比べ21.9%減の8.2日。7月の港別の待機日数は、バンクーバー港が6月10.9日から12.0日に増加、プリンス・ルパート港が9.2日から6.9日に減少となった一方、サンダーベイ港は前月と同じ2.1日。</u>	○パナマ運河 ①8月のパナマ運河通航数は、1,029隻で1日平均33.19隻と前月34.03隻から減少。なお、<u>パナマックス閘門において、9～11月に複数の保守工事が予定されている。</u> ②パナマ運河のガトゥン湖の水位は、9月14日現在、84.1フィートで同月過去5年平均(85.2フィート)を下回る。 ③パナマ運河庁(2026.8.20)によれば、エルニーニョ現象で降雨量が平年を下回ると見込まれるため、<u>9月4日からパナマ運河の1日当たりの通航数を34隻(ネオパナマックス閘門9隻、パナマックス閘門25隻)に、更に9月15日からは同32隻(ネオパナマックス閘門9隻、パナマックス閘門23隻)に引き下げ(通常は1日当たり36～40隻)。</u> <u>また、ネオパナマックス閘門を通航する船舶の最大許容喫水について、8月15日から48.5フィートが適用されていたが、9月2日から48.0フィート(当初は8月26日～)、10月1日から47.5フィート(当初は9月2日～)に引き下げ。なお、大部分の穀物輸送船舶が通航するパナマックス閘門については、喫水制限の予定はない。</u>

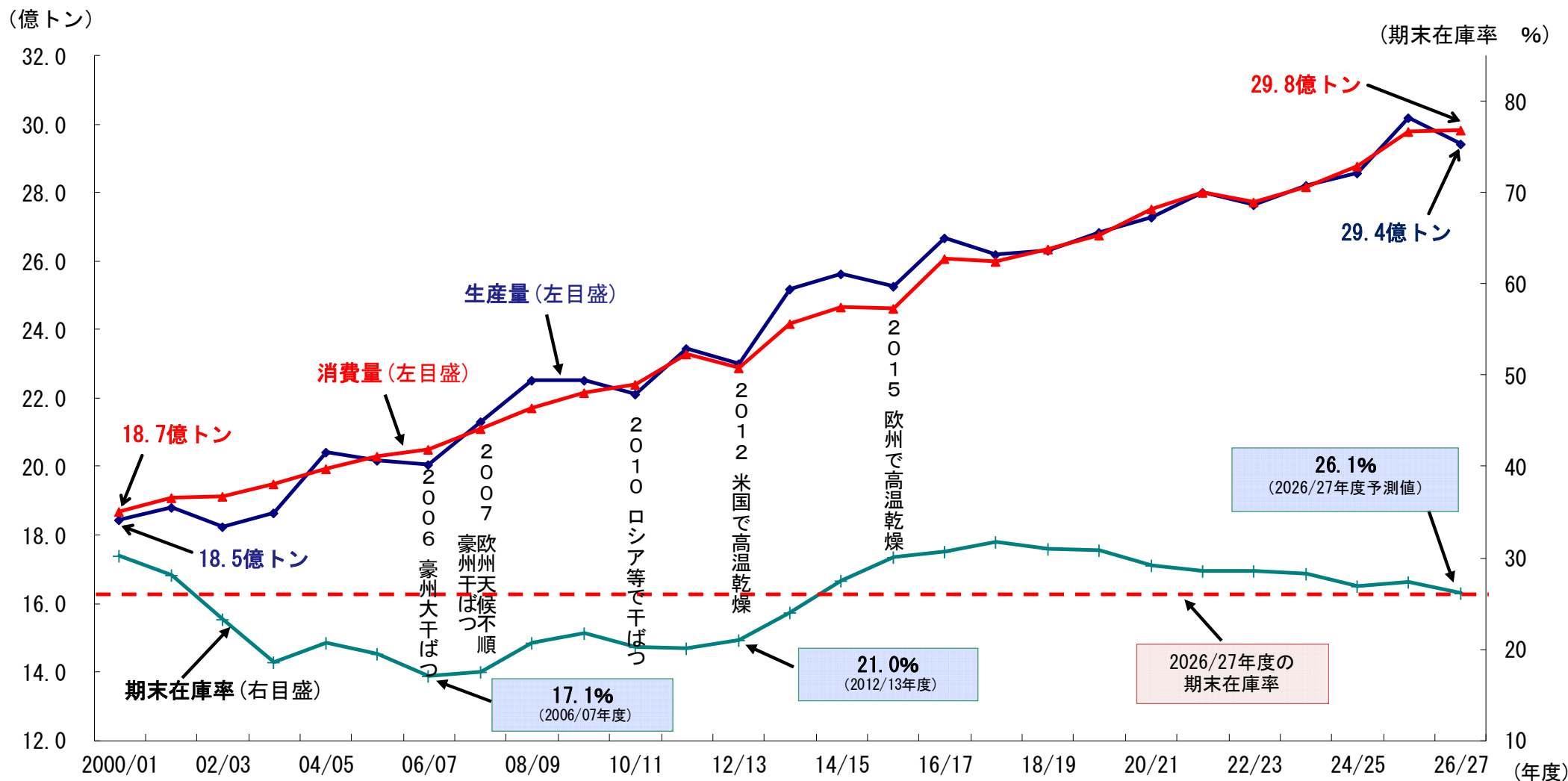
資料 1－5 サプライチェーン等に関する状況

生産国の情報	チョークポイント情報
②同「Grain Monitoring Program Weekly Performance Update」(2026.9.15)によれば、2026/27年度第5週(2026年8月31日～9月6日)のカナダ西部港湾ターミナルの在庫は1.45百万トンに増加し能力の75%が利用。なお、バンクーバーの空きは限られている。 2026/27年度第5週の西海岸の荷下ろしは、7,135両(バンクーバー6,632両、プリンス・ルパート503両)で、4週平均と比べ15%増、前年同期と比べ51%増。 2026/27年度第5週現在、年初からのカナダ西部港湾ターミナルエレベーターからの出荷量は、前年同期と比べ60%増、過去3年平均と比べ22%増。 2026/27年度第6週のバンクーバーにおける船舶待機数は23隻にとどまった(直近1年平均23隻)。プリンス・ルパートにおける船舶待機数は3隻に増加(同3隻)。 ○インド AMIS「Market Monitor No. 141」によれば、8月24日、インド外国貿易部は、<u>通知第34号(2026-27年)及び第35号により、小麦、小麦粉及びその他の小麦を原料とする製品の輸出禁止を解除。</u> ○ブラジル AMIS「Market Monitor No. 141」によれば、7月14日、<u>ブラジルの国家エネルギー政策評議会(CNPE)は、ガソリンに混合するエタノールの比率を8月1日から180日間に限り、従来の30%から32%に引き上げることを承認。</u>	○黒海及びアゾフ海 ①<u>7月16日、ロシアとウクライナは黒海及びアゾフ海において船舶への攻撃を行った。7月以降、両国の穀物等輸出が制限され輸出量が大きく減少。</u> ②<u>8月12日、ウクライナの攻撃によりロシアのノヴォロシースクの主要穀物ターミナルの操業が停止。操業再開には1～4か月かかる可能性。</u>

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2026/27年度は、2000/01年度に比べ1.6倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2026/27年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、26.1%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

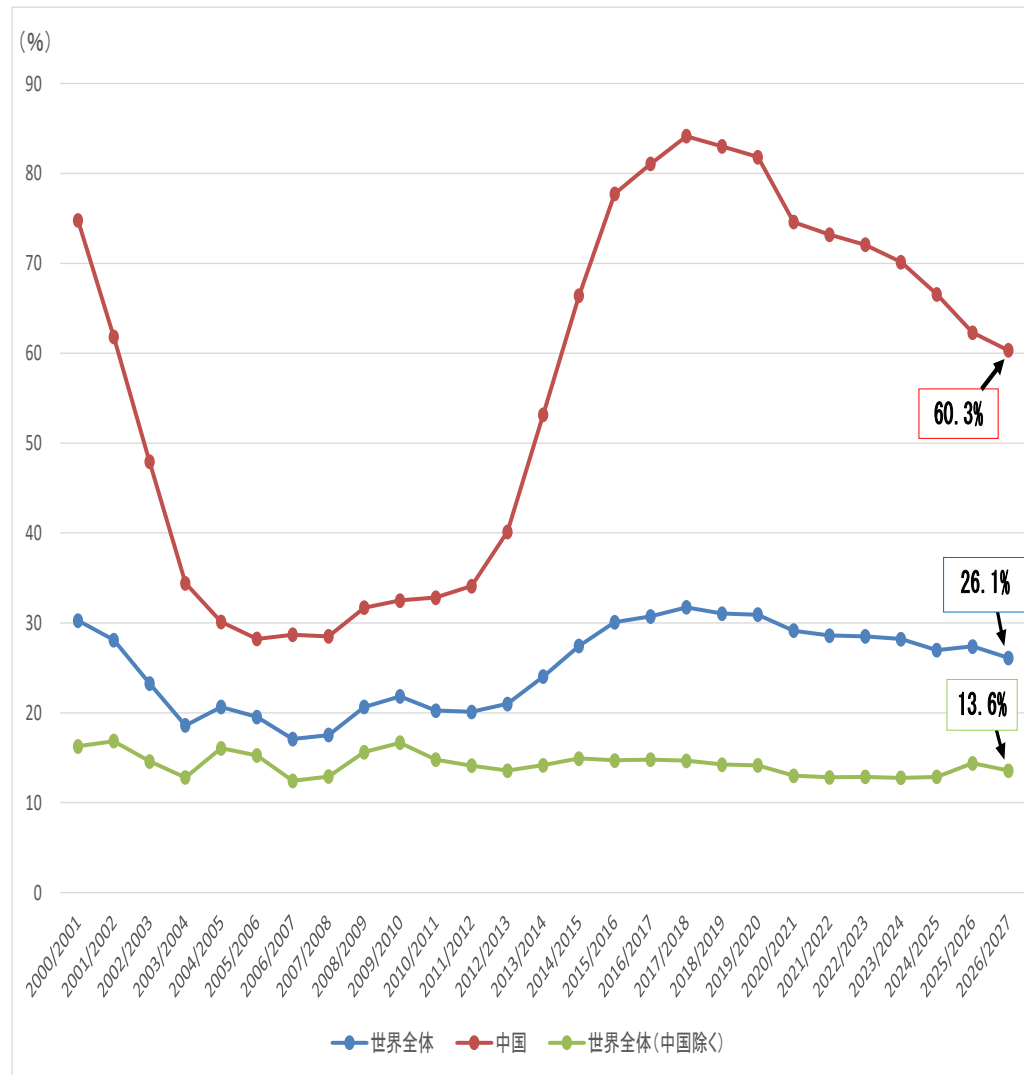


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(September 2026)、「PS&D」

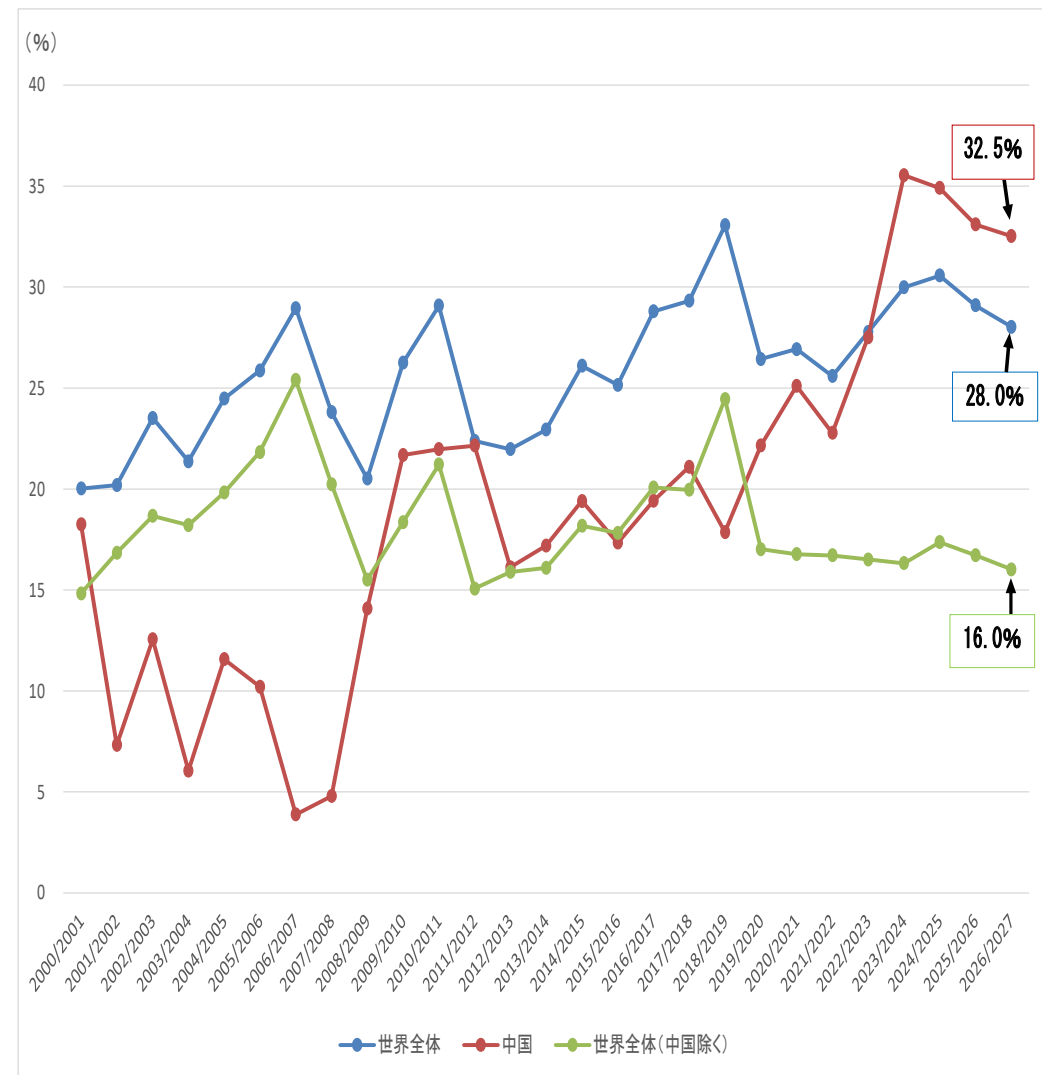
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(September 11, 2026)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

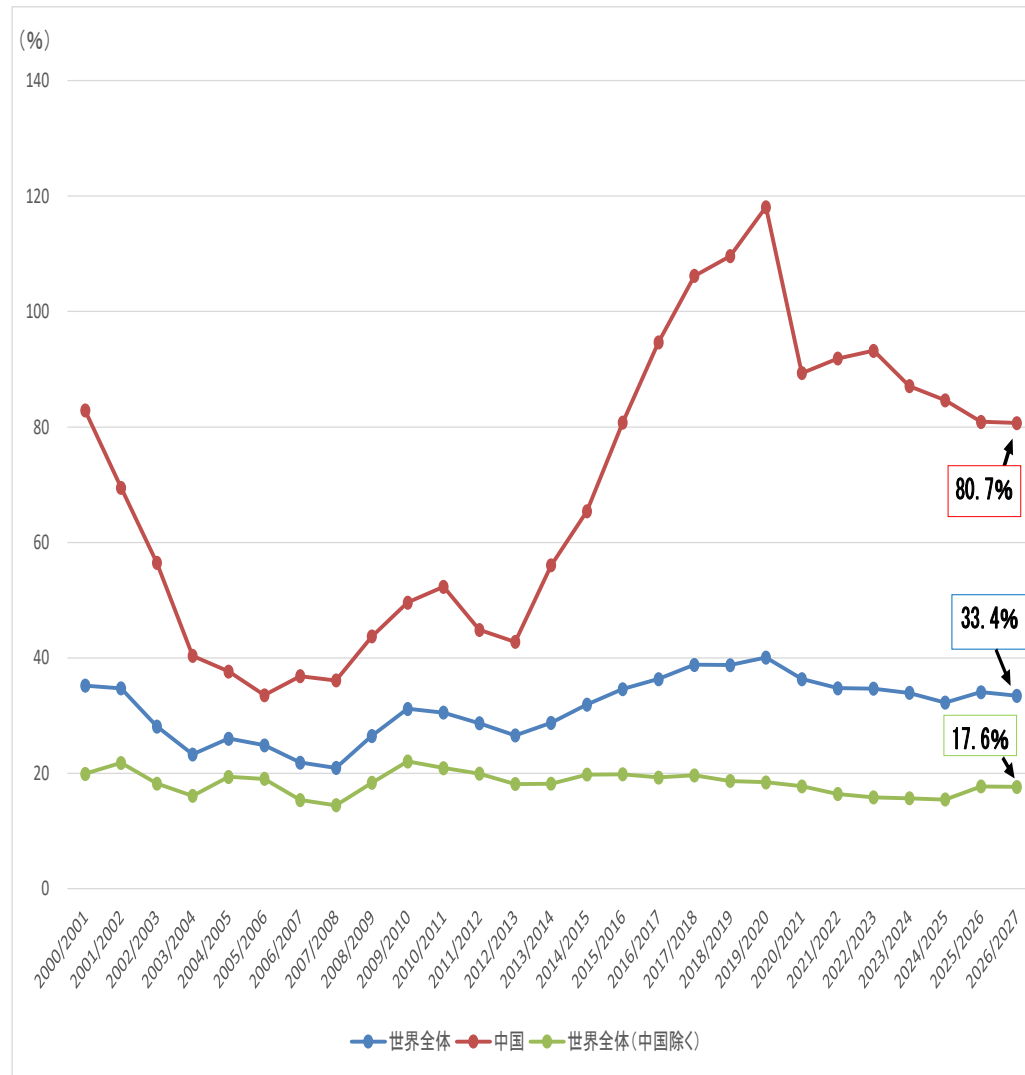
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

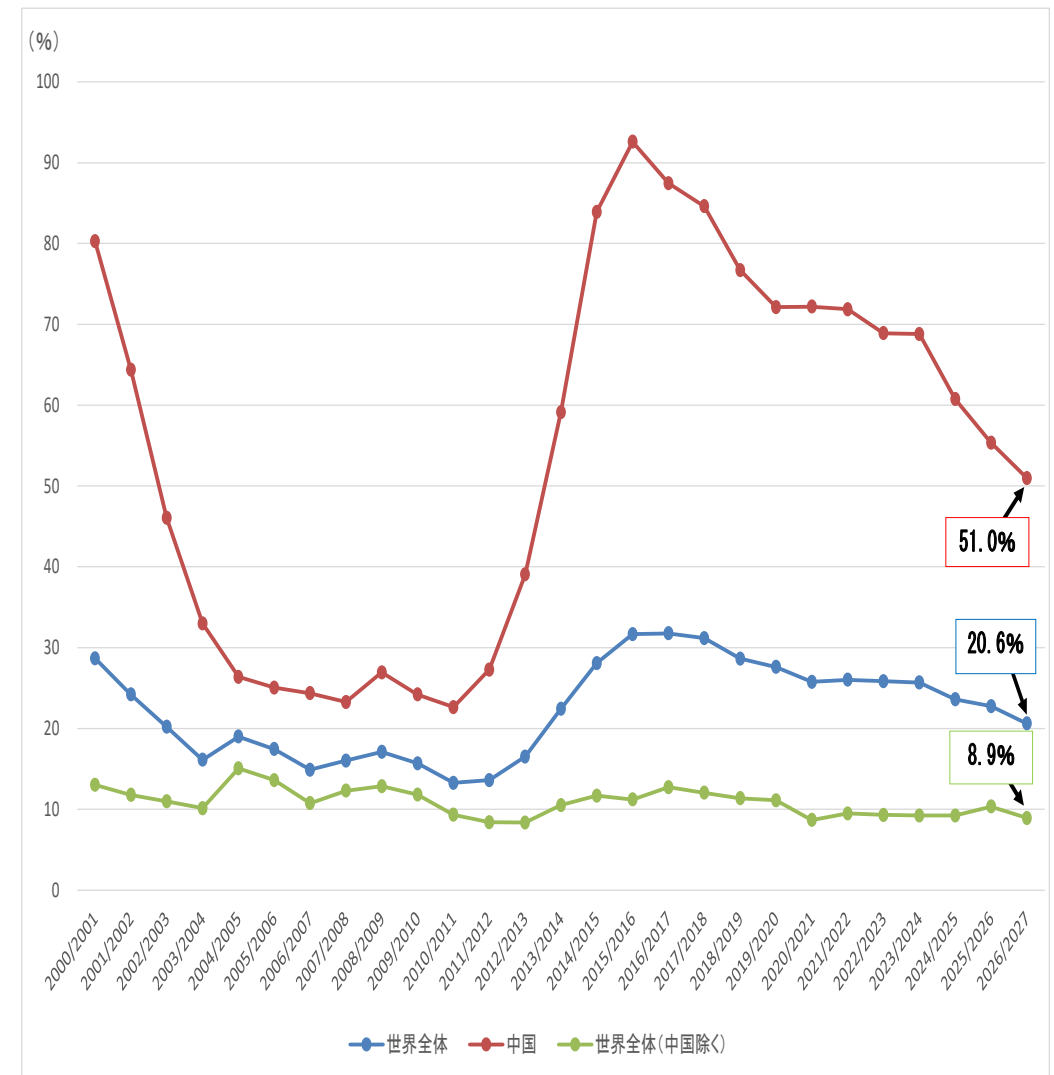
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「P S & D」(September 11, 2026)

注：1) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

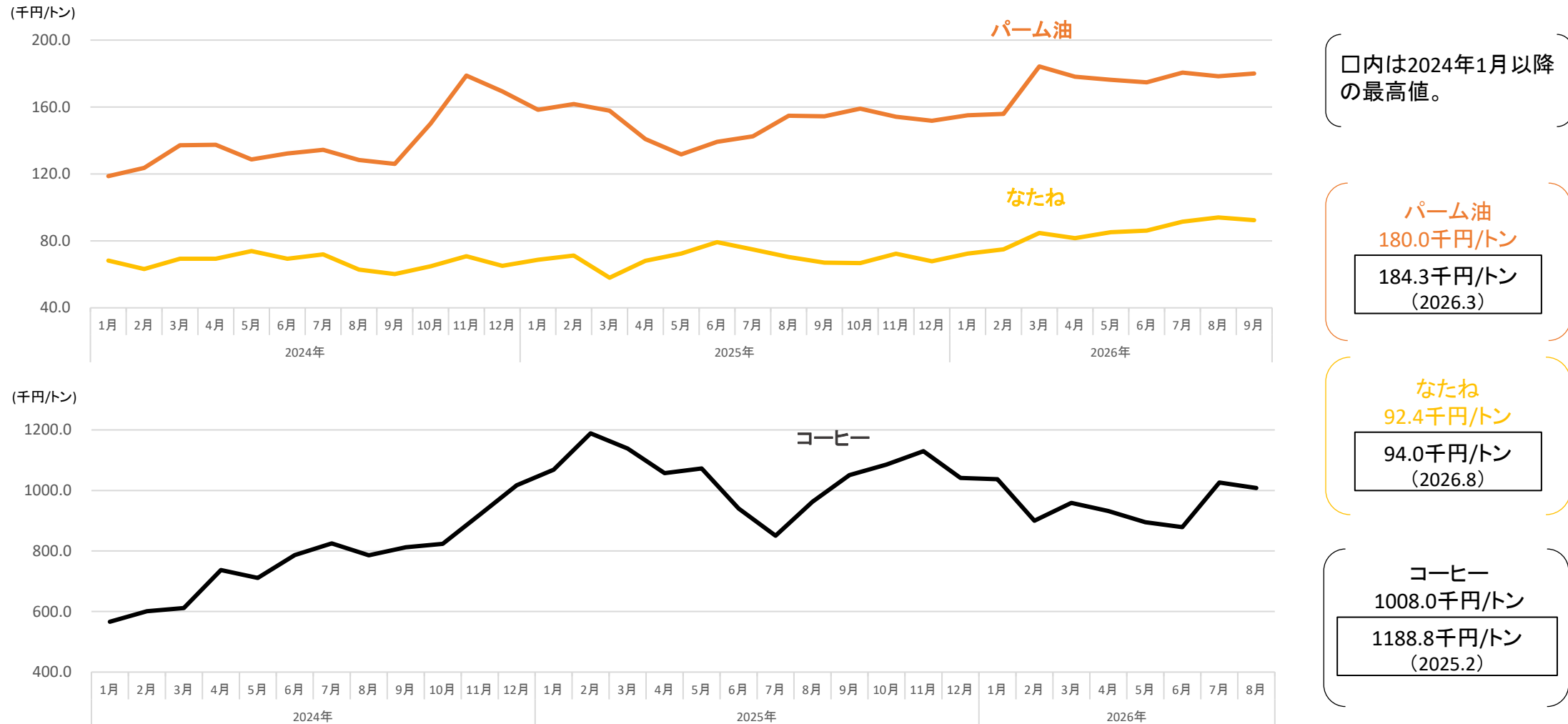
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

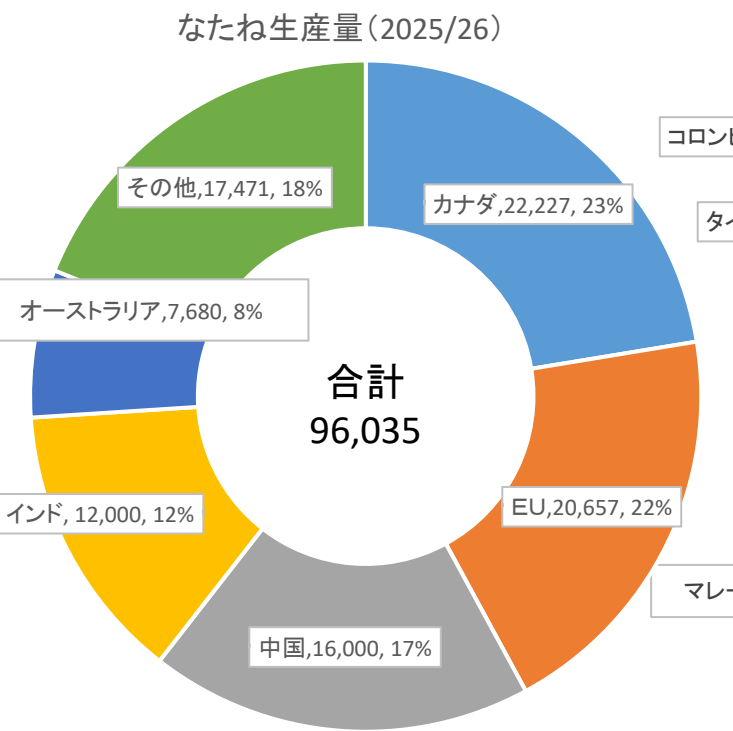
- パーム油の直近の動きとして、中東情勢の影響による原油価格相場の高騰等から上昇している。9月の月央値は180.0千円/トンとなり、前月の月央値をやや上回り、依然として高い水準で推移している。
- なたねの直近の動きとして、中東情勢の影響による原油価格相場の高騰等から上昇している。9月の月央値は92.4千円/トンとなり、前月の月央値をやや下回ったが、依然として高い水準で推移している。
- コーヒーについては、2025年11月以降、供給見通しの改善を背景に下落傾向で推移している。2026年8月は、スーパーエルニーニョ発生への懸念等から月中旬に上昇したものの、天候良好による生産増加期待と供給余剰懸念を背景に月末にかけて反落。月間平均価格は前月とほぼ同水準となった。



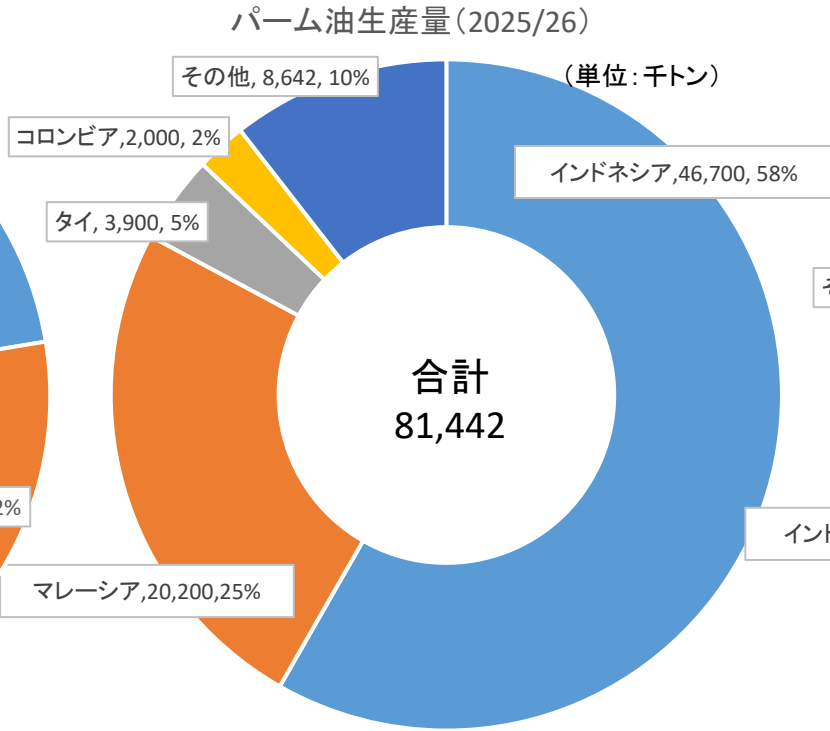
※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグなたね市場の先物価格(期近物)の月央値を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格(期近物)の月央値を使用し、為替レートから円に換算して算出。コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関(ICO)の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

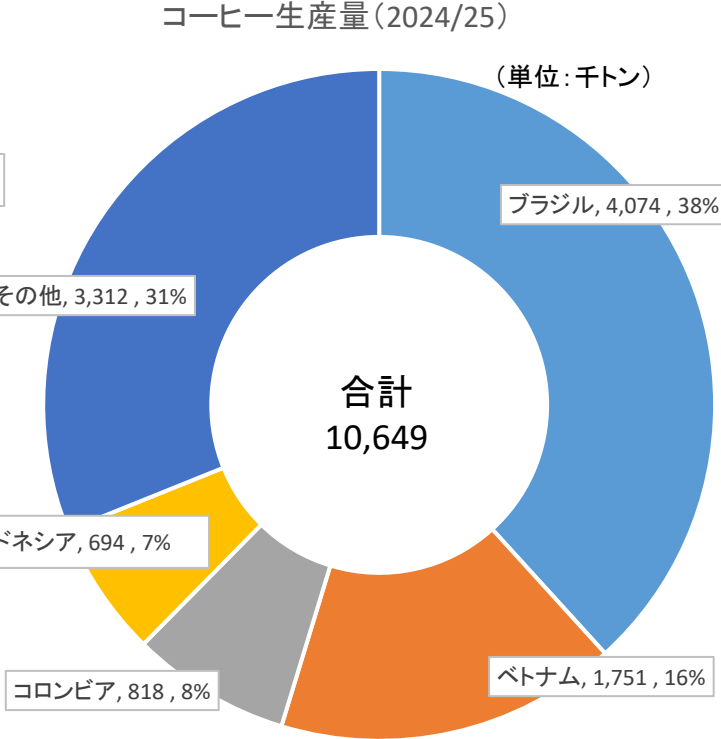
○主要生産国の生産状況 (単位:千トン)



※米国農務省 (PS&D)
2026年9月時点



※米国農務省 (PS&D)
2026年9月時点



※国際コーヒー機関 (ICO) 統計資料
2025年7月時点

○我が国の主な輸入先の状況 (単位:千トン (2025年))

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,722	80.1%
オーストラリア	429	19.9%
その他	0	0.0%
合計	2,151	100.0%

※財務省「貿易統計」(HSコード: 1205)

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	568	87.6%
インドネシア	79	12.2%
その他	1	0.2%
合計	648	100.0%

※財務省「貿易統計」(HSコード: 1511)

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	147	40.9%
ベトナム	90	25.1%
コロンビア	38	10.6%
その他	84	23.4%
合計	359	100.0%

※財務省「貿易統計」(HSコード: 0901.11～0901.12)

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね 単位(千円/トン)

	2024年												2025年												2026年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7	71.2	58.0	68.2	72.4	79.2	74.9	70.4	67.0	66.7	72.3	67.8	72.4	74.9	84.7	81.7	85.2	86.2	91.5	94.0	92.4			
前月比	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7	103.7	81.4	117.6	106.3	109.4	94.6	93.9	95.2	99.6	108.4	93.7	106.8	103.5	113.0	96.4	104.4	101.1	106.2	102.7	98.3			
前年同月比	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7	112.9	83.5	98.3	98.0	114.2	104.2	112.1	111.4	103.0	102.1	104.3	105.4	105.2	146.1	119.8	117.6	108.7	122.1	133.5	137.8			

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値(期近物)から算出

②パーム油 単位(千円/トン)

	2024年												2025年												2026年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4	161.8	157.8	140.9	131.7	139.2	142.5	154.8	154.5	159.0	154.2	151.8	155.1	155.9	184.3	178.1	176.3	174.8	180.6	178.4	180.0			
前月比	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5	102.2	97.6	89.2	93.5	105.7	102.3	108.7	99.8	102.9	97.0	98.4	102.1	100.5	118.2	96.7	98.9	99.2	103.3	98.8	100.9			
前年同月比	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4	130.8	115.0	102.5	102.3	105.3	106.0	120.7	122.6	106.0	86.2	89.6	97.9	96.4	116.7	126.5	133.8	125.6	126.8	115.2	116.5			

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値(期近物)から算出

③コーヒー

単位(千円/トン)

	2024年												2025年												2026年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コー ヒー	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5	812.1	823.4	920.3	1017.3	1068.8	1188.8	1138.7	1057.4	1072.9	940.6	850.2	963.0	1050.9	1085.8	1129.9	1041.6	1037.4	900.1	958.9	932.2	895.4	878.9	1026.2	1008.0				
前月 比	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2	103.4	101.4	111.8	110.5	105.1	111.2	95.8	92.9	101.5	87.7	90.4	113.3	109.1	103.3	104.1	92.2	99.6	86.8	106.5	97.2	96.1	98.2	116.8	98.2				
前年 同月 比	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7	163.3	164.6	170.9	184.9	188.8	197.8	186.2	143.5	150.9	119.6	103.1	122.6	129.4	131.9	122.8	102.4	97.1	75.7	84.2	88.2	83.5	93.4	120.7	104.7				

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関(ICO)の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和8年8月の国内の主な加工食品の消費者物価指数は103.5～111.1（前年同月比は 0.3%～14.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省）

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省）

	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近6か月						
品目	年平均	年平均	年平均	R8 3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	93.6	96.2	100.0	100.0	99.1	99.0	99.2	103.1	104.3	4.2%
即席めん	100.2	102.5	100.0	98.4	102.5	103.4	103.4	103.5	103.5	2.5%
豆腐	94.4	97.4	100.0	101.6	101.6	101.7	102.5	106.5	107.5	7.0%
食用油 (キャノーラ油)	107.4	99.5	100.0	103.1	104.7	105.0	107.0	112.4	111.1	14.6%
みそ	90.5	95.1	100.0	109.0	109.1	108.3	108.5	109.4	109.4	10.7%
マヨネーズ	96.0	98.3	100.0	104.1	104.0	104.5	104.3	104.1	104.3	6.8%
チーズ	94.2	95.6	100.0	102.2	105.7	98.6	102.8	102.4	105.2	0.8%
バター	83.2	91.8	100.0	106.3	106.7	107.5	107.9	107.3	105.8	0.3%
生鮮食品を 除く食料	90.0	93.4	100.0	102.8	102.7	102.9	103.2	103.6	103.5	2.7%

資料：総務省「消費者物価指数」
注：令和7年の平均値を100とした指数で表記。

	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近7か月								
品目	年平均	年平均	年平均	R8 3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	92.2	94.8	100.0	100.0	99.6	100.6	99.1	102.9	104.8	105.2	0.4%	4.7%
即席めん	100.5	101.6	100.0	100.8	104.5	105.5	105.5	106.6	105.0	104.0	-1.0%	4.7%
豆腐	94.8	97.6	100.0	100.1	101.5	101.2	101.9	106.6	108.4	108.8	0.4%	9.1%
食用油 (キャノーラ油)	112.2	102.7	100.0	103.3	103.1	101.7	103.5	107.3	109.5	111.5	1.8%	10.8%
みそ	92.1	95.3	100.0	111.9	111.5	111.1	111.9	112.0	112.9	114.0	1.0%	14.7%
マヨネーズ	98.1	99.0	100.0	104.9	105.9	106.6	105.9	106.6	106.4	106.6	0.2%	4.4%
チーズ	94.6	94.9	100.0	104.8	105.1	98.5	102.5	104.0	104.4	104.8	0.4%	0.8%
バター	82.2	90.7	100.0	105.7	106.1	106.4	106.2	105.9	105.2	108.6	3.2%	2.4%

資料：農林水産省「食品価格動向調査」
注1：令和7年の平均値を100とした指数で表記。
注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。

資料6 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を『月報 畜産の情報』（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html）で公表

○2026年10月号（9月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

◆牛肉

（米国）26年7月の牛肉卸売価格は前年同月をわずかに下回る

（豪州）牛価格は需給緩和で調整局面、中国の関税措置を受け輸出先の再編に注目

（ブラジル）牛肉生産および輸出は好調ながら、中国のセーフガード措置が先行きに影響

◆豚肉

（米国）26年1～6月の輸出量は前年同期比3.4%増と堅調も、メキシコ向けは競争激化

（EU）7月も豚枝肉卸売価格の低迷が続く

（中国）豚肉価格は前月比4.3%高と5カ月ぶりに上昇

◆牛乳・乳製品

（EU）26年上半期、主要な乳製品輸出量が前年同期を上回る

（豪州）25/26年度の生乳生産量はわずかに減少予測

（NZ）生乳生産量は7月として過去最高を記録

◆飼料穀物

（世界・トウモロコシ）26/27年度の期末在庫は、前月から引き続き下方修正

（世界・大豆）生産量、消費量ともに上方修正、大豆期末在庫は微減の見込み

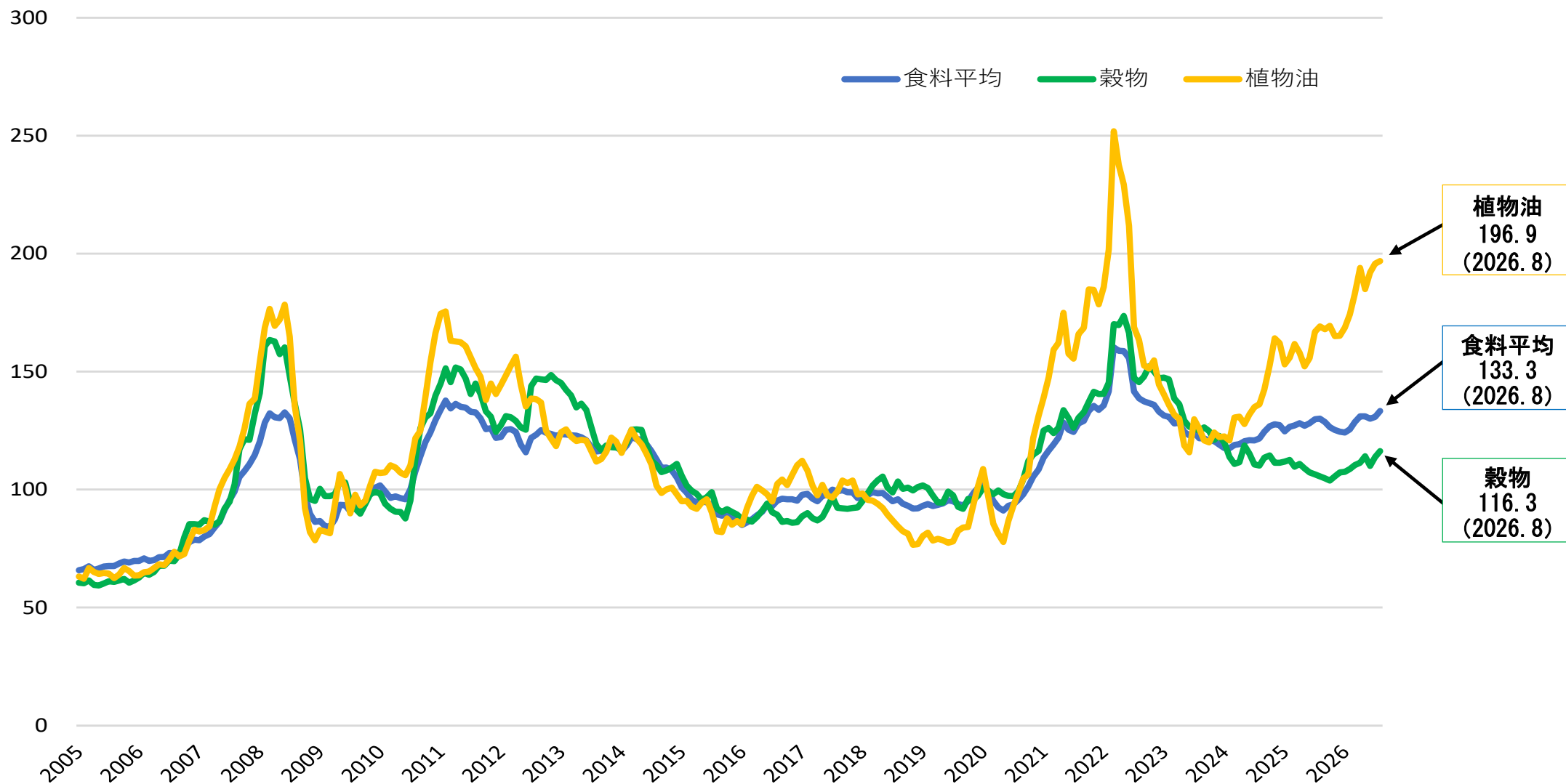
（米国）米国の26/27年度の期末在庫は前月に引き続き下方修正

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

資料 7 FAO食料価格指数

○FAO(国連食糧農業機関)が公表した8月の食料価格指数は、全ての価格指数が上昇したことにより、7月の130.8から1.9%(2.5ポイント)上昇し133.3。

(2014-2016平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2026.8)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

ロシア／ウクライナ農業に見る静かな変容——ライ麦編

農林水産政策研究所 後藤正憲

本稿では、ロシアとウクライナで近年急速に進むライ麦生産の縮小について、その背景を歴史的・経済的な視点からたどります。ライ麦生産の盛衰を通じて、両国の農業に生じている変化について考えてみたいと思います。

近年ロシアとウクライナの両国では、ヒマワリや大豆、菜種等の油糧作物の生産が拡大する一方で、比較的収益率の低い穀物の作付面積が縮小傾向にあります。しかし、その穀物の中でも特に縮小が顕著に現れているのが、ライ麦です。ソ連崩壊後の 35 年間にロシアの作付面積がどのように変化したかを見ると、小麦の作付面積は若干増えているのに対し、ライ麦の作付面積は 17 分の 1 にまで減少しました。最近の 10 年間を取ってみても、ロシアとウクライナ双方とも、ライ麦の作付面積は 10 年前の約 2 分の 1 から 3 分の 1 の水準にまで減少しています。あまりにも作付けが減ってしまったために、ここ数年は天候不順も災いして、国内消費量を賄うことができず、ロシアではベラルーシから、ウクライナではポーランドやバルト諸国から、ライ麦を輸入する事態となっています。

なぜライ麦の生産がそこまで落ち込んでいるのかというと、小麦や大麦と比べてライ麦は、収穫率(単位面積からとれる収穫量の割合)のみならず、収益率(生産原価に対する利益の割合)も低いということが、最大の理由として挙げられます。国際的な市場で需要の高い小麦や大麦と違って、ライ麦は輸出のポテンシャルが高くありません。国内市場においても需要は減っており、価格が低迷しています。ライ麦 1kg の価格がマッチ 2 箱の値段より安いために、農家が生産意欲を失っているという指摘もあります。さらに、ライ麦粉からパンを作るには、数日かけて発酵させる必要がありますが、食料品は行政的に価格が抑えられているために、時間と手間がかかる分を価格に転嫁することができません。現在売られている黒パンの多くは、純粋な意味でのライ麦パンではなく、小麦粉に少量のライ麦粉を混ぜて焼いたものが、ライ麦パンとして売られているそうです。こうして、ライ麦からそれを使った食料品に至るまで、非採算性の連鎖が起こっているのです。日本ではライ麦やライ麦パンにあまりなじみがありませんが、ロシアやウクライナでは長く主食とされていただけに、その衰退は大きな意味を持っていると思われます。

世界史全般においては、ライ麦栽培の歴史は、小麦や大麦の栽培よりもかなり後になって始まったことが分かっています。しかし、ロシアやウクライナでは、むしろライ麦のほうが古くから根付いていました。その証拠として、「ライ麦パンはカラーチに対してお祖父さん」という言い回しがロシア

【今月のコラム】

にあります。祭日など特別な日のご馳走とされていたカラーチ(小麦粉で焼いた白パン)よりも、日常的に食される平凡なライ麦パンの価値の尊さを教えることわざです。ロシアでは 19 世紀末ごろまで、作付面積の大半を秋播きライ麦と春播きエン麦が占めていました。ライ麦は主に食用で、エン麦は家畜の飼料用です。その後、第一次世界大戦期にかけて、世界市場で小麦と大麦に対する需要が高まり、ロシアでも主に輸出用作物として作付けが広がっていきます。しかし、国内の消費はライ麦が中心でした。小麦に比べてタンパク質やカロリーが高く、ビタミン B 群をも豊富に含むライ麦は、1 年の半分ほどを精進の戒律を守って過ごすロシアの農民には、合理的な食材だったと言われています。

では、そもそもどうしてロシアやウクライナでは、ライ麦栽培が広く行われていたのでしょうか。植物学者で遺伝学者のニコライ・ヴァヴィーロフ(1887-1943)は、このことについて深く探求した研究者の一人でした。彼は、ロシア革命の起きた 1917 年に、「栽培ライ麦の起源について」という論文を発表しています。その中で彼は、中央アジアやイランなど南西アジア地域で、小麦や大麦の畑に生える雑草として厄介者扱いされている植物と、欧州で栽培されるライ麦が植物学的には同種であることから、ライ麦栽培の成立について仮説を立てています。そこでは、次のようなプロセスが描かれます。かつて南西アジア地域で野生の状態で生えていたライ麦が、姿かたちや生育期間の類似性から、小麦や大麦の畑に混ざり込むことが常態化していました。その後、標高の高い地域や、緯度の高い北の地方に作物の種子が伝えられると、それと一緒にライ麦の生育地域も移動していきました。ライ麦は小麦に比べて環境への適応力に優れており、低温や乾燥に強く、痩せた土壌でも育つため、小麦や大麦が育たない場合でも、ライ麦は生育して実をつけることができます。たとえ小麦が寒さにやられたとしても、少なくともライ麦は収穫できることが多かったので、やがて人々は意識的に小麦とライ麦を混ぜて栽培するようになりました。そして、より厳しい環境の下では、ライ麦が本命の作物として播かれるようになったのです。つまり、ライ麦の栽培は、植物としてのライ麦と、それを食べる人間の、それぞれの生存戦略がうまく一致して発達してきたと言えます。雑草として生えていた野生のライ麦にとって、人間に栽培されることで繁殖の機会が増える一方で、人間にとっては厳しい環境でも収穫できるライ麦を栽培することで、それを糧として生き延びることができるというわけです。

こうしてロシアやウクライナでは、ライ麦を中心として穀物の栽培が広まりました。特にロシアの非黒土地帯では、20 世紀半ば頃までライ麦が主要な作物として生産されていました。しかし、第二次世界大戦後、人口の拡大を支える食料供給が世界的な課題となる中で、競い合うように小麦の品種改良が進められましたが、ライ麦の品種の開発は遅れていきます。徐々にライ麦は、寒冷的な気候に耐えられる品種の小麦や大麦にとって代われ、作付面積を減らしていきました。ソ連崩壊後はこの傾向が加速し、現在では生産の存続が危ぶまれるまでになっていることは、冒頭に述べた通りです。

【今月のコラム】

ロシアとウクライナで起きているライ麦生産の衰退は、果たしてどのように捉えられるでしょうか。ウクライナ語でライ麦を「ジート」(жито)といいます。この言葉は、ロシアでは地方によってライ麦のことを指したり、大麦のことを指したり、あるいは穀物一般を指すようですが、語源的にはスラブ祖語で「生きること」や「命」を表す言葉に由来しています。このことは、人が命をつなぐ上で、ライ麦がかけがえのないものであったことを物語っています。これまで長い年月をかけて、気候や土壌などの自然条件に基づいてライ麦生産が発達する上では、人が生きるということがその根底にありましたが、現在ではむしろ収益率が農業生産を左右する大きな要因となっています。穀物生産と輸出にかけては、世界的に枢要な位置を占める両国で、ライ麦生産が脇に追いやられようとしている現在の状況は、今日の農業のあり方そのものに、大きな問題を投げかけているように思えます。

(品目別需給編)

I 穀物

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2026/27 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・カザフスタン、ロシア等で下方修正されたものの、豪州、カナダ、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。

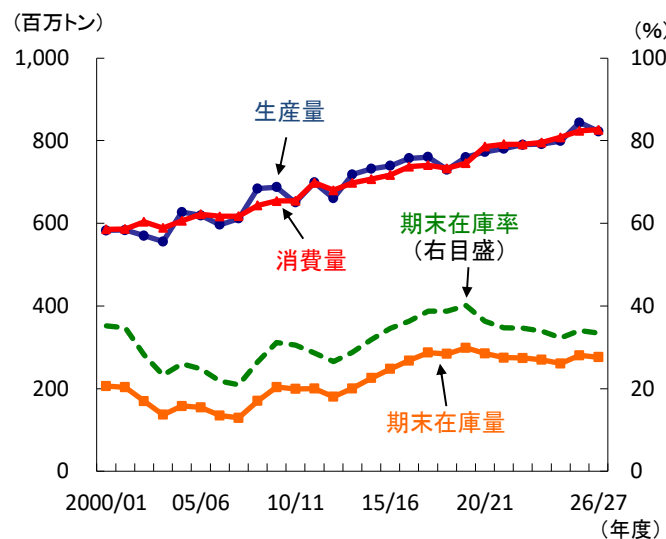
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・カナダ等で下方修正されたものの、豪州等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・カナダ、豪州等で上方修正されたものの、ロシア、ウクライナ等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



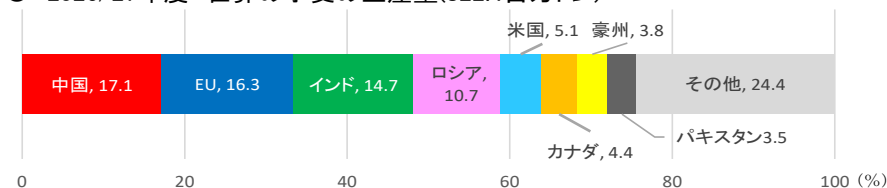
◎世界の小麦需給

(単位:百万トン)

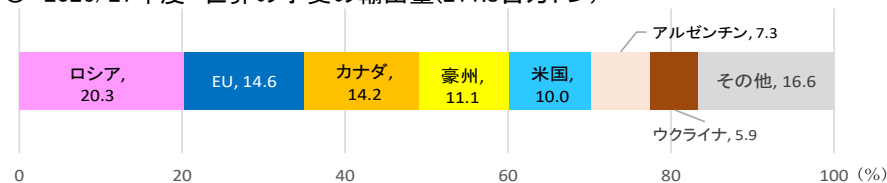
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	799.1	844.0	822.4	3.1	▲ 2.6
消費量	808.5	824.0	826.8	0.5	0.3
うち飼料用	157.3	168.5	164.7	0.9	▲ 2.2
輸出量	210.9	227.6	211.8	▲ 0.9	▲ 7.0
輸入量	201.9	221.6	207.5	▲ 0.8	▲ 6.4
期末在庫量	260.6	280.6	276.3	3.0	▲ 1.5
期末在庫率	32.2%	34.1%	33.4%	0.3	▲ 0.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 September 2026)

○ 2026/27年度 世界の小麦の生産量(822.4百万トン)



○ 2026/27年度 世界の小麦の輸出量(211.8百万トン)



○ 2026/27年度 世界の小麦の輸入量(207.5百万トン)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2026/27 年度の輸出量は前年度から 14.6%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収が大きく減少することから前年度から 22.9%減、過去5年平均(49.3 百万トン)から 15.6%減の 41.7 百万トンとなる見込み。

同「Wheat Outlook」(2026.8.14)によれば、2026/27 年度の実産量は、1970/71 年度(36.8 百万トン)以来の低水準で、長期的な作付面積の減少とグレートプレーンズ諸州の干ばつによる Hard Red Winter の生産減が要因であり、全ての銘柄で前年度から減少が見込まれている。Hard Red Winter は前年度から 42.5%減の 12.6 百万トンと 1957/58 年度(11.7 百万トン)以来の低水準、Hard Red Spring が前年度から 5.3%減の 11.8 百万トン、Soft Red Winter が同 18.6%減の 7.8 百万トン、White 小麦が同 0.8%減の 7.6 百万トン、Durum(デュラム小麦)が同 23.0%減の 1.8 百万トンとなる見込み。

同「Crop Production」(2026.9.11)によれば、2026/27 年度の作付面積は、前年度から 5.9%減の 1,726 万ヘクタール。収穫面積は、前年度から 13.9%減の 1,297 万ヘクタールで、このうち冬小麦は同 17.5%減の 851 万ヘクタールとなる見込み。単収は、前年度から 10.3%減の 3.21 トン/ヘクタールで、このうち冬小麦は同 14.6%減の 3.16 トン/ヘクタール。生産量は、前年度から 22.9%減の 4,166 万トンで、このうち冬小麦は同 29.4%減の 2,694 万トン(表1)。

同「Crop Progress」(2026.9.14)によれば、9月 13 日現在、2026/27 年度の春小麦の収穫進捗率は 93%と、前年同期 93%、過去5年平均 92%と同水準。また、2027/28 年度の冬小麦の作付けが開始されており、作付進捗率は8%と、前年同期 10%、過去5年平均 12%を下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 14.6%減、過去5年平均(21.8 百万トン)から 3.1%減の 21.1 百万トンとなる見込み。

同「Global Agricultural Trade System」よれば、2026/27 年度のうち 2026 年6～7月の輸出量は、前年同期(403.0 万トン)に比べ 22.6%減の 312.1 万トン。輸出先国別には、メキシコ 71.7 万トン(23.0%)、フィリピン 36.2 万トン(11.6%)、日本 35.9 万トン(11.5%)の順となっている(表2)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 22.1%減の 19.5 百万トンとなる見込み。

小麦－米国(冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年6月～27年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	53.9	54.0	41.7	-	▲ 22.9
消 費 量	31.1	30.9	29.9	-	▲ 3.3
うち飼料用	3.0	3.2	2.2	-	▲ 32.7
輸 出 量	22.6	24.7	21.1	-	▲ 14.6
輸 入 量	4.1	3.4	3.8	-	12.1
期末在庫量	23.3	25.0	19.5	-	▲ 22.1
期末在庫率	43.4%	45.0%	38.3%	-	▲ 6.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.63	15.07	12.97	-	▲ 13.9
単収(t/ha)	3.44	3.58	3.21	-	▲ 10.3

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(11 September 2026)

表1 米国の種類別生産量等の比較

	作付面積(万ヘクタール)		収穫面積(万ヘクタール)		単収(トン/ヘクタール)		生産量(万トン)	
	2025/26	2026/27	2025/26	2026/27	2025/26	2026/27	2025/26	2026/27
冬小麦	1,342	1,265	1,032	851	3.70	3.16	3,814	2,694
デュラム小麦	88	72	86	70	2.73	2.58	235	181
その他春小麦	404	389	389	376	3.48	3.44	1,352	1,291
小麦計	1,834	1,726	1,507	1,297	3.58	3.21	5,401	4,166

資料:USDA「Crop Production」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

表2 米国の小麦の輸出先国と輸出量

2025/26年度 (2025年6月～2026年5月)			2025/26年度 (2025年6月～7月)			2026/27年度 (2026年6月～7月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	441.0	18.2	メキシコ	71.2	17.7	メキシコ	71.7	23.0
フィリピン	254.3	10.5	フィリピン	46.4	11.5	フィリピン	36.2	11.6
日本	210.1	8.7	ナイジェリア	41.2	10.2	日本	35.9	11.5
韓国	187.5	7.8	日本	33.2	8.2	韓国	34.7	11.1
ナイジェリア	165.2	6.8	韓国	19.7	4.9	台湾	17.6	5.6
インドネシア	109.4	4.5	台湾	18.4	4.6	コロンビア	9.7	3.1
その他	1,049.9	43.4	その他	173.0	42.9	その他	106.3	34.1
計	2,417.5	100.0	計	403.0	100.0	計	312.1	100.0

資料:USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 11.2%減少する見込み(USDA)

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、単収の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、収穫面積及び単収が減少することを受け史上最高の前年度から 11.2%減となるものの、過去5年平均(33.4 百万トン)から 7.6%増の 36.0 百万トンとなる見込み(図)。一方、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.8.20)によれば、2026/27 年度の実産量は、単収の引上げを受け7月予測から 1.0 百万トン上方修正され、史上最高の前年度から 9.2%減となるものの、過去5年平均(33.3 百万トン)から 8.9%増の 36.3 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦は、7月予測から 0.8 百万トン上方修正され、史上最高の前年度(32.8 百万トン)から 8.6%減となるものの、過去5年平均(28.0 百万トン)から 7.1%増の 30.0 百万トンとなる見込み。デュラム小麦も、7月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度(7.1 百万トン)から 12.1%減となるものの、過去5年平均(5.3 百万トン)から 18.0%増の 6.3 百万トンとなる見込み。8月初旬の作柄は、春小麦はプレーリー地方の生育は概ね良好で、「良～優良」の割合がサスカチュワン州 87%、アルバータ州 64%、デュラム小麦は7月末時点でサスカチュワン州 79%、アルバータ州 77%と評価されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、前年度から 0.7%増の 30.0 百万トンとなる見込み(図)。一方、AAFC によれば、2026/27 年度の輸出量は、7月予測からわずかに上方修正されたものの、前年度から 4.8%減の 28.4 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦は7月予測から 0.3 百万トン上方修正されたものの、前年度から 2.1%減の 23.5 百万トン。デュラム小麦は北アフリカ及びトルコで豊作が見込まれることによる世界的な供給増を受け7月予測から 0.2 百万トン下方修正され、前年度から 15.8%減の 4.9 百万トン。

カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2025/26 年度の輸出量は、前年度(2,967.6 万トン)に比べ 3.6%減の 2,861.6 万トン。種類別には、普通小麦が前年度(2,390.8 万トン)に比べ 3.6%減の 2,305.3 万トンで、輸出先国別には、インドネシア 265.4 万トン(11.5%)、中国 256.3 万トン(11.1%)、日本 206.3 万トン(9.0%)の順。デュラム小麦は前年度(576.8 万トン)に比べ 3.6%減の 556.3 万トンで、輸出先国別には、アルジェリア 160.9 万トン(28.9%)、モロッコ 106.5 万トン(19.2%)、イタリア 99.5 万トン(17.9%)の順(表)。

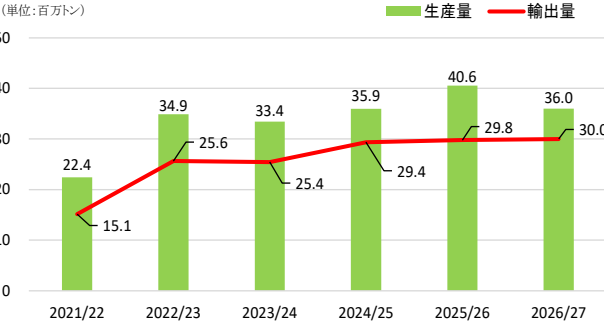
USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ及び消費量の引下げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 28.6%減の 4.8 百万トンとなる見込み。一方、AAFC によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、7月予測からの変更はなく、前年度から 6.4%減の 5.5 百万トンとなる見込み。

小麦－カナダ(春小麦を主に栽培)

年 度	2024/25 (見込み)		2026/27(26年8月～27年7月)			
			2026/27(26年8月～27年7月)		対前年度増減率(%)	
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)	対前年度増減率(%)
生 産 量	35.9	40.6 (40.0)	36.0 (36.3)	1.0 (1.0)	▲11.2	(▲9.2)
消 費 量	8.3	9.0 (8.6)	8.6 (8.4)	▲0.3 (0.4)	▲4.8	(▲2.1)
うち飼料用	3.1	3.6 (4.0)	3.2 (3.9)	▲0.3 (0.4)	▲11.8	(▲1.9)
輸 出 量	29.4	29.8 (29.8)	30.0 (28.4)	1.5 (0.02)	0.7	(▲4.8)
輸 入 量	0.6	0.6 (0.2)	0.7 (0.1)	- (-)	4.8	(▲33.5)
期末在庫量	4.2	6.7 (5.9)	4.8 (5.5)	0.1 (-)	▲28.6	(▲6.4)
期末在庫率	11.3%	17.2% (15.3%)	12.3% (15.0%)	▲0.02 (▲0.2)	▲4.8	(▲0.4)
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.65	10.62 (10.62)	10.10 (10.12)	- (-)	▲4.9	(▲4.7)
単収(t/ha)	3.37	3.82 (3.76)	3.56 (3.59)	0.09 (0.10)	▲6.8	(▲4.5)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(11 September 2026)
AAFC「Outlook For Principal Field Crops(20 August 2026) ※()書き。

図 カナダの小麦の生産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

表 カナダの小麦の輸出先国と輸出量

	2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2025/26年度 (2025年8月～2026年7月)		
	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
	普通小麦	247.0	10.3	インドネシア	265.4	11.5
普通小麦	中国	210.7	8.8	中国	256.3	11.1
	日本	191.2	8.0	日本	206.3	9.0
	ベトナム	164.2	6.9	バングラデシュ	168.5	7.3
	コロンビア	143.1	6.0	ベトナム	128.0	5.6
	その他	1,434.8	60.0	その他	1,280.8	55.6
	小計	2,390.8	100.0	小計	2,305.3	100.0
デュラム小麦	アルジェリア	156.8	27.2	アルジェリア	160.9	28.9
	モロッコ	124.2	21.5	モロッコ	106.5	19.2
	イタリア	83.8	14.5	イタリア	99.5	17.9
	米国	51.0	8.8	米国	31.7	5.7
	日本	22.7	3.9	日本	23.3	4.2
	その他	138.4	24.0	その他	134.4	24.2
小計		576.8	100.0	小計	556.3	100.0
小麦計		2,967.6		小麦計	2,861.6	

資料:CGC のデータをもとに農林水産省で作成

< 豪州 > 2026/27 年度の生産量は前年度から 17.0%減少する見込み(ABARES)

【生育・生産状況】豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2026.9.1)によれば、2026/27 年度の生産量は、南部の作付地域の大部分で適時の降雨に恵まれ作柄が改善し、収穫面積及び単収が引上げられたことを受け前回(6月)予測から 3.1 百万トン上方修正されたものの、史上3番目の生産量となった前年度から 17.0%減、過去5年平均(34.6 百万トン)から 13.6%減の 29.9 百万トンとなる見込み。州別の生産量は、ウエスタンオーストラリア州(WA)は前年度から 25.4%減の 10.0 百万トン、ニューサウスウェールズ州(NSW)は同 31.3%減の 7.7 百万トン、クイーンズランド州(QLD)は同 47.6%減の 1.2 百万トンとなる一方、サウスオーストラリア州(SA)は同 26.6%増の 6.0 百万トン、ビクトリア州(VIC)は同 15.2%増の 4.9 百万トン(図)。

WA 州、SA 州、VIC 州及び NSW 州南部のほとんどの冬作物は、理想的な時期に平年を上回る土壌水分条件の下で作付けが行われた。SA 州及び VIC 州では、5月から7月にかけて平年を上回る降雨量と、穏やかな気温により平年を大幅に上回る単収となる見込み。WA 州及び NSW 州南部・中部では概ね良好な状況が続いている。しかし、WA 州では、7月の降雨量が平年を下回り、作物にストレスを与えていることから現在の単収見通しを実現するには8、9月の降雨が極めて重要となる。NSW 州北部及び QLD 州の大部分では、5月に平年を上回る降雨があったものの、その後の降雨が限られたことから単収は平年を下回る見込み。

西豪州穀物産業協会(GIWA)「Crop Report」(2026.9.18)によれば、WA 州の小麦を含む冬作物の生育は、8月中旬以降の乾燥した天候により急速に悪化した。しかし、8月最終週に州中央部を中心に多くの降雨があり、生育は改善した。2026/27 年度の小麦の生産量は、前月予測から 99 万トン上方修正され 1,002 万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】ABARES によれば、2026/27 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 1.7 百万トン上方修正されたものの、前年度から 6.7%減、過去5年平均(25.0 百万トン)から 16.0%減の 21.0 百万トンとなる見込み。

同「Trade dashboard」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年7月の輸出量は、前年同期(1,985.7 万トン)に比べ 3.3%減の 1,920.5 万トン。輸出先国別には、フィリピン 378.1 万トン(19.7%)、インドネシア 369.1 万トン(19.2%)、イエメン 151.9 万トン(7.9%)の順(表)。

ABARES によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 2.8 百万トン上方修正されたものの、前年度から 13.2%減の 5.3 百万トンとなる見込み。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

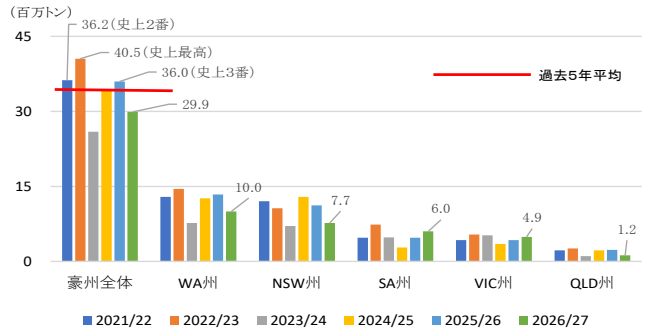
(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)			
			予測値	前月(前回)予測 からの変更	対前年度増減率(%)	
生 産 量	34.1	36.0 (36.0)	31.0 (29.9)	3.0 (3.1)	▲13.9	(▲17.0)
消 費 量	9.1	10.6 (10.5)	9.2 (9.7)	0.5 (0.8)	▲13.7	(▲7.1)
うち飼料用	5.6	7.0 ...	5.5 ...	0.5 ...	▲21.4	...
輸 出 量	23.7	24.0 (22.5)	23.5 (21.0)	1.5 (1.7)	▲2.1	(▲6.7)
輸 入 量	0.2	0.2 ...	0.2 ...	- ...	4.3	...
期末在庫量	4.0	5.6 (6.1)	4.2 (5.3)	1.5 (2.8)	▲25.3	(▲13.2)
期末在庫率	12.2%	16.2% (18.4%)	12.8% (17.2%)	4.1 (8.4)	▲3.4	(▲1.3)
(参考)						
収穫面積(百万ha)	13.06	12.41 (12.41)	11.00 (11.05)	- (0.13)	▲11.4	(▲11.0)
単収(t/ha)	2.61	2.90 (2.90)	2.82 (2.70)	0.27 (0.26)	▲2.8	(▲6.7)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(11 September 2026)

ABARES「Australian Crop Report」(1 September 2026) ※()書き。

図 豪州の小麦の州別生産量の推移



資料:ABARES「Australian Crop Report」(2026.9.1)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年7月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年7月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	449.6	19.0	インドネシア	375.8	18.9	フィリピン	378.1	19.7
フィリピン	352.7	14.9	フィリピン	278.6	14.0	インドネシア	369.1	19.2
タイ	170.9	7.2	タイ	161.3	8.1	イエメン	151.9	7.9
ベトナム	157.4	6.7	ベトナム	131.2	6.6	タイ	108.5	5.7
韓国	146.5	6.2	韓国	124.3	6.3	韓国	104.3	5.4
イエメン	137.6	5.8	イエメン	111.7	5.6	ベトナム	102.1	5.3
その他	946.6	40.1	その他	802.8	40.4	その他	706.5	36.8
計	2,361.3	100.0	計	1,985.7	100.0	計	1,920.5	100.0

資料: ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2026/27 年度の生産量は前年度から 8.3%減少する見込み(EC)

【生育・生産状況】欧州委員会(EC)「EU Cereals Balance Sheets」(2026.8.27)によれば、2026/27 年度の実産量は、収穫面積の引下げを受け前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、生育に好ましい気象条件により増産となった前年度から 8.3%減、過去5年平均(133.0 百万トン)から 1.1%減の 131.6 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦が、前月予測からスペイン等で引上げられたものの、ドイツ等の引下げを受け 0.2 百万トン下方修正され、前年度から 8.3%減、過去5年平均(125.3 百万トン)から 0.9%減の 124.2 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、前月予測からスペイン等の引上げを受け 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 8.2%減、過去5年平均(7.7 百万トン)から 4.4%減の 7.4 百万トンとなる見込み(図)。

USDA「Grain and Feed Quarterly」(2026.7.30)によれば、2026/27 年度の実産量は、本年5月以降の猛暑により、フランス、ドイツ、ポーランド、スペイン等で減少が見込まれている。特にフランスは猛暑の影響を強く受けており、収穫が平年に比べ約3週間も早く、保水力の低い土壌の小麦については容積重の低下など品質に悪影響を与えた。

EC「JRC MARS Bulletin - Crop monitoring in Europe」(2026.7.27)によれば、熱波により 2026/27 年度冬作物の登熟が短縮され収穫が早まった。南欧州では収穫は完了し、他の地域は進展中である。熱波は、西欧州の冬・夏作物に悪影響を及ぼし、西欧州及び中央欧州の一部では継続的な水不足が熱波の影響を悪化させた。

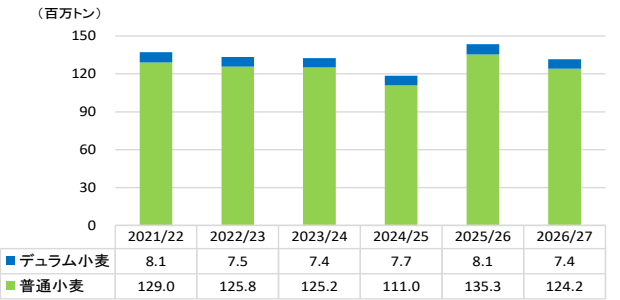
【貿易情報・その他】EC によれば、2026/27 年度の消費量は、飼料用消費量の引上げを受け前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度から 0.5%増の 113.0 百万トンとなる見込み。2026/27 年度の輸入量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 0.5%減の 6.6 百万トンとなる見込み。同「Cereals exports and imports」(2026.9.11)によれば、2026/27 年度のうち 2026 年7月の輸入量は、前年同月(45.5 万トン)に比べ 2.5%減の 44.3 万トン。種類別には、普通小麦が前年同月に比べ 28.6%減の 25.3 万トン。デュラム小麦が同 89.2%増の 19.1 万トン(表)。ロシアのウクライナ侵攻以降、ウクライナからの輸入が大きく増加していたが、関税割当制度の再開等により同国からの輸入は大きく減少している。2026/27 年度の実輸出量は、前月予測からわずかに下方修正され、前年度から 0.1%減の 30.0 百万トンとなる見込み。同「Cereals exports and imports」(2026.9.11)によれば、2026/27 年度のうち 2026 年7月の実輸出量は、前年同月(234.8 万トン)に比べ 17.6%増の 276.0 万トン。種類別には、普通小麦が前年同月に比べ 20.2%増の 271.7 万トン。デュラム小麦が同 50.6%減の 4.4 万トン(表)。2026/27 年度の期末在庫量は、消費量の引上げ等を受け前月予測から 1.3 百万トン下方修正され、前年度から 28.7%減の 11.8 百万トンとなる見込み。

小麦－EU27 (冬小麦を主に栽培)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年7月～27年6月)			
			2026/27(26年7月～27年6月)			対前年度増減率(%)
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)	
生産量	121.1	145.1 (143.4)	133.8 (131.6)	▲0.4 (▲0.1)	▲7.8 (▲8.3)	
消費量	108.0	113.5 (112.5)	114.8 (113.0)	- (0.5)	1.1 (0.5)	
うち飼料用	44.5	50.0 (47.1)	51.0 (47.6)	- (0.5)	2.0 (1.1)	
輸出量	27.9	31.7 (30.0)	31.0 (30.0)	- (▲0.03)	▲2.3 (▲0.1)	
輸入量	10.7	7.3 (6.7)	6.5 (6.6)	- (0.1)	▲10.7 (▲0.5)	
期末在庫量	11.8	19.0 (16.5)	13.5 (11.8)	▲0.5 (▲1.3)	▲28.7 (▲28.7)	
期末在庫率	8.7%	13.1% (11.6%)	9.3% (8.2%)	▲0.3 (▲0.9)	▲3.8 (▲3.3)	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	22.71	23.96 (23.70)	23.78 (23.27)	0.05 (▲0.12)	▲0.8 (▲1.8)	
単収(t/ha)	5.33	6.06 (6.05)	5.63 (5.65)	▲0.03 (0.03)	▲7.1 (▲6.6)	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(11 September 2026)
EC「EU Cereals Balance Sheets」(27 August 2026) ※()書き。

図 EU の種類別小麦生産量の推移



資料:EC「EU cereals production (usable), area and yield」(2026.8.27)をもとに農林水産省で作成

表 EU の小麦の輸出量及び輸入量

	〇輸出量				〇輸入量			
	2025/26年度 (2025年7月～2026年6月)		2026/27年度 (2026年7月)		2025/26年度 (2025年7月～2026年6月)		2026/27年度 (2026年7月)	
	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)
普通小麦	モロッコ	389.2	13.4	アルジェリア	33.9	12.5	カナダ	153.9
	アルジェリア	279.1	9.6	サウジアラビア	29.4	10.8	ウクライナ	102.7
	ナイジェリア	232.1	8.0	ナイジェリア	21.4	7.9	モルドバ	66.2
	その他	2,004.7	69.0	その他	187.0	68.8	その他	134.4
	小計	2,905.1	100.0	小計	271.7	100.0	小計	457.1
デュラム小麦	チュニジア	20.4	20.3	サウジアラビア	1.6	37.3	カナダ	117.8
	サウジアラビア	20.3	20.2	チュニジア	0.6	14.2	カザフスタン	44.1
	英国	9.1	9.1	アルバニア	0.3	6.9	米国	24.0
	その他	50.7	50.4	その他	1.8	41.6	その他	24.5
	小計	100.5	100.0	小計	4.4	100.0	小計	210.3
	小麦計	3,005.6		小麦計	276.0		小麦計	667.4

資料:EC「Cereals exports and imports」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2026/27 年度の生産量は前年度から 2.5%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量(クリミア地域分を含まず)は、単収の引下げを受け前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、収穫面積が減少することを受け前年度から 2.5%減となるものの、過去5年平均(86.1 百万トン)から 2.2%増の 88.0 百万トンと史上4番目の生産量となる見込み(図)。種類別には、冬小麦は、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度(63.0 百万トン)から 6.3%増の 67.0 百万トン。春小麦は、前月予測から 1.5 百万トン下方修正され、前年度(27.3 百万トン)から 23.1%減の 21.0 百万トンとなる見込み。

同「World Agricultural Production」(2026.7.10)によれば、2026/27 年度の冬小麦は、休眠明けから十分な降雨と適度な気温が維持され、主要な冬小麦生産地域で収穫見通しが向上した。一方、春小麦は、湿潤な春の気象条件により作付けが遅延した。

ロシア統計庁(2026.8.19)によれば、2026/27 年度の実産量の作付面積は、前年度から 4.6%減の 2,566 万ヘクタール。種類別には、冬小麦が前年度から 1.1%増の 1,598.6 万ヘクタールとなる一方、春小麦が同 12.8%減の 967.5 万ヘクタール。

ロシア農業省によれば、9月11日現在、2026/27 年度の実産量の収穫量は、前年同期に比べ921 万トン増の8,802 万トンで、収穫進捗率は 87%となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、黒海及びアゾフ海での混乱を受け前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、前年度から 10.4%減、過去5年平均(45.9 百万トン)から 6.3%減の 43.0 百万トンとなるものの、史上4番目の輸出量となる見込み(図)。

現地情報会社によれば、2026/27 年度のうち 2026 年7～8月の輸出量は、前年同期(616.8 万トン)に比べ 36.3%減の 393.1 万トン。輸出先国別には、エジプト 82.4 万トン(21.0%)、アゼルバイジャン 26.1 万トン(6.6%)、ナイジェリア 24.4 万トン(6.2%)の順(表)。8月の輸出量は、前年に比べ 53%減の 209 万トンとなった。黒海及びアゾフ海におけるウクライナのドローン攻撃等により平年に比べ輸出量は大きく減少している。8月 12 日にはノヴォロシースクの穀物ターミナルがドローン攻撃を受け操業を停止している。また、輸入国側もエジプト、トルコは自国の小麦在庫と収穫量の増加により買付けを減少させており、イラン向けも事実上停止している。一方、ロシア及びウクライナ産小麦の供給減を受け、豪州産小麦の輸出価格は7月以降大きく上昇している。

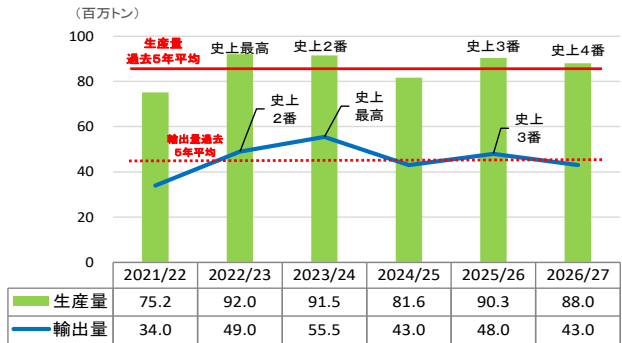
USDAによれば、2026/27 年度の期末在庫量は、輸出の停滞等を受け前月予測から 2.5 百万トン上方修正され、前年度から 34.2%増の 16.1 百万トンと 1993/94 年度(16.7 百万トン)以来の高水準となる見込み。

小麦一ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年7月～27年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	81.6	90.3	88.0 (88.4)	▲ 0.5	▲ 2.5
消 費 量	40.0	41.2	41.2 (41.8)	-	-
うち飼料用	17.0	18.0	18.0 (18.0)	-	-
輸 出 量	43.0	48.0	43.0 (45.2)	▲ 3.0	▲ 10.4
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	10.6	12.0	16.1 (13.0)	2.5	34.2
期末在庫率	12.8%	13.4%	19.1% (14.9%)	3.5	5.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	27.80	26.30	25.10 (24.48)	-	▲ 4.6
単収(t/ha)	2.94	3.43	3.51 (3.61)	▲ 0.02	2.3

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026)

図 ロシアの小麦の実産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

表 ロシアの小麦の輸出先国と輸出量

2025/26年度 (2025年7月～2026年6月)			2025/26年度 (2025年7～8月)			2026/27年度 (2026年7～8月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
エジプト	890.3	19.5	エジプト	115.7	18.8	エジプト	82.4	21.0
トルコ	669.4	14.7	トルコ	53.3	8.6	アゼルバイジャン	26.1	6.6
スーダン	229.4	5.0	イスラエル	37.6	6.1	ナイジェリア	24.4	6.2
ケニア	209.3	4.6	ケニア	34.6	5.6	スーダン	24.2	6.2
イスラエル	207.8	4.5	サウジアラビア	32.3	5.2	パングラデシュ	23.5	6.0
その他	2,361.6	51.7	その他	343.3	55.7	その他	212.5	54.1
合計	4,567.8	100.0	合計	616.8	100.0	合計	393.1	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ ウクライナ ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 7.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、単収の引上げを受け前月予測から0.6百万トン上方修正され、前年度から7.9%増、過去5年平均(25.0百万トン)から4.0%増の26.0百万トンとなる見込み(図)。

同「World Agricultural Production」(2026.9.11)によれば、2026/27年度の小麦について、収穫面積は前月予測からの変更はないものの、単収は4.73トン/ヘクタールと、前月予測から2%増、前年度から11%増となり、史上最高となる見込み。ウクライナ農業省が公表した収穫データでは、2026/27年度の小麦の収穫は完了しており、8月31日時点で98%が収穫済みとなっている。

現地情報会社によれば、9月14日現在、2026/27年度の小麦の収穫は終了し、2,492.6万トンが収穫されている。また、2027/28年度の冬小麦の作付けが開始されており、9月8日現在の作付進捗率は前年と同水準の1%。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27年度の輸出量は、黒海での混乱を受け前月予測から1.0百万トン下方修正され、前年度から11.3%減、過去5年平均(16.9百万トン)から25.9%減の12.5百万トンとなる見込み(図)。

EUは、ウクライナ産品の輸入に関し、「深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)」に基づき、関税割当制度等の適用を再開した。小麦及びメスリン等に対する年間輸入割当数量は130万トン、小麦粉等は同3万トンで、農業団体の「ウクライナ・アグリビジネスクラブ」によれば、6月1日時点で輸入割当数量130万トンは全て消化されており、年末までのEUへの小麦及びメスリン等の輸出については関税が課されることとなる。

現地情報会社によれば、2026/27年度のうち2026年7～8月の輸出量は、前年同期(262.4万トン)に比べ36.1%減の167.7万トン。輸出先国別には、アルジェリア30.4万トン(18.2%)、インドネシア30.3万トン(18.1%)、バングラデシュ30.2万トン(18.0%)の順(表)。小麦は例年7～9月が収穫期であり輸出もピークを迎えるが、ロシアの攻撃により黒海港湾の稼働が依然としてほぼ停止状態であり、大半が海上輸送される小麦は輸出が大きく減少している。8月の輸出量は、2022年以降では最低の水準となった。報道によれば、インドネシア、バングラデシュ、ベトナム、タイなどのアジア諸国がウクライナ産及びロシア産に代え、豪州産やアルゼンチン産の小麦の輸入を積極的に進めており、ウクライナ及びロシアは小麦輸出先のシェアを奪われる可能性が高いと指摘されている。

USDAによれば、2026/27年度の期末在庫量は、輸出の停滞等を受け前月予測から1.3百万トン上方修正され、前年度から205.0%増の6.1百万トンとロシア侵攻2021/22年度(6.3百万トン)以来の高水準となる見込み。

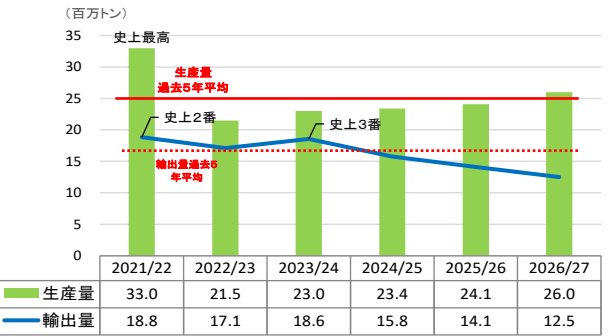
小麦－ウクライナ(主に冬小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年7月～27年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	23.4	24.1	26.0 (26.7)	0.6	7.9
消 費 量	8.5	8.8	9.5 (10.4)	0.3	8.0
うち飼料用	3.6	3.8	4.5 (3.1)	0.3	18.4
輸 出 量	15.8	14.1	12.5 (14.2)	▲ 1.0	▲ 11.3
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	25.0
期末在庫量	0.7	2.0	6.1 (3.9)	1.3	205.0
期末在庫率	3.0%	8.7%	27.7% (16.0%)	6.6	19.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.20	5.65	5.50 (6.40)	-	▲ 2.7
単収(t/ha)	4.50	4.27	4.73 (4.17)	0.11	10.8

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026)

図 ウクライナの小麦の生産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナの小麦の輸出先国と輸出量

2025/26年度 (2025年7月～2026年6月)			2025/26年度 (2025年7～8月)			2026/27年度 (2026年7～8月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
エジプト	385.5	27.6	エジプト	69.9	26.6	アルジェリア	30.4	18.2
アルジェリア	278.4	19.9	インドネシア	52.8	20.1	インドネシア	30.3	18.1
インドネシア	206.8	14.8	ベトナム	31.5	12.0	バングラデシュ	30.2	18.0
イエメン	104.8	7.5	アルジェリア	26.8	10.2	エジプト	13.1	7.8
スペイン	67.8	4.9	スペイン	24.3	9.3	スペイン	12.0	7.1
その他	355.0	25.4	その他	57.0	21.7	その他	51.6	30.8
合計	1,398.4	100.0	合計	262.4	100.0	合計	167.7	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2026/27年度の輸入量は前年度から9.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.7%増、過去5年平均(138.3 百万トン)から 2.0%増の 141.0 百万トンとなり、史上最高となる見込み。

中国国家统计局(2026.7.10)によれば、2026/27 年度の夏季産小麦の作付面積は、前年度から 0.3%減(6.7 万ヘクタール減)の 23.01 百万ヘクタール。単収は、前年度から 0.9%増(0.05 トン/ヘクタール増)の 6.04 トン/ヘクタール。生産量は、前年度から 0.6%増(0.78 百万トン増)の 139.0 百万トン。

なお、2026/27 年度の冬小麦及び春小麦の収穫は終了しているとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.3%減、過去5年平均(149.9 百万トン)からも 1.3%減の 148.0 百万トンとなる見込み。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2026 年7月号」によれば、収穫期の降雨による品質低下や7月中旬の台風による降雨が保管上の負担を増加させ、在庫を抱える事業者の出荷意欲が強まった。需要面では、小麦粉の消費が減少する時期にあり、製粉企業の稼働率は全体的に低水準で、また、とうもろこしの価格が下落したことから小麦を飼料用として利用する優位性が弱まったことなどにより、7月の国内価格はやや下落した。

USDA によれば、2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 9.9%増となるものの、過去5年平均(9.2 百万トン)から 34.9%減の 6.0 百万トンとなる見込み(図)。

同「Grain and Feed Update」(2026.7.3)によれば、中国は、主に特定の品質要件(高たんぱく質等)を満たすために小麦を輸入している。消費者の嗜好は高品質な製品へとシフトし続けており、高品質を求める需要は比較的安定して推移する見込み。一方、飼料用小麦の輸入は、中国国内の穀物供給が潤沢で、代替飼料原料もあることから、引き続き限定的となる可能性が高い。

2026 年5月 14 日の米中首脳会談後、ホワイトハウスは、5月 17 日付のファクトシートで中国が 2026 年から 2028 年の各年に少なくとも 170 億ドルの米国農産物を購入すると発表した。なお、具体的な品目は公表されていない。

中国商務部「米中経済貿易協議の暫定的な成果解説」(2026.5.21)によれば、米中双方が農産物の貿易拡大に向けて努力していく考えが示された。中国海関統計によれば、2026/27 年度のうち 2026 年7月の輸入量は、前年同月(41.4 万トン)に比べ 56.0%減の 18.2 万トン。輸入先国別には、カナダ 8.8 万トン(48.5%)、豪州 5.7 万トン(31.0%)、ロシア 2.0 万トン(10.7%)の順(表)。USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.6%減の 120.2 百万トンとなる見込み。

小麦－中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年7月～27年6月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	140.1	140.1	141.0	(140.5)	-	0.7
消費量	150.0	150.0	148.0	(146.9)	-	▲ 1.3
うち飼料用	33.0	33.0	31.0	(28.0)	-	▲ 6.1
輸 出 量	1.0	1.1	1.0	(1.3)	-	▲ 9.1
輸 入 量	4.2	5.5	6.0	(6.3)	-	9.9
期末在庫量	127.8	122.2	120.2	(133.4)	-	▲ 1.6
期末在庫率	84.6%	80.9%	80.7%	(90.0%)	-	▲ 0.2

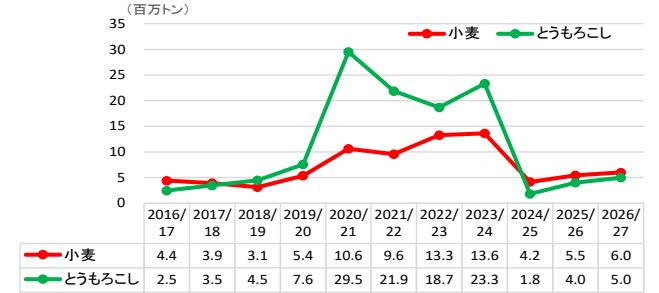
(参考)

収穫面積(百万ha)	23.59	23.58	23.60	(23.59)	-	0.1
単収(t/ha)	5.94	5.94	5.97	(5.96)	-	0.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(11 September 2026)

IGC「Grain Market Report」(20 August 2026)

図 中国の小麦及びとうもろこしの輸入量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦の輸入先国と輸入量

2025/26年度 (2025年7月～2026年6月)			2025/26年度 (2025年7月)			2026/27年度 (2026年7月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
カナダ	291.0	57.0	カナダ	35.6	85.9	カナダ	8.8	48.5
豪州	125.8	24.6	豪州	5.1	12.4	豪州	5.7	31.0
アルゼンチン	35.0	6.8	日本	0.3	0.8	ロシア	2.0	10.7
米国	33.6	6.6	ロシア	0.2	0.5	カザフスタン	1.6	8.5
ロシア	13.8	2.7	フランス	0.1	0.3	フランス	0.2	1.0
カザフスタン	6.2	1.2	韓国	0.01	0.03	日本	0.04	0.2
その他	5.3	1.0	その他	0.01	0.02	その他	0.02	0.1
合計	510.7	100.0	合計	41.4	100.0	合計	18.2	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2026/27年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・EU、バングラデシュ、カナダ、パラグアイ等で上方修正されたものの、米国、インド、ケニア、ロシア、セルビア等で下方修正され、前月から下方修正された。

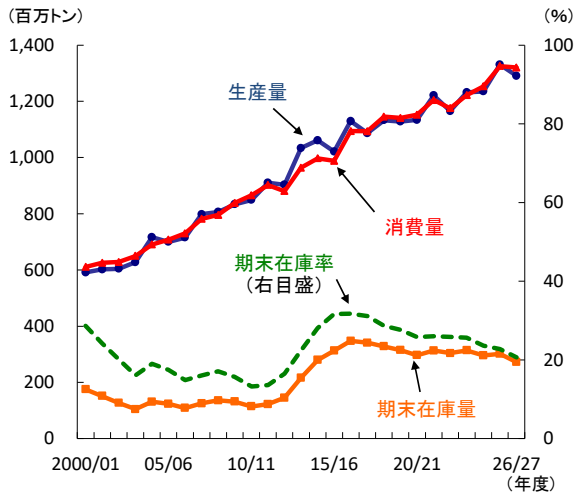
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ブラジル、EU、カナダ、ケニア、パラグアイ等で上方修正されたものの、米国、イラン、メキシコ、ロシア、ザンビア等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ザンビア等で上方修正されたものの、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

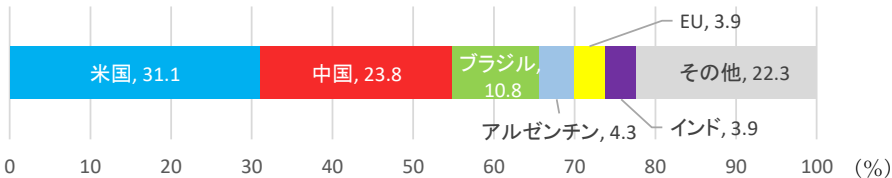
◎世界のとうもろこし需給

(単位:百万トン)

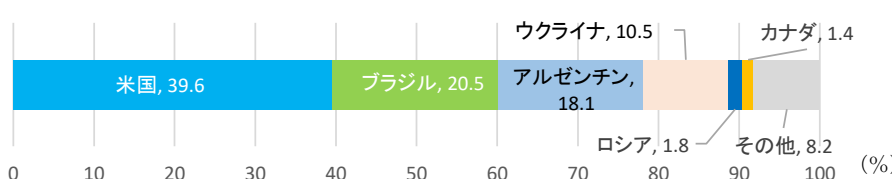
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,235.0	1,330.8	1,291.0	▲ 7.9	▲ 3.0
消 費 量	1,253.2	1,325.1	1,320.2	▲ 2.8	▲ 0.4
うち飼料用	785.8	826.1	827.4	▲ 5.1	0.2
輸 出 量	187.6	218.2	210.1	▲ 0.4	▲ 3.7
輸 入 量	186.6	196.3	203.1	▲ 0.6	3.5
期末在庫量	295.7	301.4	272.1	▲ 2.6	▲ 9.7
期末在庫率	23.6%	22.7%	20.6%	▲ 0.1	▲ 2.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 September 2026)

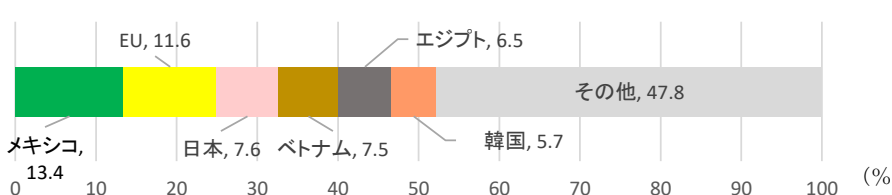
○ 2026/27年度 世界のとうもろこしの生産量 (1,291.0 百万トン)



○ 2026/27年度 世界のとうもろこしの輸出量 (210.1 百万トン)



○ 2026/27年度 世界のとうもろこしの輸入量 (203.1 百万トン)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

< 米国 > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 7.2%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実生産量は、前月予測から 5.4 百万トン下方修正され、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から 7.2%減となるものの、過去5年平均(385.7 百万トン)からは 4.1%増の 401.3 百万トンと史上2番目の見込み。同「Feed Outlook」(2026.9.15)によれば、特に、ネブラスカ州、ノースダコタ州、カンザス州の実生産量が前月から大きく下方修正された。これは、ネブラスカ州及びカンザス州では単収及び収穫面積が引下げ、ノースダコタ州では単収が引下げとなったことによる。これらの州の一部地域では生育上の重要な時期に高温乾燥に見舞われた。一方、アーカンソー州、アイオワ州、ミシシッピ州、テネシー州では、過去最高の単収が見込まれている。同「Crop Production」(2026.9.11)によれば、8月には、中西部北部を中心に気温が良好な水準へ戻った一方、中旬にはイリノイ州中部からオハイオ州の一部で洪水が発生した。コーンベルトの北部及び西部の一部では、同月を通じて乾燥が続いた。

同「Crop Progress」(2026.9.14)によれば、9月 13 日現在、デント(穀粒に窪みができる段階)進捗率は 86%(前年同期 83%、過去5年平均 84%)となっている。また、主要生産 18 州のうち 13 州で収穫が開始され、収穫進捗率は8%(前年同期7%、過去5年平均6%)となっている(図)。作柄評価は「良～優良」の割合が 57%と、前年同期(67%)を下回っている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、生産量の引下げ等を受け前月予測から 3.8 百万トン下方修正され、飼料用消費の減少等を受け前年度から 2.6%減の 327.8 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、他の輸出国との競争等を受け前年度から 4.4%減の 83.2 百万トンとなる見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度の輸出量は、前年度(6,776.2 万トン)に比べ 25.2%増の 8,483.5 万トン。輸出先国別には、メキシコ 2,471.7 万トン(29.1%)、日本 1,548.2 万トン(18.2%)、韓国 893.8 万トン(10.5%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の引下げ等を受け前月予測から 2.2 百万トン下方修正され、生産量の減少等を受け前年度から 18.5%減、過去5年平均(40.5 百万トン)から 1.8%減の 39.8 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 1.8 ポイント減の 9.7%となる見込み。

とうもろこしー米国

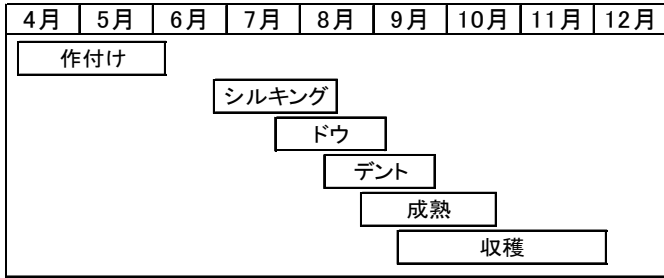
(4～5月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年9月～27年8月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	378.3	432.3	401.3	▲ 5.4	▲ 7.2
消 費 量	311.2	336.7	327.8	▲ 3.8	▲ 2.6
うち飼料用	138.1	161.3	151.1	▲ 3.8	▲ 6.3
エタノール用等	138.1	141.0	142.2	-	0.9
輸 出 量	73.0	87.0	83.2	-	▲ 4.4
輸 入 量	0.6	0.8	0.6	-	▲ 15.8
期末在庫量	39.4	48.8	39.8	▲ 2.2	▲ 18.5
期末在庫率	10.3%	11.5%	9.7%	▲ 0.4	▲ 1.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.61	36.93	35.82	▲ 0.03	▲ 3.0
単収(t/ha)	11.26	11.71	11.21	▲ 0.14	▲ 4.3

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)

図 米国とうもろこしのクロップカレンダー



資料:USDA「National Crop Progress – Timetable」をもとに農林水産省で作成

表 米国のとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年 9 月～2025年 8 月)			2025/26年度 (2025年 9 月～2026年 8 月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	2,212.2	32.6	メキシコ	2,471.7	29.1
日本	1,344.0	19.8	日本	1,548.2	18.2
コロンビア	743.7	11.0	韓国	893.8	10.5
韓国	617.4	9.1	コロンビア	823.6	9.7
台湾	241.7	3.6	スペイン	498.1	5.9
その他	1,617.3	23.9	その他	2,248.0	26.5
合計	6,776.2	100.0	合計	8,483.5	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

＜ ブラジル ＞ 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.4%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 1.4%減となるものの、過去5年平均(129.8 百万トン)から 7.1%増の 139.0 百万トンとなる見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2026.9.15)によれば、2025/26 年度の実産量は、作付面積の増加を受け前年度から 2.0%増の 144.0 百万トンとなる見込み。作期別には、第1期作の実産量は、前年度から 18.3%増の 29.5 百万トンとなる見込み。良好な気象条件と生産者による投資を受け単収は史上最高となった。第2期作の実産量は、前年度から 1.0%減の 112.1 百万トンとなる見込み。サンパウロ州、マツ・グロッソ・ド・スール州、パラナ州では、降雨により穀粒の乾燥が遅れ収穫が遅延したものの、9月初旬時点で、第2期作全体の収穫進捗率は 96.6%となっている。第3期作の実産量は、前年度から 20.1%減の 2.4 百万トンとなる見込み。全生産州で収穫が開始されている(図)。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、エタノール用需要の増加を受け前年度から 3.6%増の 102.0 百万トンと史上最高の見込み。

同「Biofuels Annual」(2026.9.2)によれば、ブラジル政府は、8月1日、ガソリンへの無水エタノール混合率を 30%から 32%(E32)に引き上げた。これは、ガソリン輸入量と余剰エタノールの削減を目的とした一時的な措置で、期間は 180 日間。一度のみ 180 日間延長することが可能となっている。なお、2025 年のブラジルのエタノール生産量のうち約 76%がさとうきび由来、約 24%がとうもろこし由来であった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、旺盛な国内需要を受け前月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、供給量の増加を受け前年度から 7.5%増の 43.0 百万トンとなる見込み。ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2026 年3～8月の輸出量は、前年同期(1,073.1 万トン)に比べ 18.7%減の 873.0 万トン。輸出先国別には、エジプト 316.9 万トン(36.3%)、イラン 66.7 万トン(7.6%)、ベトナム 66.6 万トン(7.6%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.5 百万トン上方修正されたものの、生産量の減少及び輸出量の増加を受け前年度から 28.4%減、過去5年平均(9.4 百万トン)からは 13.1%増の 10.6 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 3.4 ポイント減の 7.3%となる見込み。

とうもろこしーブラジル

(第1期作は、10～12 月に作付けされ、2～6月に収穫される。第2期作は、大豆収穫後の1～2月に作付けされ、6～9月に収穫される。)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (27年3月～28年2月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.0	141.0 (144.0)	139.0 (-)	- (-)	▲1.4 (-)
消 費 量	92.5	98.5 (98.2)	102.0 (-)	2.0 (-)	3.6 (-)
うち飼料用	65.0	65.0 ...	65.0 ...	- ...	- ...
輸 出 量	42.0	40.0 (43.9)	43.0 (-)	▲1.0 (-)	7.5 (-)
輸 入 量	1.8	1.7 (1.7)	1.8 (-)	- (-)	5.9 (-)
期末在庫量	10.6	14.8 (15.7)	10.6 (-)	0.5 (-)	▲28.4 (-)
期末在庫率	7.9%	10.7% (11.0%)	7.3% (-)	0.3 (-)	▲3.4 (-)

(参考)
収穫面積(百万ha) 22.30 22.80 (22.60) 23.20 (-) - (-) 1.8 (-)
単収(t/ha) 6.10 6.18 (6.37) 5.99 (-) - (-) ▲3.1 (-)
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
CONAB「Graos」(15 September 2026) ※()書き、なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

図 ブラジルのクロープカレンダー

2025/26年度	2025年				2026年							
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
とうもろこし 第1期作		作付け 4.1百万ha			収穫 29.5百万トン							
とうもろこし 第2期作					作付け 17.8百万ha					収穫 112.1百万トン		
とうもろこし 第3期作										作付け 0.7百万ha		収穫 2.4百万トン
大豆		作付け 48.6百万ha								収穫 180.4百万トン		

資料:CONAB「Graos」(2026.9.15)等をもとに農林水産省で作成。
なお、作付け及び収穫の時期は目安である。

表 ブラジルのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2025年3月～2026年2月)			2024/25年度 (2025年3～8月)			2025/26年度 (2026年3～8月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
イラン	871.3	20.9	イラン	183.7	17.1	エジプト	316.9	36.3
エジプト	724.2	17.4	エジプト	136.2	12.7	イラン	66.7	7.6
ベトナム	527.6	12.7	ベトナム	116.7	10.9	ベトナム	66.6	7.6
サウジアラビア	219.6	5.3	スペイン	80.9	7.5	中国	51.2	5.9
中国	192.9	4.6	サウジアラビア	78.0	7.3	スペイン	49.8	5.7
その他	1,634.1	39.2	その他	477.7	44.5	その他	321.7	36.9
合計	4,169.7	100.0	合計	1,073.1	100.0	合計	873.0	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

< アルゼンチン > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 12.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から 12.7%減となるものの、過去5年平均(50.5 百万トン)から 8.9%増の 55.0 百万トンとなる見込み。同「Grain and Feed Update」(2026.7.23)によれば、2026/27 年度の作付面積は、2025/26 年度の終盤にアルゼンチン北部において病害虫であるヨコバイの発生が確認された影響で他作物への転作が進むと見込まれ、前年度から 20～30 万ヘクタール減少すると予測されている。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2026.9.3)によれば、9月3日時点の2025/26年度の実進捗率は前年同期と同じ 97%であり、主要生産州では、ブエノス・アイレス州 94%(前年同期 92%)、サンタフェ州 98%(同 100%)となっている。ラ・パンパ州では、直近では、降雨がなかったことで穀粒の乾燥が進み、収穫作業が進展したものの、実進捗率は 78%と、前年同期 91%に比べ遅れている。コルドバ州での収穫作業は終了した。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の減少を受け前年度から 4.8%減の 17.7 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少を受け前年度から 15.6%減の 38.0 百万トンとなる見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2025/26 年度のうち 2026 年3～7月の輸出量は、前年同期(1,702.5 万トン)に比べ 32.6%増の 2,258.1 万トン。輸出先国別には、ベトナム 392.7 万トン(17.4%)、エジプト 231.4 万トン(10.2%)、アルジェリア 212.6 万トン(9.4%)の順となっている(表)。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2026.9.11)によれば、9月8日現在の輸出価格は、アルゼンチンは、需要の高まりを受け前月から 13ドル/トン上昇し 219ドル/トン、米国は新穀の実産量減を受け前月から 30ドル/トン上昇し 252ドル/トン、ブラジルは、旺盛な国内需要により輸出可能な量がタイトになっており、前月から 16ドル/トン上昇し 238ドル/トンとなっている。ウクライナは、輸出インフラへの攻撃が輸出の妨げとなっており、9月1日以降、FOB 価格は公表されていない(図)。USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少を受け前年度から 14.9%減となるものの、過去5年平均(3.9 百万トン)からは 2.8%増の 4.0 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 0.2 ポイント減の 7.2%となる見込み。

とうもろこしーアルゼンチン

(早植えとうもろこしは、9月後半～12月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、12月前半～翌年2月前半に作付けされる。3～8月に収穫される。)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (27年3月～28年2月)		
			予測値、() は IGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	49.0	63.0	55.0 (63.0)	-	▲ 12.7
消費量	17.1	18.6	17.7 (22.2)	-	▲ 4.8
うち飼料用	12.7	14.0	13.0 (17.0)	-	▲ 7.1
輸 出 量	29.1	45.0	38.0 (41.0)	-	▲ 15.6
輸 入 量	0.01	0.01	0.01 (0.001)	-	-
期末在庫量	5.3	4.7	4.0 (7.7)	-	▲ 14.9
期末在庫率	11.5%	7.4%	7.2% (12.2%)	-	▲ 0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.83	8.20	7.90 (8.80)	-	▲ 3.7
単収(t/ha)	7.18	7.68	6.96 (7.16)	-	▲ 9.4

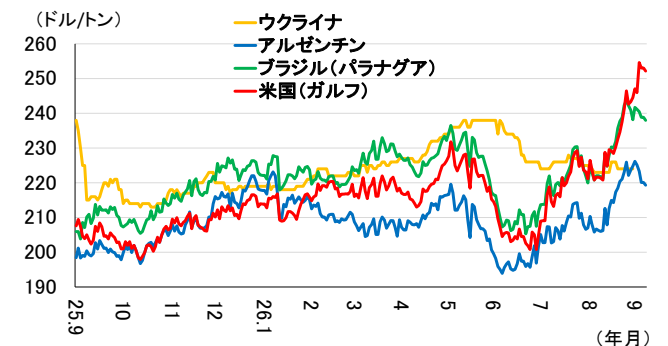
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026)

表 アルゼンチンのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2025年3月～2026年2月)			2024/25年度 (2025年3～7月)			2025/26年度 (2026年3～7月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ベトナム	534.1	18.4	ベトナム	330.0	19.4	ベトナム	392.7	17.4
ペルー	462.8	15.9	ペルー	195.2	11.5	エジプト	231.4	10.2
マレーシア	309.5	10.6	マレーシア	162.6	9.5	アルジェリア	212.6	9.4
アルジェリア	259.0	8.9	アルジェリア	159.7	9.4	ペルー	211.3	9.4
サウジアラビア	214.9	7.4	エジプト	155.9	9.2	サウジアラビア	196.3	8.7
その他	1,125.7	38.7	その他	699.0	41.1	その他	1013.7	44.9
合計	2,905.9	100.0	合計	1,702.5	100.0	合計	2,258.1	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省で作成。なお、その他には秘匿「Confidential」の数量を含む。

図 各国のとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成。なお、ウクライナの9月1日以降のデータは公表されていない。

＜ ウクライナ ＞ 2026/27 年度の生産量は、前年度から 2.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 2.9%増となるものの、過去5年平均(31.9 百万トン)から 0.2%減の 31.8 百万トンとなる見込み。

農業市場情報システム(AMIS)「Market Monitor No.141」(2026.9.4)によれば、高温乾燥型の天候が作物への被害を及ぼすとともに、早期の登熟により成熟が不十分となった。

現地情報会社によれば、8月上旬及び下旬は特に高温となり、月末には一部地域では登熟が早まっており、穀粒の重量減少が懸念されている。9月 14 日現在、収穫進捗率は1%となっている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用需要の増加等を受け前年度から 10.8%増の 7.2 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.8%減の 22.0 百万トンとなる見込み。

同「Feed Outlook」(2026.8.14)によれば、7月下旬にオデーサの港湾施設やその周辺で発生した攻撃により、輸出ターミナルや船舶、乗組員が被害を受け、海上を通じた穀物輸送能力が低下し、輸出見通しが不透明となっている。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年8月の輸出量は、前年同期(1,996.6 万トン)に比べ 9.8%増の 2,193.0 万トン。輸出先国別には、トルコ 681.2 万トン(31.1%)、イタリア 393.2 万トン(17.9%)、スペイン 202.0 万トン(9.2%)の順となっている(表)。

現地情報会社によれば、国内市場のとうもろこし価格は、国内在庫の積み上げと国内企業の買い控えにより一貫して下落が続いた。国内の一部地域で収穫が始まったことも価格の下押し圧力となった。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引上げを受け前月予測から 0.6 百万トン上方修正され、生産量の増加及び輸出量の減少を受け前年度から 91.6%増、過去5年平均(3.0 百万トン)から 81.7%増の 5.5 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 8.8 ポイント増の 18.7%となる見込み。

とうもろこしーウクライナ

(4～5月に作付けされ、8～11 月に収穫される。)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.8	30.9	31.8	(32.9)	-	2.9
消 費 量	6.5	6.5	7.2	(6.9)	-	10.8
うち飼料用	5.3	5.0	5.5	(4.7)	-	10.0
輸 出 量	20.0	22.4	22.0	(22.0)	-	▲ 1.8
輸 入 量	0.02	0.01	0.01	(0.002)	-	-
期末在庫量	0.8	2.9	5.5	(6.8)	0.6	91.6
期末在庫率	3.2%	9.9%	18.7%	(23.5%)	2.1	8.8
(参考)						
収穫面積(百万ha)	4.10	4.40	4.45	(4.60)	-	1.1
単収(t/ha)	6.54	7.02	7.15	(7.15)	-	1.9

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026)

写真 西部リヴィウ州の圃場



この圃場ではとうもろこしが黄熟期を迎え、9月 13～14 日頃には完熟期になる見込み。農場関係者は9月 14～17 日頃に収穫を行うのが最適とみている。(9月7日撮影)

表 ウクライナのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年 9 月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年 8 月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年 8 月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
トルコ	568.8	28.4	トルコ	568.8	28.5	トルコ	681.2	31.1
イタリア	273.6	13.7	イタリア	271.7	13.6	イタリア	393.2	17.9
スペイン	240.7	12.0	スペイン	240.7	12.1	スペイン	202.0	9.2
オランダ	199.1	10.0	オランダ	199.1	10.0	オランダ	179.8	8.2
エジプト	162.5	8.1	エジプト	162.5	8.1	チュニジア	94.2	4.3
その他	556.1	27.8	その他	553.9	27.7	その他	642.6	29.3
合計	2,000.8	100.0	合計	1,996.6	100.0	合計	2,193.0	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 1.9%増、過去5年平均(287.0 百万トン)から 7.0%増の 307.0 百万トンと史上最高の見込み(図)。同「Grain and Feed Update」(2026.7.3)によれば、2025 年後半からの比較的堅調なとうもろこし価格に支えられ、特に東北部の農家は作付面積を拡大すると予測されている。

中国中央气象台「全国農業気象週報」(2026.9.14)によれば、9月6～12 日の期間、春とうもろこしは、東北部では乳熟期から成熟期にあり、登熟に適した気象条件であった。一方、四川省北部では多雨により一部の低地圃場で過湿となった。夏とうもろこしは、河南省、山東省、河北省、安徽省、江蘇省では乳熟期から成熟期にあり、登熟に適した気象条件であった。四川省北部では一部圃場で過湿となった。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.3%増の 324.0 百万トンと史上最高の見込み。同「World Agricultural Production」(2026.5.12)によれば、家禽肉生産の堅調な伸び、養豚部門及び国内加工業界からの安定した需要により消費量は増加すると見込まれる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 25.0%増の 5.0 百万トンとなる見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年7月の輸入量は、前年同期(173.0 万トン)に比べ 77.4%増の 306.9 万トン。輸入先国別には、ブラジル 192.9 万トン(62.9%)、ロシア 47.3 万トン(15.4%)、アルゼンチン 34.4 万トン(11.2%)の順となっている(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2026 年7月号」によれば、7月の国内価格は前月(2,460 元/トン)から減少し 2,440 元/トンとなった。中国南部のとうもろこしが順次出回り、供給が増加する一方、飼料用及び加工用需要は弱く、国内価格は安定しつつやや弱含みで推移すると見込まれる。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量の増加を受け前年度から 6.8%減、過去5年平均(199.1 百万トン)から 17.1%減の 165.1 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 4.4 ポイント減の 51.0%となる見込み。

とうもろこしー中国

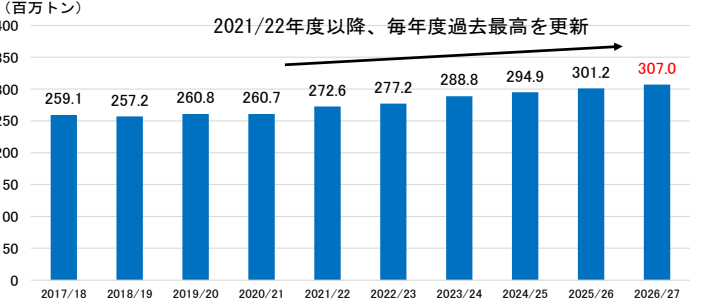
(春とうもろこしは、2～4月に作付けされ、7～9月に収穫される。夏とうもろこしは、4～6月に作付けされ、9～10月に収穫される。)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	294.9	301.2	307.0 (306.0)	-	1.9
消 費 量	316.0	320.0	324.0 (314.4)	-	1.3
うち飼料用	234.0	238.0	242.0 (212.0)	-	1.7
輸 出 量	0.00	0.02	0.02 (0.0)	-	-
輸 入 量	1.8	4.0	5.0 (4.5)	-	25.0
期末在庫量	191.9	177.2	165.1 (173.4)	-	▲ 6.8
期末在庫率	60.7%	55.4%	51.0% (55.1%)	-	▲ 4.4

(参考)					
収穫面積(百万ha)	44.74	44.96	45.40 (45.13)	-	1.0
単収(t/ha)	6.59	6.70	6.76 (6.78)	-	0.9

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026)

図 中国のとうもろこしの生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

表 中国のとうもろこしの輸入先国と輸入量

2024/25 年度 (2024年10月～2025年 9 月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年 7 月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年 7 月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	72.4	39.7	ブラジル	72.4	41.9	ブラジル	192.9	62.9
ウクライナ	37.6	20.6	ウクライナ	37.6	21.7	ロシア	47.3	15.4
ロシア	36.8	20.2	ロシア	30.1	17.4	アルゼンチン	34.4	11.2
ミャンマー	22.8	12.5	ミャンマー	20.5	11.9	ミャンマー	21.7	7.1
ラオス	6.4	3.5	ラオス	6.2	3.6	ウクライナ	6.2	2.0
米国	3.9	2.1	米国	3.9	2.3	ラオス	4.3	1.4
その他	2.3	1.3	その他	2.3	1.3	その他	0.0	0.0
計	182.3	100.0	計	173.0	100.0	計	306.9	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2026/27年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ラオス、豪州で上方修正されたものの、インド、バングラデシュ等で下方修正され、前月から下方修正された。

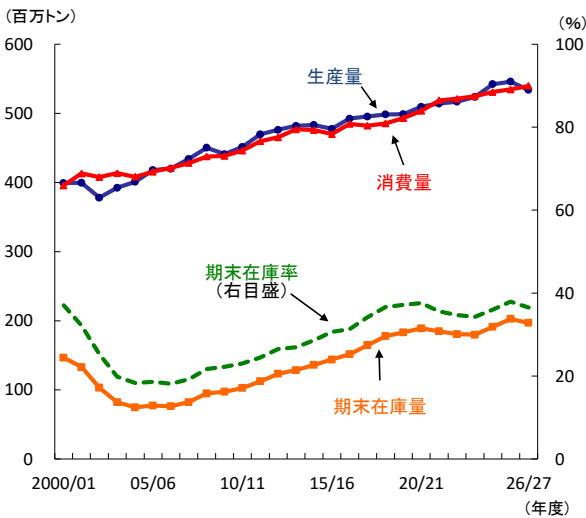
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・インド、イラク、ベトナム等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・カンボジア等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省にて作成

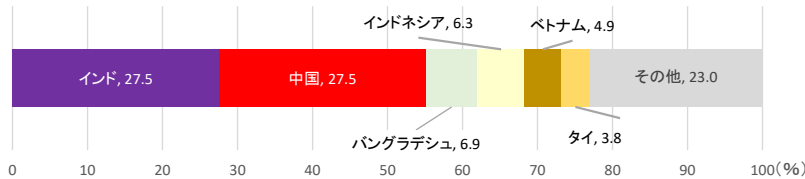
◎世界のコメ需給

(単位:百万精米トン)

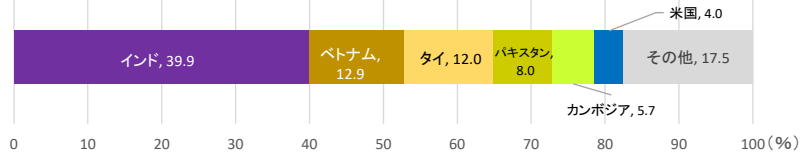
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	542.3	545.9	533.9	▲ 3.4	▲ 2.2
消 費 量	530.9	534.4	539.6	▲ 3.2	1.0
輸 出 量	61.5	59.6	62.6	▲ 0.2	5.0
輸 入 量	58.0	56.4	59.8	▲ 0.4	6.1
期末在庫量	191.2	202.7	197.0	4.4	▲ 2.8
期末在庫率	36.0%	37.9%	36.5%	1.0	▲ 1.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 September 2026)

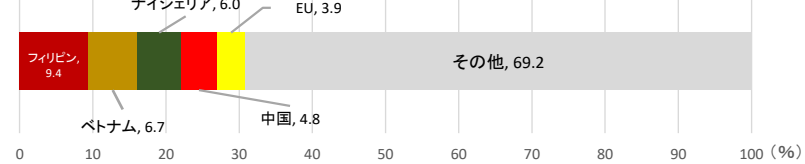
○ 2026/27年度 世界のコメの生産量(533.9百万トン)



○ 2026/27年度 世界のコメの輸出量(62.6百万トン)



○ 2026/27年度 世界のコメの輸入量(59.8百万トン)



(2) 国別のコメの需給動向

< タイ > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が前年度比 0.9%減及び単収が 1.1%減となることから、前年度から 1.9%減の 20.3 百万トンの見込み。

同「Grain and Feed Monthly」(2026.9.4)によれば、生産量の減少は、チャオプラヤ川流域の主要貯水池の水位低下や、エルニーニョ現象の影響を受け、乾季米の作付面積が減少することによる。乾季米の収穫面積は 2.07 百万ヘクタールから 1.93 百万ヘクタールへ縮小する一方、雨季米の収穫面積は 8.90 百万ヘクタール前後で推移すると予測されている。

タイ農業協同組合省農業経済局(2026.8)によれば、2026/27 年度の雨季米の作付面積は、コメの市場価格が低水準にあること、作付面積及び作付回数の削減を受け、前月予測(9.79 百万ヘクタール)から下方修正され、前年度から 0.6%減の 9.73 百万ヘクタールと予測されている。中東紛争に起因した肥料価格の値上がりによる生産コストの上昇により、作付面積は更に減少する可能性が示唆されている。

アセアン食料安全保障情報システム(2026.8)によれば、2026/27年度の雨季米は、現在、分げつ期にある。作付面積は、予測作付面積の約90%に達しているが、7月に一部地域で乾燥した天候が続いたこと及びいもち病が発生したことにより、稲の生育に悪影響を及ぼした。干ばつや肥料施用量の減少を受け、単収の制限が見込まれるため、総生産量は前年を下回ると予測されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 7.1%増の 7.5 百万トンの見込み。同「Grain and Feed Monthly」(2026.9.4)によれば、2025/26 年度の輸出量は、バーツ高やインド、ベトナム、パキスタンからの継続的な競争圧力により、低水準に留まっている。タイコメ輸出事業者協会及び商務省は、2026 年の輸出量を 2021 年来の最低水準となる 7.0 百万トンと見込んでいる。

タイ関税局によれば、2025/26 年度の輸出量のうち 2026 年1～7月の輸出量は、前年同期(462.0 万トン)に比べ 15.6%減の 389.8 万トンで、輸出先国別には、南アフリカ 58.2 万トン(14.9%)、米国 41.8 万トン(10.7%)、マレーシア 39.5 万トン(10.1%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、堅調な国内生産、輸出量の減少(2024/25 年度比)を受け、前年度から 1.3%増の 3.9 百万トンとなり、過去5年間で最高水準に達する見込み。

コメ・タイ

夏期の雨季作(5～10月作付け、同年7月～翌年5月収穫)と冬期の乾季作(11月～翌年4月作付け、翌年2～10月収穫)で行われる。主にインディカ米を栽培。

(単位:百万精米トン)					
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (27年1月～27年12月)		
			予測値、OはIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	20.8	20.7	20.3 (20.7)	-	▲ 1.9
消 費 量	12.5	12.7	12.8 (12.7)	-	0.8
輸 出 量	7.9	7.0	7.5 (7.0)	-	7.1
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.02)	-	-
期末在庫量	2.8	3.8	3.9 (3.9)	-	1.3
期末在庫率	13.5%	19.3%	19.0% (19.8%)	-	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	11.08	11.00	10.90 (10.90)	-	▲ 0.9
単収(穂t/ha)	2.85	2.85	2.82 (1.86)	-	▲ 1.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026) (単収は精米t/ha)

写真 作付後 80 日目のジャボニカ米圃場



6月20日に作付け。生育は順調(タイ東北部ウドンタニ県で9月8日撮影)。

表 タイのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2025年1～12月)			2024/25年度 (2025年1～7月)			2025/26年度 (2026年1～7月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
イラク	101.1	12.3	イラク	63.8	13.8	南アフリカ	58.2	14.9
南アフリカ	98.0	12.0	南アフリカ	51.7	11.2	米国	41.8	10.7
米国	81.8	10.0	米国	49.2	10.6	マレーシア	39.5	10.1
中国	65.5	8.0	中国	40.7	8.8	フィリピン	39.1	10.0
セネガル	32.4	3.9	セネガル	22.3	4.8	中国	17.2	4.4
マレーシア	28.8	3.5	日本	17.6	3.8	モザンビーク	13.4	3.5
その他	412.7	50.3	その他	216.8	46.9	その他	180.5	46.3
計	820.3	100.0	計	462.0	100.0	計	389.8	100.0

資料:タイ関税局「Electronic Service」をもとに農林水産省で作成

< 米国 > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 23.5%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA「Rice Outlook: September 2026」(2026.9.15)によれば、2026/27年度の実産量は、収穫面積の引下げが単収の引上げを上回り、前月予測から0.01百万トン下方修正され、前年度からは、23.5%減の5.0百万トンと33年ぶり(1993/94年度5.1百万トン)の低水準となる見込み。

同米国農業統計局(NASS)の9月の生産報告によれば、2026/27年度の実産量は、前月予測から0.01百万ヘクタール下方修正、前年度から25.2%減の0.83百万ヘクタールと1972/73年度以来の低水準となる見込み。アーカンソー州の長粒種の収穫面積は、0.31百万ヘクタールと1977/78年度以来の低水準となる見込み。その他の主要長粒種生産州(ミシシッピ州、ミズーリ州、テキサス州、ルイジアナ州)でも、過去最低水準となっている。一方、主にカリフォルニア州で生産される中・短粒種の収穫面積は、約0.27百万ヘクタールと、前年に比べ1.4%増と予測されている。

同「Crop Progress」(2026.9.14)によれば、9月13日現在、主要生産6州の実産進捗率は62%と、前年同期(59%)を上回り、過去5年平均(50%)も12ポイント上回っている。

【貿易情報・その他】USDA「Rice Outlook: September 2026」(2026.9.15)によれば、2026/27 年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 16.2%増の 1.6 百万トンと史上最高の実見込み。輸入する長粒種米はタイ産のジャスミン米やインド、パキスタン産のバスマティ米が大部分を占めると見込まれている。2026/27 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 3.1%減の 2.5 百万トン の見込み。生産量の減少を受け、3年連続での減少となり、1985/86 年度以来の低水準となる見込み。

同「Exports Sales Query System」によれば、2026/27 年度のうち 2026 年8月の実輸出量は、前年同月(14.1 万トン)に比べ 30.5%増の 18.4 万トンで、輸出先国別には、コロンビア 4.5 万トン(24.7%)、ハイチ 2.8 万トン(15.2%)、日本 2.6 万トン(14.1%)の順(表)。種類別には、長粒種は実輸出量 13.0 万トンで、輸出先国別には、コロンビア 4.5 万トン(国別シェア 34.9%)、ハイチ 2.8 万トン(同 21.5%)、ホンジュラス 1.2 万トン(同 9.1%)。中・短粒種は実輸出量 5.4 万トンで、輸出先国別には、日本 2.6 万トン(47.9%)、韓国 1.2 万トン(21.6%)、ヨルダン 0.5 万トン(8.7%)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測から0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 31.2%減の 1.3 百万トンと4年ぶりの低水準となる見込み。

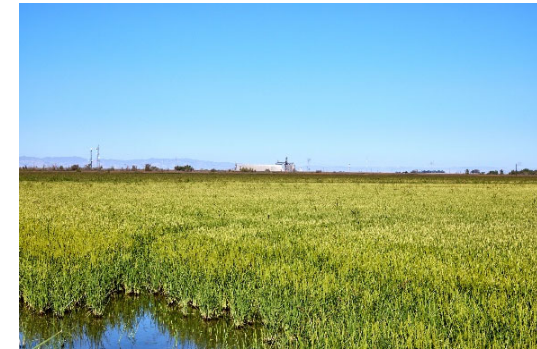
コメー米国

長粒種の生産量は7割、中・短粒種の生産量は3割を占め、長粒種の6割をアーカンソー州が、中・短粒種の7割をカリフォルニア州が占める。

(単位:百万精米トン)					
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年8月～27年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	7.1	6.6	5.0	▲ 0.01	▲ 23.5
消 費 量	5.3	5.2	4.7	-	▲ 10.0
輸 出 量	2.9	2.6	2.5	-	▲ 3.1
輸 入 量	1.6	1.4	1.6	-	16.2
期末在庫量	1.7	1.9	1.3	0.1	▲ 31.2
期末在庫率	20.9%	23.9%	17.8%	2.0	▲ 6.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.16	1.11	0.83	▲ 0.01	▲ 25.2
単収(割t/ha)	8.69	8.45	8.62	0.1	2.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)

写真 カリフォルニア州の短粒種の圃場



出穂期から開花期にあり、生育は良好。収穫はまだ始まっていない(9月9日撮影)。

撮影者:Kara Blake Chin

表 米国の全コメの実輸出先国と実輸出量

2025/26年度 (2025年8月～2026年7月)			2025/26年度 (2025年8月)			2026/27年度 (2026年8月)		
国	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国	輸出量 (万トン)	シェア (%)
日本	48.4	19.2	メキシコ	4.3	30.1	コロンビア	4.5	24.7
メキシコ	43.9	17.4	日本	3.0	21.4	ハイチ	2.8	15.2
ハイチ	33.4	13.3	ハイチ	2.4	16.6	日本	2.6	14.1
ホンジュラス	19.5	7.7	ベネズエラ	1.5	10.5	メキシコ	1.2	6.6
コロンビア	18.0	7.1	サウジアラビア	1.1	7.5	ホンジュラス	1.2	6.4
韓国	15.1	6.0	カナダ	0.8	5.7	韓国	1.2	6.4
その他	73.9	29.3	その他	1.2	8.3	その他	4.9	26.6
合計	252.2	100.0	合計	14.1	100.0	合計	18.4	100.0

資料:USDA「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2026/27 年度の生産量は、前年度から 0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積が安定し、単収が前年度を上回るとの予測から、前年度から 0.5%増の 147.0 百万トン(精米ベース)となる見込み。

中国国家统计局(2026.8.21)によれば、2026/27 年度の中国全土の一期作(早稲)の作付面積は、前年度から 0.14 万ヘクタール(0.03%)増の 474.4 万ヘクタール、単収は、前年度(6.02 粍トン/ヘクタール)から 0.8%減の 5.96 粍トン/ヘクタールとなる見込み。生産量(粍ベース)は 2,829.2 万トンと、前年度(2,851.3 万トン)と比べ 0.8%減となる見込み。

中国中央气象台「全国農業気象週報」(2026.9.14)によれば、9月6～12 日の期間、一期作は、黒龍江省、吉林省、遼寧省、湖北省、安徽省、四川省、雲南省で主に乳熟期に入り、重慶市では成熟期に達している地点もあった。江蘇省で出穂期が中心で、浙江省では穂ばらみ期から出穂期、貴州省では出穂期から乳熟期に進んだ。多くの産地では生育は順調であるが、四川省と雲南省の一部では過湿による収穫遅延のおそれがある。二期作晩稲は、広東省と広西チワン族自治区で節間伸長期、江西省でも節間伸長期から穂ばらみ期に進んだ。湖南省と浙江省では主に穂ばらみ期にあるが、湖南省では出穂期に入る地点も見られた。海南省では分けつ期から出穂期、福建省では節間伸長期が確認された。晩稲は、総じて節間伸長期から穂ばらみ期、出穂期への移行が順調に進んでおり、大きな気象被害は確認されていない。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度からわずかに 0.03%減少し、147.3 百万トンとなる見込み。

2026/27年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から2.0%減の4.0百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2026/27年度のうち2026年7月の輸入量は、前年同月(30.1万トン)に比べ3.6%減の29.0万トンとなっている。輸入先国別には、インド10.6万トン(36.4%)、ベトナム9.1万トン(31.4%)、パキスタン4.8万トン(16.5%)の順となっている(表)。

USDAによれば、2026/27年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、在庫が豊富であること等を受け、前年度から6.8%増の2.2百万トンの見込み。

2026/27年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から1.4%増の107.0百万トンの見込み。

コメー中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域(華南、華中、西南高原地域)で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年7月～27年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	145.3	146.3	147.0 (146.3)	-	0.5	
消 費 量	145.0	147.4	147.3 (146.5)	-	▲ 0.03	
輸 出 量	1.2	2.1	2.2 (2.1)	-	6.8	
輸 入 量	2.3	4.1	4.0 (3.6)	-	▲ 2.0	
期末在庫量	104.5	105.5	107.0 (103.7)	-	1.4	
期末在庫率	71.5%	70.6%	71.6% (69.8%)	-	1.0	

(参考)

収穫面積(百万ha)	29.01	29.00	29.00 (29.00)	-	-
単収(粍t/ha)	7.15	7.21	7.24 (5.07)	-	0.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026) (単収は精米t/ha)

表 中国のコメの輸入先国と輸入量

2025/26年度 (2025年7月～2026年6月)			2025/26年度 (2025年7月)			2026/27年度 (2026年7月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ミャンマー	128.0	31.4	ミャンマー	12.0	39.9	インド	10.6	36.4
ベトナム	113.5	27.8	タイ	8.7	29.0	ベトナム	9.1	31.4
タイ	52.1	12.8	ベトナム	4.5	14.9	パキスタン	4.8	16.5
インド	45.7	11.2	インド	2.8	9.4	ミャンマー	3.1	10.5
パキスタン	38.5	9.4	パキスタン	1.3	4.2	タイ	1.4	4.7
カンボジア	27.3	6.7	カンボジア	0.8	2.7	カンボジア	0.1	0.4
その他	3.0	0.7	その他	0.0	0.0	その他	0.0	0.0
合計	408.2	100.0	合計	30.1	100.0	合計	29.0	100.0

資料: 中国海関統計をもとに農林水産省で作成

< インド > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 4.6%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、前年度から 4.6%減、過去5年平均(141.5 百万トン)から 3.9%増の 147.0 百万トンとなる見込み。

インド農業・農民福祉省「作付進捗週報」によれば、2026/27 年度のカリフ米の作付面積は、7月 27 日時点で、前年同期(24.06 百万ヘクタール)から 2.57%減の 23.44 百万ヘクタールとなっていたが、モンスーンによる降雨が回復したことに伴い作付面積も拡大した。しかし、8月頭時点では、長期的な平均より約 12%降雨量が少ないことから、8月 28 日時点で、前年同期(42.85 百万ヘクタール)から 3.35%減の 41.41 百万ヘクタールとなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、生産量の減少を受け、前月予測から 3.0 百万トン下方修正されたものの、前年度から 3.7%増の 125.0 百万トンと予測されている。同「Grain and Feed Annual」(2026.4.2)によれば、当該増加は、主に食料安全保障向けの政府補助米の供給増、民間取引増及びインド政府が実施するエタノール混合プログラム(EBP)によるエタノール製造者への補助金付きコメ販売によるインド国内市場へのコメ供給量増が要因となっている。また、インド政府は人口増加と食料安全保障を確保するための政府による公的配給制度(PDS)による配給も継続しており、400 万トン増の過去最高の消費量となる見込み。

USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 8.7%増の 25.0 百万トンとなる見込み。同「Grain and Feed Update」(2026.6.18)によれば、インド産米の価格競争力の維持と国内の供給余剰を背景とする。

インド輸出入統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年6月の輸出量は、1,730.1 万トンと前年同期(1,788.3 万トン)に比べ 3.3%減となっている。輸出先国別には、ベナン 164.8 万トン(9.5%)、サウジアラビア 95.3 万トン(5.5%)、バングラデシュ 84.1 万トン(4.9%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測から 4.5 百万トン上方修正され、前年度からは 5.1%減の 55.5 百万トンとなる見込み。インド食料公社(Food Cooperation India)によれば、2026 年8月時点の期末在庫量は、40.20 百万トン(精米)と前年同期(37.97 百万トン)に比べ 5.9%増の見込み。USDA「Grain and Feed Update」(2026.8.28)によれば、インドの在庫量は、世界全体の在庫の約3割を占めると見込まれ、過去 10 年間の平均(2016/17 年度～2025/26 年度)である約 20%を上回る水準となっている。

コメーインド

カリフ米:雨季/モンスーン期(5～10 月)に栽培。
ラビ米:冬季の 11 月～翌3月に栽培。
夏季米:3～6月に栽培。

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年10月～27年9月)		
			予測値、OはIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	150.2	154.0	147.0 (154.0)	▲ 3.0	▲ 4.6
消 費 量	121.4	120.5	125.0 (125.2)	▲ 3.0	3.7
輸 出 量	22.8	23.0	25.0 (22.3)	-	8.7
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	48.0	58.5	55.5 (55.0)	4.5	▲ 5.1
期末在庫率	33.3%	40.8%	37.0% (37.3%)	3.7	▲ 3.8

(参考)
収穫面積(百万ha) 51.27 52.83 51.00 (51.50) ▲ 0.50 ▲ 3.5
単収(kg/ha) 4.39 4.37 4.32 (2.95) ▲ 0.05 ▲ 1.1
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026) (単収は精米t/ha)

写真 西ベンガル州カリフ米の圃場(全景)



生育初期(9月4日撮影)。

表 インドのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年6月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年6月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ベナン	216.7	9.4	ベナン	168.2	9.4	ベナン	164.8	9.5
バングラデシュ	149.9	6.5	バングラデシュ	114.3	6.4	サウジアラビア	95.3	5.5
サウジアラビア	139.8	6.1	サウジアラビア	112.4	6.3	バングラデシュ	84.1	4.9
ギニア	114.5	5.0	ギニア	93.3	5.2	トーゴ	81.0	4.7
トーゴ	113.9	5.0	コートジボワール	92.3	5.2	アラブ首長国連邦	79.4	4.6
コートジボワール	111.2	4.8	トーゴ	80.2	4.5	ギニア	78.9	4.6
その他	1,454.8	63.2	その他	1,127.7	63.1	その他	1,146.6	66.3
計	2,300.8	100.0	計	1,788.3	100.0	計	1,730.1	100.0

資料:インド農業・加工食品輸出振興局(APEDA)「Agri Xchange」をもとに農林水産省で作成

< ベトナム > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 0.4%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、コメ農家がより収益性の高い作物等(果物・野菜・養殖)へシフトする傾向が続き、収穫面積が前年度から 1.5%減少し、前年度から 0.4%減の 26.1 百万トンとなる見込み。

ベトナム総統計局(2026.9.3)によれば、2026年(USDA:2026/27年度)の全国の雨季米(ムア作)の作付面積は、8月20日時点で、前年同期に比べ4万5,600ヘクタール減の113万8,500ヘクタールとなっている。作付面積の減少は、生産性の低い水田の一部が、より収益性の高い一年生及び多年生作物、水産養殖、公共インフラや工業団地等の非農業用途へ転用されたことが主因とされる。具体的には、7,500ヘクタールが水産養殖、1,800ヘクタールが多年生作物、1,200ヘクタールがその他の一年生作物、6,700ヘクタールが非農業用途へ転換された。全国の雨季米(夏秋作)の作付面積は、前年同期に比べ2万9,100ヘクタール減の187万ヘクタールとなっている。北部で16万7,500ヘクタール(前年同期4,900ヘクタール減)、南部で170万2,500ヘクタール(同2万4,200ヘクタール減)となっているが、作付面積の減少は、ムア作と同様、農地が転用されたことによる。

アセアン食料安全保障情報システム(2026.8)によれば、北部では雨季米(夏秋作)は幼穂形成期にあり、ムア作は出穂期にある。局地的な熱波や豪雨により若干の悪影響が見られるものの、作柄は概ね良好である。南部では、雨季米(夏秋作)の収穫が進んでおり、作付面積170万ヘクタールのうち、36万ヘクタールが収穫済みである。一方、乾季米(秋冬作)や、ムア作を含むその他雨季米は、概ね良好な条件下で生育している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、消費者のコメ離れや生産量の減少等を受け、前年度から 0.7%減の 22.1 百万トンとなる見込み。

2026/27 年度の輸入量は、主にカンボジアからの粳米の輸出減を受け、前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、前年度から 16.1%増の 3.6 百万トンと過去最高を記録すると予測されている。

2026/27 年度の輸出量は、前月予測及び前年度からの変更はなく 8.1 百万トンとなる見込み。

ベトナム税関総局によれば、2025/26 年度のうち 2026 年1～8月の輸出量は、602.9 万トンと前年同期(635.4 万トン)に比べ 5.1%減。輸出先国別には、フィリピン 264.5 万トン(43.9%)、中国 102.7 万トン(17.0%)、ガーナ 68.6 万トン(11.4%)の順(表)。USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正、生産量の減少を受け前年度から 21.7%減の 1.8 百万トンとなる見込み。

コメベトナム

北部で二期作、南部で三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培。

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(27年1月～27年12月)		
			予測値、0はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.9	26.2	26.1 (28.2)	-	▲ 0.4
消 費 量	22.3	22.3	22.1 (23.2)	▲ 0.1	▲ 0.7
輸 出 量	8.1	8.1	8.1 (8.7)	-	-
輸 入 量	3.5	3.1	3.6 (3.5)	▲ 0.2	16.1
期末在庫量	3.4	2.3	1.8 (3.4)	▲ 0.3	▲ 21.7
期末在庫率	11.0%	7.6%	6.0% (10.5%)	▲ 1.0	▲ 1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.02	6.80	6.70 (6.98)	-	▲ 1.5
単収(kg/ha)	6.12	6.16	6.23 (4.00)	-	1.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026) (単収は精米/kg/ha)

写真 ジャポニカ米の圃場(ベトナム南部)



アンザン省にあるジャポニカ米の圃場。作付後100日目を迎え、乳熟期から糊熟期にある(9月12日撮影)。

表 ベトナムのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2025年1～12月)			2024/25年度 (2025年1～8月)			2025/26年度 (2026年1～8月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
フィリピン	320.7	39.8	フィリピン	290.7	45.8	フィリピン	264.5	43.9
コートジボワール	105.5	13.1	コートジボワール	75.4	11.9	中国	102.7	17.0
ガーナ	91.9	11.4	ガーナ	66.2	10.4	ガーナ	68.6	11.4
中国	74.7	9.3	中国	56.5	8.9	コートジボワール	40.0	6.6
マレーシア	51.5	6.4	マレーシア	31.8	5.0	マレーシア	34.6	5.7
セネガル	16.8	2.1	シンガポール	10.8	1.7	シンガポール	10.0	1.7
その他	145.1	18.0	その他	103.9	16.4	その他	82.5	13.7
計	806.3	100.0	計	635.4	100.0	計	602.9	100.0

資料:ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2026/27 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・インド等で下方修正されたものの、米国、カナダで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

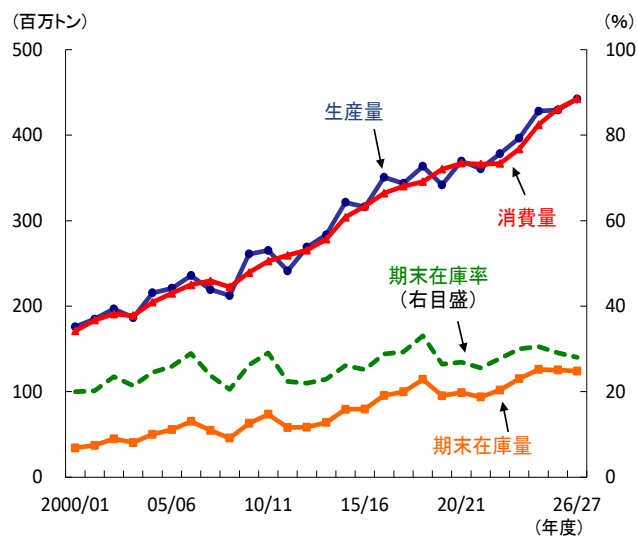
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国、カナダ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

◎世界の大豆需給

(単位:百万トン)

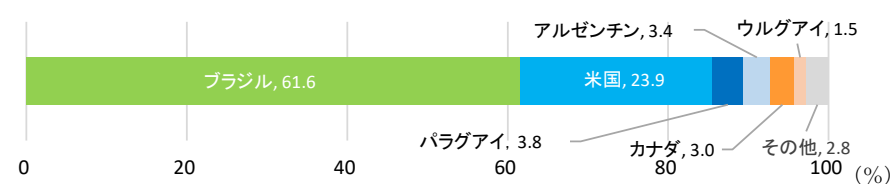
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	428.1	429.4	442.4	0.1	3.0
消 費 量	412.1	430.6	442.4	0.4	2.7
うち搾油用	359.2	374.3	385.2	0.5	2.9
輸 出 量	184.3	187.2	191.6	1.2	2.3
輸 入 量	179.2	187.8	190.4	1.2	1.4
期末在庫量	126.0	125.3	124.0	▲ 0.2	▲ 1.0
期末在庫率	30.6%	29.1%	28.0%	▲ 0.1	▲ 1.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 September 2026)

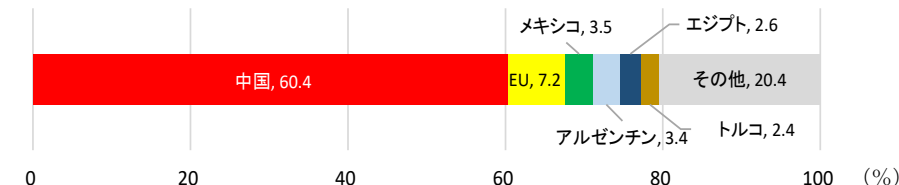
○ 2026/27 年度 世界の大豆の生産量(442.4 百万トン)



○ 2026/27 年度 世界の大豆の輸出量(191.6 百万トン)



○ 2026/27 年度 世界の大豆の輸入量(190.4 百万トン)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 2026/27 年度の生産量は前年度から 6.4%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、収穫面積の増加を受け前年度から 6.4%増、過去5年平均(117.2 百万トン)から 5.3%増の 123.4 百万トンと史上最高の見込み。同「Crop Progress」(2026.9.14)によれば、9月 13 日現在の落葉進捗率は 44%(前年同期 38%、過去5年平均 37%)、収穫進捗率は 6%(前年同期 5%、過去5年平均 3%)となっている。作柄評価は「良～優良」の割合が 58%と、前年同期(63%)を下回っている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測から 0.03 百万トン上方修正され、バイオディーゼル需要の増加等を受け前年度から 4.5%増の 78.7 百万トンと史上最高の見込み。同「Oil Crops Outlook」(2026.9.15)によれば、圧搾量は 75.7 百万トンの見込みであり、引き続き大豆油・大豆粕の強い需要に支えられている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、生産量の引上げを受け前月予測から 0.7 百万トン上方修正され、生産量の増加を受け前年度から 10.9%増の 45.9 百万トンの見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度の輸出量は、前年度(5,001.5 万トン)に比べ 18.0%減の 4,099.2 万トン。輸出先国別には、中国 1,236.2 万トン(30.2%)、エジプト 511.8 万トン(12.5%)、メキシコ 492.0 万トン(12.0%)の順となっている(表)。

国際穀物理事会(IGC)によれば、9月8日現在の輸出価格は、米国は前月(8月7日)から 56 ドル/トン上昇し 530 ドル/トン、ブラジルは前月から 53 ドル/トン上昇し 540 ドル/トン、アルゼンチンは前月から 59 ドル/トン上昇し 510 ドル/トンとなった(図)。USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」(2026.9.11)によれば、8月後半における米国の大豆輸出価格は、多くの生産地域での乾燥による作柄悪化や、堅調な輸出需要を受け、2023 年 11 月以来の 525 ドル/トンを上回る水準となった。ブラジル及びアルゼンチンの輸出価格も概ね米国に連動して上昇傾向で推移した。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、消費量及び輸出量の増加を受け前年度から 4.7%減となるものの、過去5年平均(8.3 百万トン)から 1.2%増の 8.4 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 0.8 ポイント減の 6.8%となる見込み。

大豆－米国

(5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年9月～27年8月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	119.1	116.0	123.4	0.4	6.4
消 費 量	68.8	75.3	78.7	0.03	4.5
うち搾油用	66.6	72.3	75.7	-	4.7
輸 出 量	51.5	41.4	45.9	0.7	10.9
輸 入 量	0.8	0.7	0.7	-	-
期末在庫量	8.8	8.9	8.4	▲ 0.3	▲ 4.7
期末在庫率	7.3%	7.6%	6.8%	▲ 0.3	▲ 0.8

(参考)

収穫面積(百万ha)	34.89	32.55	34.76	0.05	6.8
単収(t/ha)	3.41	3.56	3.55	0.01	▲ 0.3

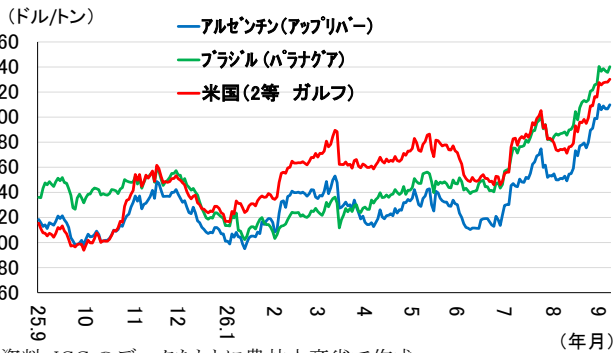
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)

表 米国の大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)			2025/26年度 (2025年9月～2026年8月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	2,232.5	44.6	中国	1,236.2	30.2
メキシコ	498.5	10.0	エジプト	511.8	12.5
エジプト	369.2	7.4	メキシコ	492.0	12.0
ドイツ	273.1	5.5	インドネシア	270.1	6.6
イタリア	210.0	4.2	日本	218.3	5.3
その他	1,418.0	28.4	その他	1,370.8	33.4
合計	5,001.5	100.0	合計	4,099.2	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

図 各国の大豆輸出価格(FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

＜ ブラジル ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 3.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 3.0%増、過去5年平均(160.0 百万トン)から 16.3%増の 186.0 百万トンと史上最高の見込み(図)。

同「Oilseeds and Products Update」(2026.7.6)によれば、生産量の増加の要因には、作付面積の増加のほか、栽培技術等の改善、これまでに行われた技術や機械への投資が挙げられる。また、作付面積の増加の大部分は、マトピバ地域(マラニオン州、トカンティンス州、ピアウイ州、バイーア州)が占めるとみられる。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2026.9.15)によれば、2025/26 年度の実産量は、作付面積及び単収の増加を受け前年度から 5.2%増の 180.4 百万トンの見込み。ほとんどの州で収穫は終了した。パラナ州及びマット・グロソ州では、2026/27 年度の作付けが開始されている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 4.8%増の 69.6 百万トンと史上最高の見込み。

同「Oil Crops Outlook」(2026.8.14)によれば、過去5年間、主要な大豆生産国及び輸入国では、設備稼働率の上昇と処理能力の拡大により、大豆搾油量が増加を続けている。ブラジルの大豆搾油量は、2026/27 年度に過去最高の 65.0 百万トンに達する見通しである。

同「Biofuels Annual」(2026.9.2)によれば、ブラジルは、現在、バイオディーゼルの混合義務の比率を 15%(B15)としており、引上げに向けた試験が実施されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加を受け前年度から 2.6%増の 118.0 百万トンと史上最高の見込み。ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年8月の輸出量は、前年同期(9,579.8 万トン)に比べ 11.8%増の 10,709.8 万トン。輸出先国別には、中国 7,754.4 万トン(72.4%)、スペイン 417.5 万トン(3.9%)、タイ 365.3 万トン(3.4%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量及び輸出量の増加を受け前年度から 2.1%減となるものの、過去5年平均(33.9 百万トン)からは 8.9%増の 36.9 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 1.1 ポイント減の 19.7%となる見込み。

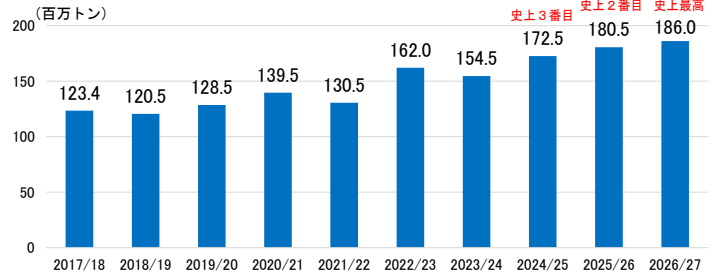
大豆－ブラジル

(9～12 月に作付けされ、1～4 月に収穫される。)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	172.5	180.5 (180.4)	186.0 (-)	- (-)	3.0 (-)
消 費 量	62.2	66.4 (65.9)	69.6 (-)	- (-)	4.8 (-)
うち搾油用	58.2	62.0 (62.1)	65.0 (-)	- (-)	4.8 (-)
輸 出 量	103.1	115.0 (116.2)	118.0 (-)	- (-)	2.6 (-)
輸 入 量	0.7	0.9 (0.9)	0.8 (-)	- (-)	▲11.1 (-)
期末在庫量	37.7	37.7 (9.1)	36.9 (-)	- (-)	▲ 2.1 (-)
期末在庫率	22.8%	20.8% (5.0%)	19.7% (-)	- (-)	▲1.1 (-)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	47.40	48.50 (48.61)	50.00 (-)	- (-)	3.1 (-)
単収(t/ha)	3.64	3.72 (3.71)	3.72 (-)	- (-)	- (-)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
CONAB「Graos」(15 September 2026)※()書き、なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

図 ブラジルの大豆の実産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

表 ブラジルの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年8月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年8月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	7,968.8	77.3	中国	7,291.4	76.1	中国	7,754.4	72.4
スペイン	396.3	3.8	スペイン	383.4	4.0	スペイン	417.5	3.9
タイ	365.5	3.5	タイ	335.8	3.5	タイ	365.3	3.4
トルコ	184.8	1.8	トルコ	184.8	1.9	トルコ	293.8	2.7
イラン	146.3	1.4	イラン	146.3	1.5	パキスタン	236.6	2.2
その他	1,252.1	12.1	その他	1,238.3	12.9	その他	1,642.3	15.3
合計	10,313.8	100.0	合計	9,579.8	100.0	合計	10,709.8	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 12.7%増加する見込み(USDA)

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、単収の引上げを受け前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、収穫面積及び単収が増加することから前年度から 12.7%増の 7.8 百万トンとなる見込み(図)。一方、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.8.20)によれば、2026/27 年度の実産量は、7月予測からの変更はなく、前年度から 8.4%増の 7.5 百万トンとなる見込み。2026/27 年度の作付面積は、前年度から 3.1%増、過去5年平均(223.0 万ヘクタール)から 8.2%増の 241.2 万ヘクタールとなる見込み。他作物の投入コスト上昇及び価格下落による収益性低下により作付けが大豆へシフトしたとみられる。7月末時点でカナダ東部の生育状況は安定しており、オンタリオ州及びケベック州の単収は平年を上回ると予測されている。同2州でカナダの大豆作付面積の約 65%を占める。マニトバ州ではシーズン序盤に厳しい生育条件に見舞われたが、同州農業局及び大豆生産者によれば、最近数週間で生育が急速に進み、全体的に生育が改善している。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、搾油用需要の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度から 3.3%増の 2.4 百万トンとなる見込み。一方、AAFC によれば、2026/27 年度の消費量は、7月予測からの変更はなく、飼料用消費等の増加を受け前年度から 7.3%増の 2.2 百万トンとなる見込み。このうち、搾油用消費量は、前年度と同水準、過去5年平均(1.74 百万トン)をわずかに上回り 1.8 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、生産量の引上げを受け前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度から 7.8%増の 5.7 百万トンとなる見込み(図)。一方、AAFC によれば、2026/27 年度の輸出量は、7月予測からの変更はなく、前年度から 1.8%増の 5.6 百万トン。

カナダ統計局によれば、2025/26 年度の輸出量は、前年度(547.9 万トン)に比べ 4.1%減の 525.3 万トン。輸出先国別には、中国 199.0 万トン(37.9%)、アルジェリア 52.7 万トン(10.0%)、オランダ 52.6 万トン(10.0%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、輸出量の引上げ等を受け前月予測からわずかに下方修正され、生産量の増加等により前年度から 35.7%増の 0.4 百万トンとなるものの、依然として逼迫した水準となる見込み。一方、AAFC によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、7月予測からの変更はなく、前年度から 35.0%増の 0.4 百万トンとなる見込み。

大豆－カナダ

(5～6月に作付けされ、9～11月に収穫される。)

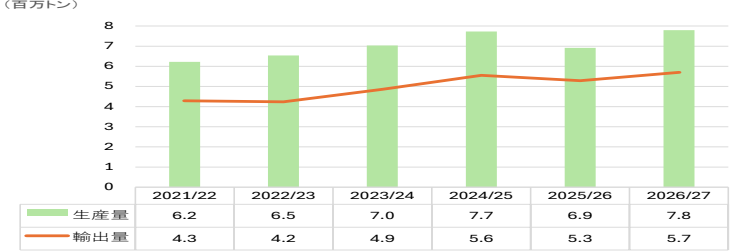
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年8月～27年7月)			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	7.7	6.9 (6.9)	7.8 (7.5)	0.4 (-)	12.7	(8.4)
消 費 量	2.4	2.3 (2.1)	2.4 (2.2)	0.1 (-)	3.3	(7.3)
うち搾油用	1.7	1.7 (1.8)	1.7 (1.8)	0.1 (-)	-	(-)
輸 出 量	5.6	5.3 (5.5)	5.7 (5.6)	0.3 (-)	7.8	(1.8)
輸 入 量	0.3	0.4 (0.3)	0.4 (0.4)	0.1 (-)	4.1	(33.3)
期末在庫量	0.6	0.3 (0.3)	0.4 (0.4)	▲0.02 (-)	35.7	(35.0)
期末在庫率	7.5%	3.9% (3.8%)	4.9% (4.9%)	▲0.6 (-)	1.1	(1.2)

(参考)

収穫面積(百万ha)	2.29	2.32 (2.32)	2.40 (2.39)	- (-)	3.4	(2.9)
単収(t/ha)	3.37	2.98 (2.98)	3.25 (3.14)	0.17 (-)	9.1	(5.4)

資料:USDA「PS&D」(11 September 2026)
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(20 August 2026)※()書き

図 カナダの大豆の実産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作成

表 カナダの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年 8 月～2025年 7 月)			2025/26年度 (2025年 8 月～2026年 7 月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	104.2	19.0	中国	199.0	37.9
イラン	83.9	15.3	アルジェリア	52.7	10.0
アルジェリア	52.1	9.5	オランダ	52.6	10.0
米国	42.2	7.7	イラン	43.1	8.2
日本	39.3	7.2	日本	33.1	6.3
インドネシア	31.8	5.8	米国	30.8	5.9
その他	194.6	35.5	その他	114.1	21.7
合計	547.9	100.0	合計	525.3	100.0

資料:カナダ統計局のデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2026/27 年度の輸入量は前年度から 1.8%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収増を受け前年度から 0.5%増、過去5年平均(19.8 百万トン)から 6.0%増の 21.0 百万トンと史上最高の見込み。

中国中央气象台「全国農業気象週報」(2026.9.14)によれば、9月6～12 日の期間、黒龍江省、吉林省、遼寧省、内モンゴル自治区、河北省、山西省、河南省、江蘇省で主に子実肥大期にあった。安徽省では、着莢期から子実肥大期に進んだ。東北部では適度な土壌水分と平年並みの日照及び気温となり、子実肥大に適した環境となった。また河南省、河北省、江蘇省、安徽省などでも日照及び気温は概ね良好であった。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析 2026 年9月号」(2026.9.11)によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収増を受け前年度(20.91 百万トン)から 0.19%増の 20.95 百万トンと予測されている。東北地域の大部分では日照及び気温条件が良好で、土壌水分の状態も適しており、大豆の生育促進に有利となっていることから、新穀豊作への期待が高まっている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、家禽及び水産養殖部門の成長や養豚部門での飼料安定を受け、前年度から 1.6%増の 136.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.8%増の 115.0 百万トンと史上最高の見込み(図)。報道情報によれば、米国産大豆については、2025 年 10 月の韓国釜山で行われた会談を受け購入が再開され、2026 年8月 13 日時点で、中国は 2025/26 年度の購入約束分として 1,290 万トンを購入又は引き渡しを受け、2026/27 年度に引き渡される新穀 580 万トンを追加で確保した。更に 380 万トンが購入者非公開で販売され、中国の国有企業である可能性が示唆されている。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年7月の輸入量は、前年同期(8,423.7 万トン)に比べ 3.8%増の 8,743.6 万トン。輸入先国別には、ブラジル 6,315.3 万トン(72.2%)、米国 1,029.4 万トン(11.8%)、アルゼンチン 920.7 万トン(10.5%)の順(表)。中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2026 年7月号」によれば、7月の国際的な大豆価格は、中東情勢が原油価格を押し上げ、バイオ燃料の需要見通しを強めたことが上昇を牽引した。国内価格は前月(4,940 元/トン)から 20 元/トン下落し 4,920 元/トンとなった。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量の増加を受け前年度から 0.2%減となるものの、過去5年平均(37.9 百万トン)から 16.7%増の 44.3 百万トンとなる見込み。

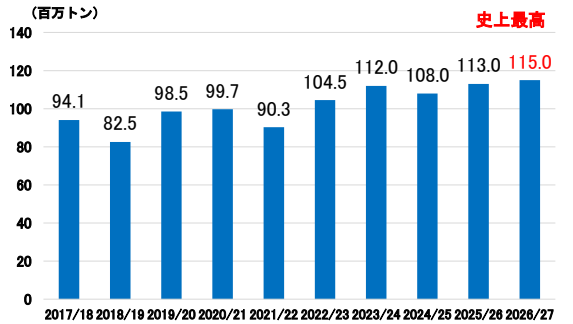
大豆－中国

(4～6月に作付けされ、9～10 月に収穫される。)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	20.7	20.9	21.0 (21.0)	-	0.5
消 費 量	127.4	133.9	136.0 (139.5)	-	1.6
うち搾油用	103.5	109.0	111.0 (115.0)	-	1.8
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 23.1
輸 入 量	108.0	113.0	115.0 (115.5)	-	1.8
期末在庫量	44.5	44.4	44.3 (48.9)	-	▲ 0.2
期末在庫率	34.9%	33.1%	32.5% (35.0%)	-	▲ 0.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.33	10.30	10.30 (10.25)	-	-
単収(t/ha)	2.00	2.03	2.04 (-)	-	0.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026)

図 中国の大豆の輸入量の推移



資料: USDA「PS&D」(2026.9.11)をもとに農林水産省で作

表 中国の大豆の輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年7月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年7月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	7,610.8	69.6	ブラジル	5,466.4	64.9	ブラジル	6,315.3	72.2
米国	2,440.9	22.3	米国	2,418.1	28.7	米国	1,029.4	11.8
アルゼンチン	476.6	4.4	アルゼンチン	254.2	3.0	アルゼンチン	920.7	10.5
ウルグアイ	244.3	2.2	ウルグアイ	131.7	1.6	ウルグアイ	199.5	2.3
カナダ	118.6	1.1	カナダ	114.9	1.4	カナダ	180.6	2.1
ロシア	45.0	0.4	ロシア	37.6	0.4	ロシア	89.8	1.0
その他	2.1	0.0	その他	0.7	0.0	その他	8.4	0.1
合計	10,938.3	100.0	合計	8,423.7	100.0	合計	8,743.6	100.0

資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

＜ アルゼンチン ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 1.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.0% 増、過去5年平均(43.5 百万トン)から 14.8%増の 50.0 百万トンとなる見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所(2026.9.9)によれば、北部の農業地域において病害虫であるヨコバイが発生しており、とうもろこしから大豆に作付けがシフトするとみられる。

USDA「Oilseeds and Products Update」(2026.7.6)によれば、2025/26 年度は、主要産地の大部分で、生育に重要な時期である3月下旬から4月にかけて、十分な降雨があったことにより、高水準の単収となった。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2026.7.23)によれば、2025/26 年度の大豆の収穫は終了した。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加を受け前年度から 2.6%増の 49.7 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、輸出税一時撤廃(表1)により中国向け輸出が大幅増となった前年度から 28.3%減の 6.5 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年7月の輸出量は、前年同期(402.9 万トン)に比べ 90.9%増の 769.2 万トン。輸出先国別には、中国 728.0 万トン(94.6%)、米国 9.9 万トン(1.3%)、ペルー 5.8 万トン(0.8%)の順となっている(表2)。

USDA「Oilseeds and Products Update」(2026.7.6)によれば、アルゼンチン政府は、2026 年6月3日、政令 423/2026 号にて、小麦及び大麦の輸出税を即時引き下げるとともに、2027 年1月から 2028 年 12 月にかけて、大豆、大豆製品(大豆油・大豆粕)、とうもろこし等の輸出税を段階的に引き下げると発表した(表1)。これらの引下げは同国の財政状況に応じて実施されることとなっている。輸出税の引下げは、直接的に農家の収入を増加させ、収益性の向上をもたらすとみられ、現地の農業界は今回の発表を歓迎している。

USDA によれば、2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、アルゼンチン最大の輸入先国であるパラグアイにおける生産量減少を受け、前年度から 11.0%減の 6.5 百万トンとなる見込み。

2026/27 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引上げを受け前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、生産量の増加及び輸出量の減少を受け前年度から 1.7%増、過去5年平均(22.7 百万トン)から 7.8%増の 24.5 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 1.7 ポイント増の 43.6%となる見込み。

大豆－アルゼンチン

(10～1月に作付けされ、3～7月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	51.1	49.5	50.0 (51.0)	-	1.0
消 費 量	48.9	48.4	49.7 (50.8)	-	2.6
うち搾油用	43.2	42.0	43.0 (44.3)	-	2.4
輸 出 量	7.9	9.0	6.5 (6.1)	-	▲ 28.3
輸 入 量	6.3	7.3	6.5 (6.2)	-	▲ 11.0
期末在庫量	24.7	24.1	24.5 (6.1)	0.3	1.7
期末在庫率	43.4%	41.9%	43.6% (10.8%)	0.4	1.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	17.46	16.20	17.10 (17.15)	-	5.6
単収(t/ha)	2.93	3.06	2.92 (-)	-	▲ 4.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 September 2026)
IGC「Grain Market Report」(20 August 2026)

表1 アルゼンチンの輸出税率の推移(2022 年 12 月 30 日以降)

(単位:%)

政 令	公 布 日	小麦	とうもろこし	大豆	大豆油 大豆粕
政令851/2021号	2022年12月30日	12	12	33	31
政令38/2025号	2025年1月27日	9.5	9.5	26	24.5
政令439/2025号	6月27日	9.5	12	33	31
政令526/2025号	7月31日	9.5	9.5	26	24.5
政令682/2025号	9月22日	0	0	0	0
政令526/2025号	9月24日(※)	9.5	9.5	26	24.5
政令877/2025号	12月12日	7.5	8.5	24	22.5
政令423/2026号	2026年6月3日	5.5	2027年1月～2028年12月		
			5.5に段階的に 引下げ	15に段階的に 引下げ	14に段階的に 引下げ

※9月に一時的に輸出税を撤廃したもの、設定した輸出額の上限に達したため、以前の輸出税が復活した。
資料:アルゼンチン政府官報をもとに農林水産省で作成

表2 アルゼンチンの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年7月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年7月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	681.4	86.6	中国	327.0	81.2	中国	728.0	94.6
米国	15.9	2.0	米国	12.2	3.0	米国	9.9	1.3
イラク	11.2	1.4	チリ	7.2	1.8	ペルー	5.8	0.8
チリ	9.0	1.1	カナダ	1.9	0.5	チリ	4.5	0.6
カナダ	1.9	0.2	ペルー	0.7	0.2			
その他	67.2	8.5	その他	53.9	13.4	その他	21.1	2.7
合計	786.6	100.0	合計	402.9	100.0	合計	769.2	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省で作成。なお、その他には秘匿「Confidential」の数量を含む。

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について (2026/27年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	26年6月～27年5月	26年9月～27年8月	26年8月～27年7月	26年9月～27年8月
カナダ	26年8月～27年7月			26年8月～27年7月
豪州	26年10月～27年9月		27年3月～28年2月	
EU	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月		
中国	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月
ロシア	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月		26年9月～27年8月
ウクライナ	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月		
ブラジル		27年3月～28年2月	27年4月～28年3月	26年10月～27年9月
アルゼンチン	26年12月～27年11月	27年3月～28年2月		26年10月～27年9月
タイ			27年1月～12月	
インド	26年4月～27年3月		26年10月～27年9月	
ベトナム			27年1月～12月	

※市場年度は、各国で概ね作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。

例えば、2026/27年度は、米国の小麦では2026年6月～2027年5月、ブラジルのとうもろこしでは2027年3月～2028年2月です。

なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216 メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772 メトリックトン	大麦	
	0.025401 メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515 メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359 メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469 ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16 ヘクタール	タイ
1 畝(ムー)	0.0667 ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536 リットル		英国
1ガロン	3.785 リットル		米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏(°F)	摂氏 (°C) = (°F - 32) ÷ 1.8		

ク ロ ッ プ カ レ ン ダ ー (小 麦)

播種
 収穫
 Market year

国名	2025/26年度 生産量	作期	N年												N+1年											
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
EU 	145.1百万トン (シェア17.2%)	冬小麦																								
		春小麦																								
中国 	140.1百万トン (シェア16.6%)	冬小麦																								
		春小麦																								
インド 	117.9百万トン (シェア14.0%)																									
ロシア 	90.3百万トン (シェア10.7%)	冬小麦																								
		春小麦																								
米国 	54.0百万トン (シェア6.4%)	冬小麦																								
		春小麦																								
カナダ 	40.0百万トン (シェア4.7%)	春小麦																								
		冬小麦																								
豪州 	36.0百万トン (シェア4.3%)																									

資料:USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2026.5)。※作期の記載順は生産量の多い順である。

ク ロ ッ プ カ レ ン ダ ー (コ メ)

播種
 収穫
 Market year

国名	2025/26年度 生産量	作期	N年												N+1年											
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
インド  152.0百万トン (シェア28.0%)	カリフ(雨期)																									
	ラビ(乾期)																									
中国  146.3百万トン (シェア27.0%)	一期作																									
	二期作遅植え																									
	二期作早植え																									
バングラデシュ  37.7百万トン (シェア6.9%)	ボロ種																									
	アマン種																									
	アウス種																									
インドネシア  33.8百万トン (シェア6.2%)	第1期作																									
	第2期作																									
	第3期作																									
ベトナム  26.2百万トン (シェア4.8%)	南部冬春作																									
	北部冬春作																									
	南部夏秋作早植え																									
	北部冬作Lua Mua																									
	南部夏秋作遅植え																									
タイ  20.7百万トン (シェア3.8%)	雨期作																									
	乾期作																									

資料:USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2026.5)。※作期の記載順は生産量の多い順である。

ク ロ ッ プ カ レ ン ダ ー (と う も ろ こ し)

播種
 収穫
 Market year

国名	2025/26年度 生産量	作期	N年												N+1年												N+2年	
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
 米国 432.3百万トン (シェア32.9%)																												
 中国 301.2百万トン (シェア22.9%)		北部																										
		南部																										
 ブラジル 135.0百万トン (シェア10.3%)		第2期作																										
		第1期作																										
 アルゼンチン 59.0百万トン (シェア4.5%)																												
 EU 56.8百万トン (シェア4.3%)																												
 インド 46.2百万トン (シェア3.5%)		カリフ(雨期)																										
		ラビ(乾期)																										

資料:USDA「Crop Calendars」、 「PS&D」(2026.5)。※作期の記載順は生産量の多い順である。

ク ロ ッ プ カ レ ン ダ ー (大 豆)

播種
 収穫
 Market year

国名	2025/26年度 生産量	作期	N年												N+1年											
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ブラジル 	180.0百万トン (シェア42.1%)																									
米国 	116.0百万トン (シェア27.1%)																									
アルゼンチン 	48.0百万トン (シェア11.2%)	第1期作																								
		第2期作																								
中国 	20.9百万トン (シェア4.9%)																									

資料:USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2026.5)。※作期の記載順は生産量の多い順である。

ク ロ ッ プ カ レ ン ダ ー (な た ね)

播種
 収穫
 Market year

国名	2025/26年度 生産量	N年												N+1年											
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
カナダ 	22.0百万トン (シェア23.0%)																								
EU 	20.5百万トン (シェア21.5%)																								
中国 	16.0百万トン (シェア16.8%)																								
インド 	12.0百万トン (シェア12.6%)																								
豪州 	7.7百万トン (シェア8.0%)																								
ロシア 	5.5百万トン (シェア5.8%)																								
ウクライナ 	3.5百万トン (シェア3.7%)																								

資料:USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2026.5)。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

- 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2026 年9月中旬までに発表した情報を引用しています（最新年度は 2026/27 年度です）。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

<https://www.usda.gov/about-usda/reports-and-data/agency-reports>

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<https://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain: World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds: World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

- 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

・食料需給表: <https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>

・食品の価格動向: <https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>

・米に関するマンスリーレポート: <https://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

・食料需給見通し(農林水産政策研究所): <https://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト): <https://www.alic.go.jp/>

ア 砂糖、でんぷん: <https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>

イ 野菜: <https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>

ウ 畜産物: <https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関(英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO) : <https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会 (IGC) : <https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業・水産業分野):
<https://www.oecd.org/en/topics/agriculture-and-fisheries.html>
- ・農業市場情報システム (AMIS) : <http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA) : <https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB) : <https://www.gov.br/conab/pt-br>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC) :
<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES) : <http://www.agriculture.gov.au/abares>

- データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されますので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、各国で概ね作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。以下サイトの「Reference Data」を参照ください。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。
- ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本資料の引用等につきましては、出所(農林水産省発行「食料安全保障月報」)を併記願います。
- 本資料の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先 農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室
TEL:03-6744-2368(直通)

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。



https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html